高槻市文化財調査概要Ⅵ

嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・6

1982

高槻市教育委員会

嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・6　正誤表

頁	箇　所	誤	正
4	下から3行目	遺構・遺物はまっく検出	遺構・遺物はまったく検出
5	下から6行目	護岸工事の堀り方と	護岸工事の掘り方と
7	上から12行目	しかし、石例の掘り方を	しかし、石列の掘り方を
9	上から12行目	調査区中央に試堀壕を	調査区中央に試掘壕を
10	上から4行目	SDO1	SD01
20	下から6行目	中央部に石の抜きとった	中央部に石を抜きとった
21	上から9行目	床面上には、挙大の礫を	床面上には、拳大の礫を
〃	上から22行目	堤瓶	提瓶
22	上から2行目	24. 塚脇C－7号の調査	24. 塚脇C－7号墳の調査
23	下から3行目	挙大の亜角礫	拳大の亜角礫
24	上から14行目	くおさめいる。	くおさめる。
25	上から2行目	挙大の礫	拳大の礫
26	上から16行目	扇状地の末端部に立地し、	扇状地の末端部に立地し、
27	下から1行目	北西コーナから	北西コーナーから
28	下から9行目	中期の竪穴住民址1棟	中期の竪穴住居址1棟
〃	下から3行目	不定形な随円形を呈する	不定形な楕円形を呈する
30	下から12行目	供献土器に酷示している	供献土器に酷似している
32	上から9行目	口径が後径を凌いでいる	口径が口径を凌いでいる
33	上から17行目	距離差であろう。	距離差になろう。
〃	下から14行目	有基石鏃	有茎石鏃
〃	下から　5行目	原石から認意に	原石から任意に
34	下から17行目	閃緑玲岩である	閃緑玢岩である
〃	下から9行目	閃緑玲岩であり	閃緑玢岩である
37	下から13行目	資料が亡しく	資料が乏しく
〃	下から12行目	掘立住建物跡は、	掘立柱建物跡は、
図版第77　右上		上田部遺跡東口調査壕	上田部遺跡東区調査壕

はしがき

本市に所在する史跡・嶋上郡衙跡附寺跡や史跡・今城塚古墳の周辺は、除々にではありますが、迫る開発によりその歴史的空間が狭まりつつあります。この開発にともなう調査は漸次実施し、それぞれの『史跡』について、貴重な成果を積み重ねています。

今年度の調査の内、芥川廃寺の北側での調査では、同寺の成立に関する貴重な成果を得ることができました。この成果とこれまでの資料とを合せ考えるとき、郡衙中枢域の様相の解明に一段と明確さを加えることができるものと考えます。

このような中、今年度から2ケ年にわたつて実施する安満遺跡の調査は、同遺跡の史跡指定予定にかかる確認調査であります。この調査は地元所有者並びに文化庁・大阪府教育委員会・高槻市教育委員会との協議の結果、実施に至つたもので、今年度は2ケ所の調査区について調査を実施いたしました。その結果、これまで積み重ねた同遺跡の資料に、さらに加えるべき貴重な資料を得ることができました。狭小な調査区ではありましたが、今後、淀川北岸での農耕社会の動きを解明する上で重要な意味を含んでいると考えます。

ここに、今年度実施しました発掘調査の結果をまとめ、多くの方々のご教示をあおぐとともに、調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝する次第であります。

高槻市教育委員会

社会教育課長　森　　健　一

目　次

Ⅰ　嶋上郡衙跡 …… 1
Ⅱ　新池窯跡 …… 5
Ⅲ　番山古墳 …… 5
Ⅳ　富田遺跡 …… 7
Ⅴ　郡家今城遺跡 …… 12
Ⅵ　郡家本町遺跡 …… 13
Ⅶ　上田部遺跡 …… 13
Ⅷ　天神山遺跡 …… 15
Ⅸ　大蔵司遺跡 …… 15
Ⅹ　塚脇古墳群 …… 19
Ⅺ　安満遺跡 …… 26
Ⅻ　梶原寺跡 …… 35
ま　と　め …… 36

嶋上郡衙跡他関連遺跡調査一覧

No.	地区	調査地	面積	申請者
1	5－Ⅰ地区	郡家本町751-2	440㎡	服部　恒
2	16－Ⅰ地区	郡家新町313-1	21	㈱ゼネラル石油
3	24－D・H地区	郡家新町302他4筆	90	高槻市水政部
4	86－M地区	川西町1丁目1016他	2,797	高槻市建設部
5	28－F地区	清福寺町13－4	115	高槻市消防本部
6	67－I・M地区	川西町1丁目1021-3	278	中森幸太郎
7	新池窯跡	上土室町	1,500	向井龍一
8	番山古墳	上土室町5丁目459-1他	250	土室実行組合
9	〃	上土室町5丁目462他	108	高槻市都市整備部
10	富田遺跡	富田町6丁目2667	995	医療法人庸愛会
11	〃	富田町4丁目3070	36	普門寺
12	〃	富田町4丁目2491-2	107	森博幸
13	〃	富田町6丁目2525-3	137	吉田秀一
14	〃	富田町6丁目2541	256	上下卓三
15	〃	富田町3丁目2768	352	西田庄一
16	郡家今城遺跡	氷室町1丁目781-29	100	近藤敬三
17	郡家本町遺跡	郡家本町1000-27	189	植上善弘
18	〃	郡家本町977	277	長谷川助次郎・弘
19	上田部遺跡	上田辺町	155	高槻市
20	天神山遺跡	天神町1丁目1238	1,051	阪田栄光
21	大蔵司遺跡	宮ノ川原4丁目601－1	450	氏原保雄
22	〃	浦堂2丁目590-3他	15,237	大阪府住宅供給公社
23	塚脇C－6号墳	大字原1－3－9	106,600	グンゼ不動産㈱
24	塚脇C－7号墳	大字原1－3－11	106,600	〃
25	塚脇D－1号墳	大字原1－3－3	22,368	池尻興産㈱
26	塚脇E－1号墳	大字原1－3－29	106,600	グンゼ不動産㈱
27	安満遺跡	八丁畷町321-1、367-1	200	高槻市教育委員会
28	〃	八丁畷町3－3	437	大阪医科大学
29	梶原寺跡	梶原1丁目382-2	243	長谷川正昭

例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が、国庫補助事業（総額13,000,000円）として計画し、調査を実施した高槻市所在、史跡・嶋上郡衙跡附寺跡周辺部及び郡衙関連遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、高槻市教育委員会・市立埋蔵文化財調査センター所長冨成哲也指導のもと、技術吏員大船孝弘、橋本久和、森田克行が担当し、大阪府教育委員会の助力を得て、昭和56年5月13日着手し、昭和57年3月31日、事業を終了した。
3. 本書の作成にあたっては、写真撮影を鐘ケ江一朗氏に、遺物整理を、武村雅一、山本敏幸、中井節子、白銀良子の各氏に援助を得た。記して感謝の意を表します。
4. 調査の実施にあたっては、服部恒、中森幸太郎、向井龍一、森博幸、吉田秀一、上下卓三、西田庄一、近藤敬三、植上善弘、長谷川助次郎、長谷川弘、阪田栄光、氏原保雄、長谷川正昭、樋口正一、樋口彦一、㈱ゼネラル石油、土室実行組合、医療法人庸愛会、普門寺、大阪府住宅供給公社、グンゼ不動産㈱、池尻興産㈱、大阪医科大学、高槻市などの土地所有者をはじめ、本市文化財保護審議会委員原口正三氏の援助をうけた。ここに記して感謝の意を表します。

嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要

Ⅰ 嶋上郡衙跡

1. 5－Ⅰ地区の調査

高槻市郡家本町751の2にあたり、小字名は東垣内と称する。式内社・阿久刀神社の西約200mの位置で、現状は畑である。このたび、賃貸住宅を建設する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委など関係者とも協議のうえ、調査を実施した。

遺構（図版第4、5a、75 ）

調査地は史跡・嶋上郡衙跡の後背丘陵の先端付近に位置するところから、地山面は調査区の北から南へ傾斜し、約0.3mの高底差を認める。層序は北側では耕土（0.25 m）、褐色土（0.15m）、暗褐色土（0.1m）、黄褐色土（地山）となり、南側では耕土（0.2m）、褐色土(0.3m)、暗褐色土（0.3m）、黄褐色土（地山）となる。褐色土までは植木鉢なども混じり、かなり撹乱されていた。暗褐色土からは弥生式土器・土師器・須恵器・瓦器が出土する。遺構としては弥生時代後期の住居址2棟、溝2条、土壙1基がある。

住居址はいずれも方形で内部から畿内第Ⅴ様式期の土器が出土している。1号住居址は隅部の一部を検出した。側壁は0.05～0.07mの高さを測る。2号住居址もやはり隅部の一部しか検出されず、幅0.25～0.35m、深さ0.1～0.2mの周溝が確認されただけである。溝1は幅約1m、深さ0.3mで、内部から畿内第Ⅴ様式期の土器や須恵器も出土するが、土師器小皿が出土しており、中世に属すると考えられる。溝2は幅約1.5m・深さ0.15mでやはり西南から北東に向って掘削されているが、溝1とは方向を異にし、内部から畿内第Ⅴ様式期の土師器・須恵器が出土しており、古墳時代に属すると考えられる。土壙1は溝1に南側を削られており、幅約1.5m・深さ0.2mを測る。内部から白磁碗・瓦器碗が出土し、中世のものとみられる。他に浅い落込みや柱穴があるがまとまりを欠いている。

遺物（図版第8～10）

住居址1からは畿内第Ⅴ様式の甕、壺、高杯、甑の破片が出土している。甕は口縁がくの字状になり、外面に叩き目を施し（図版第8a－1～6）、壺は肩部上位に櫛描文を施し、外面はていねいに磨かれている（図版第8a－7）。甑は底部中央を穿孔し、高杯は下方に拡がる脚端部が大きく開いている（図版第8a－8、9）。溝1からは畿内第Ⅴ様式の壺（図版第8b－1、2）、外面をていねいに磨いた土師器高坏（図版第8b－3）、外面に細かい刷毛目を施す土師器甑や鍋の把手（図版第8b－4～7）が出土している。溝2からは畿内第Ⅴ様式の壺（図版第9a－1～4）や甕（図版第9a－7・8）が出土している。第Ⅴ様式壺の口縁は受け口状のものと直口のものがあり、受け口状のものでは底部が凹んでいる。小型の土師器甕（図版第10－2）は外面に細かい刷毛目を施している。土師器では角状の把手が付く椀（図版第10－3）も出土している。須恵器は蓋（図版第9b－4～6、図版第10－4～6）、坏（図版第9b－1～3、図版第10－7）、高坏（図

版第９ｂ－７・８、図版第10－８）が出土している。蓋は天井部と口縁部の間に凹線を一条めぐらし、稜を浮かび上がらせ、天井部を２分の１程度回転ヘラ削り調整したものと稜がほとんど目立たないものがある。杯はたちあがりが比較的長く、内傾気味で端部が丸くおわるものと、たちあがりが短かいものがある。高杯は二段のスカシ窓を配し、その上下に一巡する凹線を施し、その間に櫛描波状文を施すものや一段スカシ窓をヘラ先で刻んだものがある。土壙１からは土師器高杯の杯部（図版第10－１）が出土している。（橋本）

2. 16－Ⅰ地区の調査　（図版第５－ｂ・77）

高槻市郡家新町313の1番地にあたり、小字名は東馬場と称する。史跡・嶋上郡衙跡のすぐ北側のところである。当該地は嶋上郡衙跡のなかでも、遺物・遺構の遺存状態がとくに良好な地域である。このたび給油所増設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委関係者とも協議のうえ発掘調査を実施した。

調査は重機で遺物包含層まで掘り下げ、その後、遺構面の検出作業をおこなった。層序はコンクリート層（0.1ｍ）、整地層（0.1ｍ）、盛土（0.5ｍ）、旧耕土（0.15ｍ）、床土（0.15ｍ）、茶褐色土層〔遺物包含層〕（0.4ｍ）、黄褐色土層ないし砂礫層〔地山〕となる。なお遺構面の西側$\frac{1}{3}$についてはタンク埋設壙のため以前に削平をうけていた。

検出した遺構は井戸１基・ピット４個である。井戸は調査区の北端で検出され、一部は調査区域外にある。円形素掘りの井戸で上辺径1.4ｍ前後に復元できよう。現存深さは0.7ｍである。井戸内から弥生時代後期の高坏片と奈良時代の須恵器（甕・坏片）が出土しており、奈良時代の遺構と考えられる。ピット１は一辺0.7ｍの方形で柱穴と考えられるが、深さ0.1ｍと浅い。遺物としては奈良時代の須恵器・土師器片がある。ピット２は径約0.6ｍの不整形なもので、埋土から土師器の小片が出土している。ピット３はピット１に接しており、径0.3ｍ、深さ0.05ｍの小さなものである。中から土師器小片が出土している。ピット４はピット３と同形同大であるが、出土遺物はない。その他、包含層から弥生時代～奈良時代の土器類が出土しているが、特筆すべきものはない。

今回の調査は調査面積が狭少なためか、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。ピット１については、奈良時代の掘建柱建物跡の柱穴の可能性がある。本調査区の周辺地域のこれまでの調査では、多くの奈良時代の遺構が検出されており、このたびの調査でも、遺物の大半は奈良時代に属するものであった。（森田）

3. 24－Ｄ・Ｈ地区の調査

高槻市郡家新町302番地にあたり、小字名はフクヅカと称する。現状は水路である。このたび水路改修の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、府道郡家－真上線の南側から史跡境界線までの幅約２ｍ、南北約50ｍの水路である。調査はまず水路内に堆積した土をダンプカーと重機を利用して搬出し、その後、人力で掘り下げながらおこなった。西壁面の主な層序は、耕土（0.3ｍ）、床土（0.1～0.25）、暗茶褐色土

層〔遺物包含層〕（0.1～0.3 m）、黒色土層〔遺物包含層〕（0.2～0.3 m）、黄褐色粘土～礫層〔地山〕である。地山面の標高は、北側で18.0 m、南側で17.7 mを測る。

検出した遺構は、弥生時代後期後半の土壙・溝・柱穴・古墳時代後期の土壙・柱穴などである。特に今回は、調査範囲が南北に細長いこともあって、各遺構の規模などについては不明な点が多い。

土壙はトレンチの南側と中央部で3基検出した。土壙1（D_1）は南側に位置し、規模は幅1.2 m、深さ0.1～0.3 mを測る。主軸は東西方向にあり、平面形は溝状を呈し、西端は調査区域外にある。埋土は黒色土層であり、出土遺物は弥生式土器片が1点出土した。土壙2（D_2）は土壙1のすぐ北側に位置し、規模は径約1 m、深さ0.2 mを測る。平面形は円形である。埋土は黒色土層であり、出土遺物は認められなかった。土壙3（D_3）は中央部より少し南側に位置し、平面形は東側の大部分が調査区域外にあるため不明である。深さは0.1 mを測る。埋土は黒色土層である。土壙内からは、6世紀末頃の破損した須恵器・土師器片等が少数出土し、これらの遺物に混って、小型の円筒埴輪片も1点出土している。溝はトレンチの中央部から接するように2条を検出した。溝1は南側に向ってS字状に蛇行しており、規模は幅0.8～1.2 m、深さ0.3～0.6 mを測る。埋土は黒色粘土層が一層のみで、出土遺物は認められなかった。溝2は東西方向に流れ、規模は幅1～2 m、深さ0.3 mを測る。埋土は黒色粘土層で、溝1と同様に出土遺物は認められなかった。柱穴はトレンチの中央付近と北側で4～6柱穴がまとまって検出された。規模は径約0.15～0.4 m、深さ約0.1～0.3 mを測り、北側の柱穴群の方が比較的深く掘り下げられていた。柱穴の平面形は、いずれも円形を呈し、奈良時代の様に特徴的な方形の柱穴は認められなかった。埋土は他の遺構と同様に黒色土層である。

本調査区北側のこれまでの調査では、弥生時代後期の溝・井戸・古墳時代後期の土壙墓群、奈良時代の建物群が検出されており、それらと関連させて考えるべきであるが、調査範囲も狭小なため、将来に期したい。また、すぐ南側の史跡指定地に位置する芥川廃寺と関連についても、新たに与えられた資料がないため、今後の課題としたい。

出土遺物は、大部分が黒色土層の遺物包含層と土壙3からである。包含層から出土した遺物は、弥生時代後期後半に属する破片が大半であるが、6世紀末までの須恵器・土師器片も少数混入していた。南側包含層から出土した壺1は、腹部が極端に張った体部に、垂直な頸部から外反した口縁部を付ける。所謂2重口縁をなす土器であるが、口縁部は欠損しており、端部の形状は不明である。体部外面はタタキ成形後、ヘラ磨き調整によって仕上げられている。内面は刷毛調整を施している。胎土は砂粒を少量含み、色調は淡黄土色を呈する。高坏2は、中張らみの脚柱部に屈曲した坏部と裾部がつくものである。外面は細かなヘラ磨きが丁寧に施され、裾部の稜にはヘラ先による刻みが認められる。胎土は砂粒を少量含み、色調は淡赤褐色を呈する。その他、黒色土層から検出された遺物をみると、弥生時代後期では特徴的な荒いタタキ目の甕胴片に混って、壺、有孔鉢、高坏の破片が少量認められる。古墳時代では須恵器の坏・蓋・甕の他に、土師器の高坏・羽釜・把手付椀・甕などがある。土壙3から出土した遺物は、大部分が破損した須恵器である。器種としては、坏身・坏蓋・有蓋高坏・無蓋高坏・細口壺・甕などである。須恵器の蓋坏は、小形化の傾向が

著しく、底部のヘラ削りも粗雑化しており、年代観としては、6世紀後半でも新しい時期が考えられる。その他の遺物としては、土壙3と包含層から出土した埴輪片がある。いずれも小型の円筒埴輪片であり、外面に施された横刷毛調整などによって、6世紀前後の時期に比定される。また、すぐ北側の調査地からも同様な埴輪片が出土しており、小字名と考え合せると、付近に古墳が存在していた可能性が高い。埴輪の色調は、黄赤～赤褐色を呈する。（大船）

4. 86－M地区の調査

高槻市川西町一丁目1016～1043番地にあたり、小字名は市辺と称する。当該地は嶋上郡衙跡（郡家川西遺跡）の南辺部にあたり、これまでの周辺の調査では古墳時代の墓地などを検出している。このたび市道辻子・下ノ口線の道路補修工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が検出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、調査を実施した。調査は立合として実施し、工事の性格上深夜におこなった。調査の結果、工事は既破壊部分の壙底まで達しなかったため、遺構・遺物等はまったく検出できなかった。（森田）

5. 28－F地区の調査

高槻市清福寺町13－4番地にあたり、小字名は清福ノ内と称する。現状は道路である。このたび防火水槽を埋設する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査は防火水槽を埋設する径5mの範囲について、盛土をまず重機で除去し、その後を人力で掘り下げておこなった。層序は盛土（0.6m）、灰褐色土層（0.3m）〔遺物包含層〕、暗褐色土層（0.9m）、淡茶褐色～青灰色砂礫層〔地山〕である。遺構は調査範囲が狭小なことと水道管等が埋設されていることもあって、遺物包含層下には検出することができなかった。出土した遺物は、弥生式土器（後期）、須恵器（古墳時代中期）、土師器（奈良時代）、瓦器椀（中世）などの破片が若干あるが、大部分は細片であって完形に復元できるものはなかった。（大船）

6. 67－I・M地区

高槻市川西町1丁目1021－3番地にあたり、小字名は宛本と称する。現状は水田である。このたびスーパーマーケットの自転車置場を新設する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、東・南・北側の隣接地がすでに調査され、遺物包含層が存在せず遺構の希薄な地域であることが判っていたので、調査はまず遺構の存在を確認するため、申請地の中央部に東西3m・南北25mのトレンチを設け、小型ユンボで耕土（0.3m）を除去しておこなった。耕土下には床土は認められず、南側と北側の一部に黄褐色砂礫層〔地山〕を検出した以外は、暗灰色土層の新しい撹乱層が拡がっており、遺構・遺物はまっく検出することができなかった。撹乱層は堆積状況からすぐ東側を流れる水路の氾濫跡と考えられる。地山面の高さは、北側13.2m・南側13.1mを測り、ほぼ水平である。（大船）

Ⅱ 新 池 窯 跡

7. 新池窯跡の調査

高槻市上土室町362番地にあたり、小字名はアクチ山と称する。現状は雑種地である。このたび畑地開発の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に発掘調査を実施した。

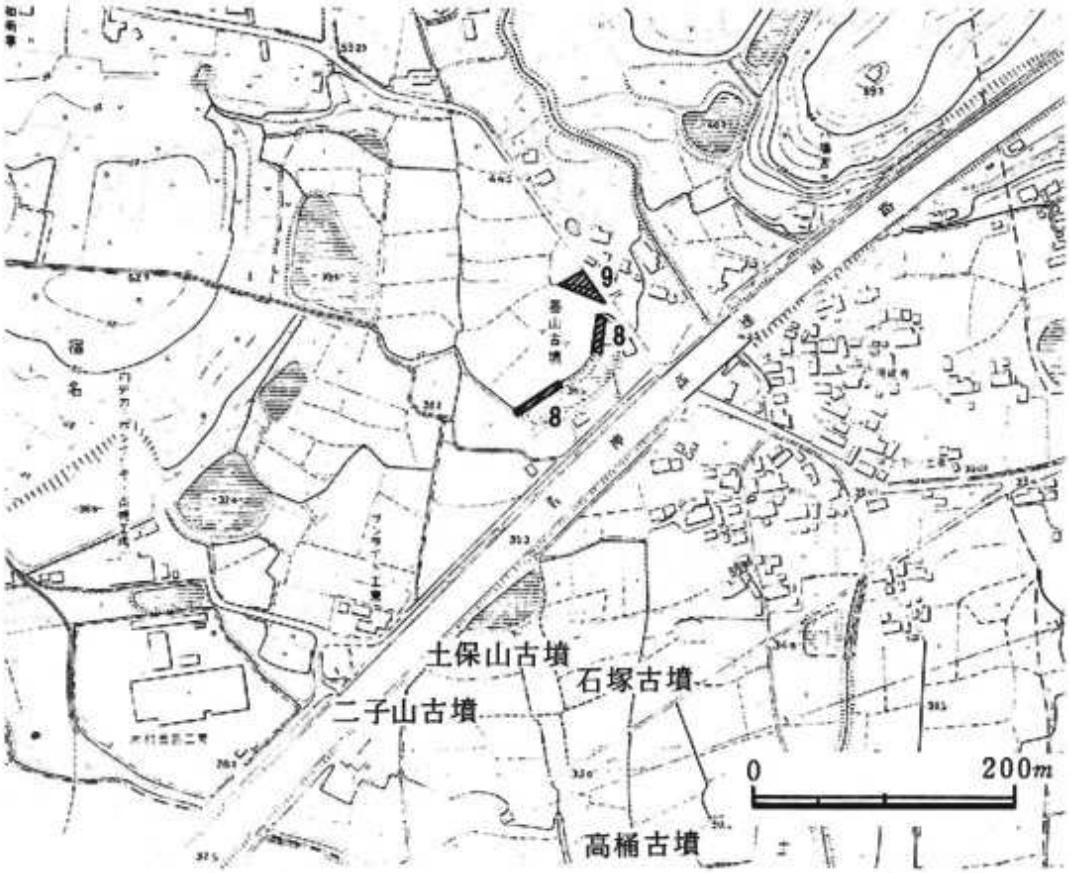
新池窯跡は三島地方で埴輪を生産した唯一の埴輪窯跡である。埴輪窯本体についての詳細は明らかでないが、三島の古墳を代表する継体天皇陵、今城塚古墳をはじめ、その周辺の小古墳に各種の埴輪類を供給していたことが、これまでの古墳の調査によって、徐々に明らかにされつつある。今回の調査地は、窯跡が存在する新池の北側に隣接する「中ノ池」の東斜面地である。調査は池に近い窯跡推定位置に、幅1m、長さ20mの第1トレンチを等高線と並行して設けた他、新池と接した斜面地にも幅1m、長さ10mの第2トレンチを設けておこなった。調査地は昭和30年頃まで水田として利用されていた所で、耕土（0.1m）を排土すると地山面は黄褐色砂層～黄灰色粘土層となり、埴輪窯の存在を推測できる遺構・遺物はまったく検出することができなかった。これらの調査結果から推測すると、新池埴輪窯の分布範囲は、北側の中ノ池の東斜面地まで拡がっていないことが考えられる。（大船）

Ⅲ 番 山 古 墳

8. 番山古墳の調査

高槻市土室町5丁目459－1・460－1番地にあたり、小字名は出口と称する。このたび番山池北岸の護岸工事をする目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

番山池は、番山古墳の南側周濠を利用して造られた農業用貯水池である。南側堤防の内側は、長年の風波作用によって破壊が著しくなり、昭和47年にコンクリートブロックによる修復工事がおこなわれた。今回の護岸工事は、北側の水田を同じく風波作用による破壊から護るために、コンクリート製の擁壁に造り変えるものである。調査は、護岸工事の堀り方と並行して実施した。西側外堤部の層序は、表土（0.15m）、黄土色土層（0.4m）、黒色土層（0.2m）、暗黄褐色土層（0.6m）、暗灰色砂質土層（0.4m）、黄褐色粘土層〔地山〕である。北岸部の層序は、耕土（0.3m）、暗灰色土層（0.4m）、暗灰色砂質土層（0.3m）である。北岸の池底にはかなり厚い堆積土があり、地山面を検出することができなかった。また出土遺物は、今回の調査が表土に近い部分であることと、池の底に貯った堆積層であることから、まったく検出することができなかった。（大船）



挿図１　番山古墳の調査位置図

9. 番山古墳の調査

高槻市上土室５丁目 46・493 －１番地にあたり、小字名は高丸と称する。現状は水田である。このたび都市計画道路を新設改良する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に発掘調査を実施した。

阿武山の南麓一帯から西国街道にかけては、三島地方を代表する大型の中期古墳が数多く分布している。番山古墳の南側には、石塚古墳・土保山古墳・二子山古墳・石山古墳等の周濠を有する中期の古墳が存在していたが、戦後の開墾・名神高速道路の開通などによって破壊され、わずかに二子山古墳を残すのみとなっている。本古墳の封土は、過去にかなり変形されていたので原状を正確に知ることができないが、測量図から推定すると、西側に短かい前方部をそなえた帆立貝式の古墳であったと考えられる。現在は前方部は削られており、円墳状を呈している。規模は直径56ｍ、高さ７ｍを測る。また、築造当時には周囲に幅約20ｍの濠が巡らされていたと考えられるが、南側の池の部分を除いて、北・西側はすでに埋め戻されて水田化している。

遺構・遺物（図版第１３～１６）

今回の調査地は、東側道路の拡張部分であるため、北東隅の一部の外堤と濠内に限られた。調査

は外堤部の耕土をまず重機掘削によって除去し、その後、人力で掘り下げながらおこなった。外堤部の主な層序は、耕土（0.3m）、暗灰色土層（0.1m）、暗茶褐色土層（0.2m）、暗黄土色土層（0.2m）、黄褐色土層〔地山〕である。また濠内の層序は、耕土（0.2m）、床土（0.3m）、暗灰色粘質土層（0.4m）、青灰色砂層〔地山〕であり、外堤部上面と濠底部との比高差は約1.2mを測る。

検出した遺構は、外堤部上に配置された埴輪列のみである。調査区の西側では原位置を保った円筒埴輪と形象埴輪の台部、2点を検出した。また調査区の東側ではほぼ原位置で破砕したと考えられる円筒埴輪と家形埴輪の埴輪片を同じく2ケ所から検出した。埴輪間の距離は、両者ともそれぞれ約2mであるところから、外堤上に配列された埴輪はほぼ等間隔に、円筒埴輪と形象埴輪が並べられていたことが考えられる。一方、今回の調査では、埴輪を樹立する際の掘り方は、盛土であったためか断面観察でも検出することができなかった。濠内の堆積状況を調べるためのトレンチでは、外堤掘部で石列（人頭大）を検出した。しかし、石例の掘り方を観察して見ると、耕土面から掘り込まれており、新しい時期に傾斜地を補強したものであることが判明した。その他、濠の埋土である暗灰色粘質土層からは、少数の埴輪片にまじって、須恵器・磁器片が若干出土した。

出土遺物は、古墳外堤部の調査であるため大部分は埴輪である。円筒埴輪1は、底部から1段目タガの位置まで現存しており、少し底部から外反ぎみに立ち上る。底径31～33cm、器厚1.5cmを測る。内外面は刷毛調整後、全体にナデ調整が施されている。胎土は砂粒を多量に含み、色調は赤褐色を呈する。円筒埴輪2は、底部から38cmの高さまで現存し、底径30～34cm、器厚1.5cmを測る。内外面は刷毛調整を施し、外面のみ2次調整の横刷毛が施されている。底部外面には、2次調整時に刷毛原体によって削り残された跡が、幅2cmの帯状で残されている。また外面の上段には口縁部まで赤色顔料が塗付されているが、タガ2段目以下には赤色顔料の塗付は認められない。胎土は砂粒を多量に含み、色調は淡黄土色を呈するが、底部付近は須恵質化している。その他の埴輪としては、東端出土の家形埴輪（図版第15b－9～11）、濠内出土の獣脚（図版第16a－20）などがある。（大船）

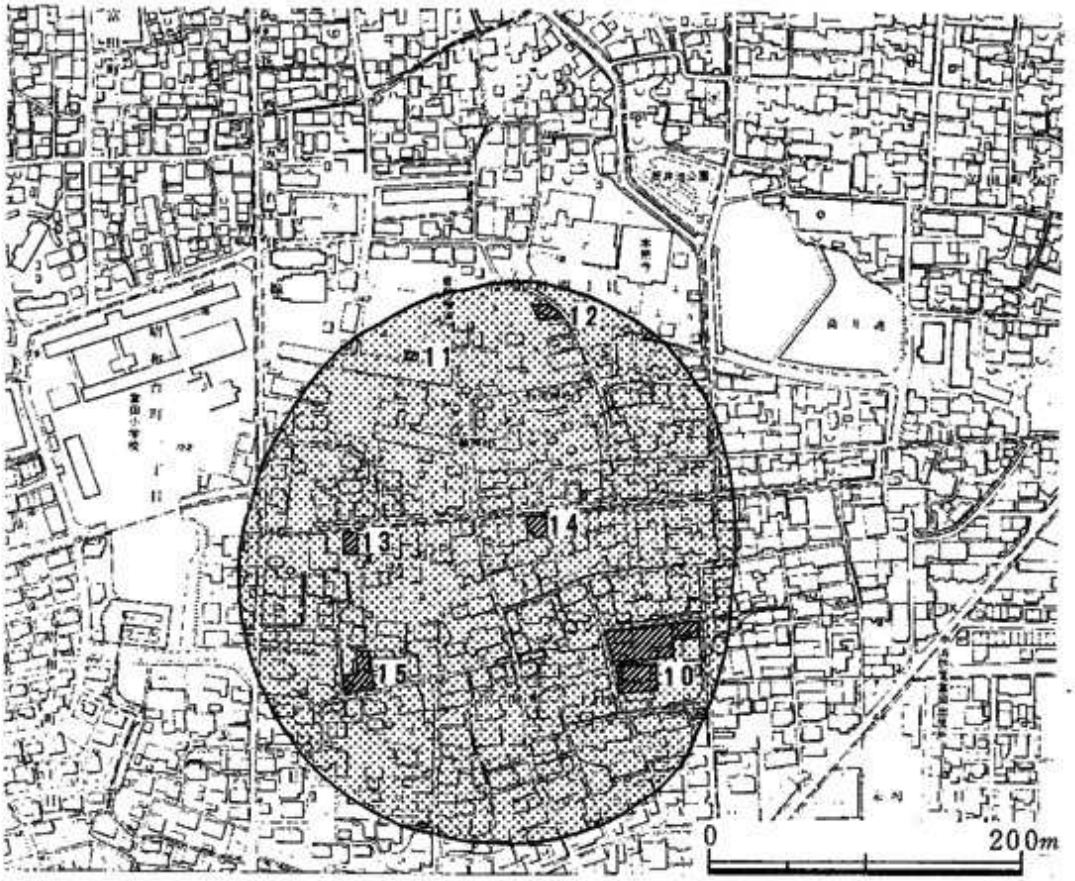
Ⅳ 富田遺跡

10. 富田遺跡の調査

高槻市富田町6丁目に所在し、小字名は横町と称する。教行寺は、本源寺八代蓮如が文明十三年（1481年）に細川勝元から約三万坪の土地を寄進され、北摂布教の拠点として造営されたものである。記録では天文元年（1532年）に細川晴元配下の摂州武士団に焼かれ廃頽し、その後再建されたが、承応2年（1653年）再び火災にあったと記されている。今回、本堂改築に際して現寺地の北側が買却され、病院建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、本堂部分の遺構確認調査と病院部分の発掘調査を実施した。

遺構・遺物（図版第17～20・78・79）

本堂部分については、建物基礎工事の掘削部分について主に断面観察を中心に実施した。西側17



挿図２　富田遺跡の調査位置図

m、北側19m に及ぶ断面観察の結果、西側では、地山（黄褐色土）が南へ下降する。その南端では0.7～0.8 mの黄灰色土を積みあげ、北側の地山面とほぼ同じ高さに整地していた。西側中央部では地山上に淡褐色土・黄褐色土が堆積し、いずれも焼土を含む。この二つの土層は同一面を形成しており、一回目の火災後整地されたものとみられる。この上層に黄灰色土が堆積し、上面に幅約2 mにわたって焼土が認められた。焼土上層は最近の瓦を含む、盛土（褐色土）である。北側でも、地山上に焼土を含む淡褐色土があり、地山上に柱穴が穿たれているのを確認した。また、東側部分でもやはり柱穴を確認した。東側部分では褐色土層以下を確認することができなかったが、病院建設部分の調査では下層にまだ堆積層のあることが明らかとなった。

病院建設部分については南北 14 m、東西 16 mの範囲を調査した。南壁の断面を観察すると本堂部分同様に地山が東側へ下降しており、地山上に褐色土が堆積する。まず、褐色土の上部では淡褐色土・灰褐色土が0.60～0.70 mの厚さで堆積していて、色調や焼土を含む量が異なるが、ほぼ同時に整地されたものとみられる。これより上層は、最近の盛土と撹乱をうけている。褐色土の下層には黄褐色土が堆積し、柱穴や溝などの遺構面を形成する。さらに下層には主に畿内第Ⅴ様式期の土器を含む暗褐色土が堆積し、これを除去すると方形周溝墓が認められる。地山は黄褐色土で、全

体に東南部へ下降している。

遺構は調査区北西部で一辺数十cmを測る方形の柱穴が多数検出されたが建物としてのまとまりを欠いている。この柱穴は褐色土層の下から検出された。本堂北壁や病院南壁で確認された柱穴も同時期のものとみられる。柱穴内からは、土師器・黒色土器・須恵器が出土する。柱穴の中心時代は、遺物から平安時代中頃と推定することができる。一方、褐色土層の上面にも多数の柱穴が検出されるが、主に南東部に多く、円形で直径の小さいものが目立ち、柱穴より杭穴とした方がいいものも含まれている。時期は鎌倉時代以後と考えられる。やはり建物としてのまとまりを欠く。褐色土層上面で検出した土壙1は柱穴と重複するが幅0.8m、深さ0.4m、長さ約1.3mを測る。内部からは、土師器皿・備前焼鉢が出土している。なお、病院地区南壁の焼土を含む淡褐色土上面から掘り込まれた柱穴状の遺構については確認できなかった。

調査区の南東部に厚く堆積する褐色土層中に畿内第Ⅴ様式期の土器が包含されているところから、上部遺構面の調査終了後、褐色土層以下の様子を知る必要から、調査区中央に試掘壙を設定し、掘削したところ弥生時代後期の方形周溝墓を検出した。一方、調査区北側で検出した溝状遺構の溝内からも畿内第Ⅴ様式期の土器が出土するところから、この溝状遺構もまた方形周溝墓と判断できるものであろう。

1号方形周溝墓は西北部の隅部を開口し、東西7.3mを測る。溝幅は西側で幅1.2m・深さ0.3m、北側で幅1.0m、深さ0.3mを測る。主体部は検出できなかった。2号方形周溝墓は北東の隅部しか確認できず、1号周溝墓と溝を共有するかどうかは不明である。溝幅は0.6～0.7m、深さ約0.25mを測る。

遺物としては1号方形周溝墓の周溝から畿内第Ⅴ様式土器が出土している。甕の破片が主で鉢も若干出土している。甕の口縁部はくの字状になるものと、やや受け口状になるものがある（図版第19a－1～3）。また、底部にヘラ先で枝葉を描くものもある（図版第19a－7）。

暗褐色土層からは主に1号方形周溝墓同様の畿内第Ⅴ様式土器が出土している。褐色土層からは平安時代から鎌倉時代の遺物が出土している。土師器は皿が主で、10世紀代に位置づけられる薄手で口縁端が屈曲するものから、12ないし13世紀代のものまである（図版第20a－1～6）。黒色土器にはA類とB類の椀がある。瓦器椀は和泉型と楠葉型の二種類があり、和泉型が多い（図版第20a－7～9）。他に、緑釉椀・蓋、中国製白磁碗、灰釉椀、砥石などが出土している（図版第20b）。

土壙1からは備前焼擂鉢と土師器皿が出土している（図版第19b）。備前焼はⅤ期の範疇に入るもので、土師器皿は底部から体部が斜上方にのび、内底面には圏線がめぐる。口径は9ないし10cm、13cm、15cmのものがある。この種の資料は京都市山科寺内町2号石室出土例が基準となっているが、質・器形とも極めて類似している。また、褐色土層より上層では寛永通宝なども出土している。

教行寺周辺の地形をみると、富田台地の台地上に位置する三輪神社付近から南東に張り出した舌状台地を形成しており、弥生時代から現代まで連綿として生活が営まれている。弥生時代の集落の中心部がどこに位置するか不明であるが、恐らく台地の中心部に位置し、周辺部に、今回検出され

たような周溝墓から成る墓地が形成されていたらしい。昭和51年に調査した旧富田小学校跡地からも方形周溝墓が検出されており、数単位の墓地があったとみられる。さて、今回の調査では周溝墓を除いて、褐色土層の上下に2層の遺構面を確認した。

褐色土層下の柱穴は比較的大きく、内部から出土する土師器皿は平安京左兵衛府ＳＤＯ１出土資料と類似する。褐色土層下の柱穴にも鎌倉時代とみられるものがあるようであるが、おおむね10世紀中頃から後半にかけての時期が中心とみられる。一方同層には平安時代の遺物が確認されているが、史料では応和元年（961年）、藤原北家一門の中心人物である藤原師輔から天台宗門跡妙香院に富田庄が処分されている。富田庄がどの範囲を指し、中心がどこにあったのか不明であるが、今回確認された柱穴群は富田庄と少なからず関係があったものとみられる。褐色土層には、平安京左兵衛府ＳＤ０１出土の土師器皿と類似するものをはじめ、瓦器椀・土師器などが包含されているので褐色土層および上面の柱穴は鎌倉時代以後とみられる。なかでも土壙1から出土した土師器皿は京都山科寺内町2号石室から出土した土師器皿と同じ特徴をもつ。なお、山科寺内町も天文元年（1532年）に細川勝元によって焼かれたものである。褐色土層上に堆積する淡褐色土、灰褐色土などはいずれも焼土を含み、記録に残る摂州武士団による教行寺焼打ちの後整地されたものであると想像される。ただ、褐色土層から上層では遺物はほとんど検出されていないため、確認は今後にのこされた課題である。記録では承応2年（1653年）にも火災にあったと記されているが、本堂西壁で淡褐色土上に黄灰色土をはさんで焼土が認められており、この焼土が承応2年の火災のものに該当するものと思われる。また、本堂西壁では地山上に数十㎝の厚さで盛土を行なっているが、これは教行寺創建時の工事とみられ、真宗信者が参加して行った一大土木工事と考えられよう。

今回の調査では建物配置など直接教行寺と結びつくものは検出されなかったが、北摂布教の拠点として選ばれた富田の繁栄と北摂地域の室町後期から近世にかけての政治動向を知る手がかりを得たことは重要である。（橋本）

11. 富田遺跡の調査

高槻市富田町4丁目3070番地にあたり、小字名は市西ノ口町と称する。明徳元年（1390年）創建の臨斎宗普門寺石庭の南側にあたる。今回、写経堂を建設する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は届出地の中央部に南北4ｍ、東西2ｍの調査壙を設定し、調査を実施した。遺構・遺物の検出に務めたが、耕土（0.25ｍ）、最近の瓦を含む黄褐色土（0.3ｍ）と堆積し、その下層はすぐに岩盤状の黄灰色土（地山）となる。遺構はまったく検出されず、遺物も備前焼・信楽焼の陶片が若干出土しただけである。以前に普門寺周辺の市営住宅等の建設に際して実施した調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されているが、現在の普門寺境内では遺構の削平がかなり行われているようである。（橋本）

12. 富田遺跡の調査

高槻市富田町4丁目2491－2 番地にあたり、小字名は馬場岡町と称する。現状は宅地である。

このたび個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、普門寺の北東隅に接する谷合となった所であり、富田遺跡の中では一番北側の未調査区域である。調査はまず遺構・遺物の有無を確認するため、建物部分の中央部に3m×3mのトレンチを設け、人力によっておこなった。層序は表土（0.2m）、黄褐色砂礫層（0.5m）、暗青灰色土層（0.2m）、黄褐色砂礫層〔地山〕である。遺物包含層および遺構は、残念ながら今回まったく検出することができなかった。また、この場所の埋土の状況から推測すると、近世以降になって埋め立てがおこなわれ、比較的新しい時期に宅地化したことが考えられる。（大船）

13. 富田遺跡の調査

高槻市富田町六丁目2525の3番地にあたり、小字名は市西ノ口町と称する。このたび、個人住宅の改築を計画するにあたり、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は届出地の北部に、東西2m、南北1mの調査壙を設けて実施した。層序は黄色土の盛土（0.3m）を除去すると、最近の瓦を含む褐色土が約1.3m堆積し、その下は青色粘土である。遺構・遺物はまったく検出されなかった。青色粘土より上層は最近の盛土とみられ、付近の古老の話によると、調査地から南は谷状に低くなっていたとのことである。（橋本）

14. 富田遺跡の調査

高槻市富田町6丁目2541番地にあたり、小字名は市西ノ口町と称する。道路を隔てて北側は富田三輪神社・普門寺が所在する。このたび、個人住宅の改築を計画するにあたり、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は届出地の西部に南北3m、東西2mの調査壙を設定し実施した。約0.2mの盛土を除去すると0.1mの褐色土が堆積し、これを除去するとすぐに岩盤状の黄褐色土となる。家屋解体前はかまどがあった位置とみられ、かなり撹乱をうけており、遺構は検出できなかった。遺物としては褐色土から土師器小皿の破片が若干出土している。（橋本）

15. 富田遺跡の調査

高槻市富田町三丁目2768番地にあたり、小字名は西垣内と称する。このたび、個人住宅の改築を計画するにあたり、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

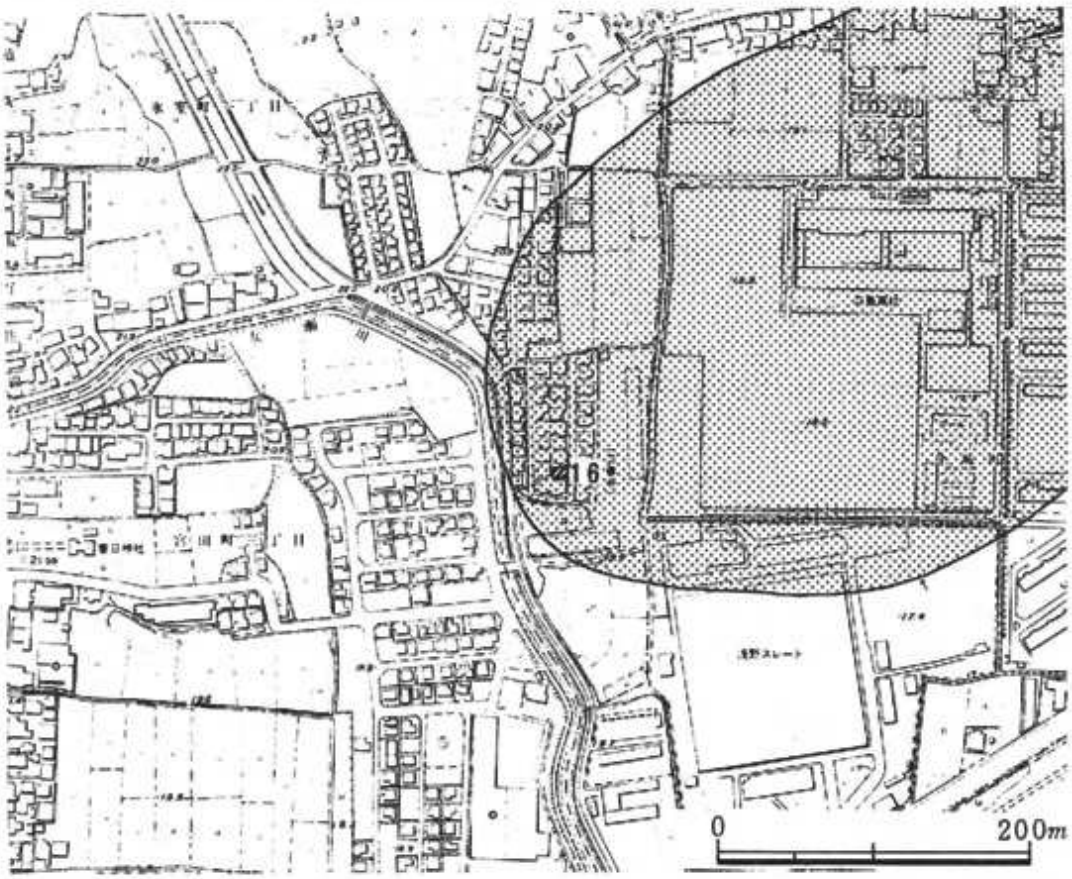
調査は届出地の南部と北部に1m四方の調査壙を設けた。南部に設けた調査壙では0.1mの盛土と建築資材などの混入する撹乱層を除去すると岩盤状の黄褐色土となる。北部に設けた調査壙では0.1mの盛土を除去すると、すぐに岩盤状の黄褐色土となる。明確な遺構ではないが、断面の一部に黒色土のレンズ状落込みがわずかにみられる。遺物としては盛土、撹乱層中に備前焼擂鉢の破片が1点出土している。底部破片のため、詳しい時期は明らかでないが、間壁編年のⅣBないしⅤ

期とみられる。（橋本）

V 郡家今城遺跡

16. 郡家今城遺跡の調査

高槻市氷室町1丁目781の29番地にあたり、小字名は下河原と称する。届出地の東側一帯では奈良時代から平安時代にかけての集落跡が検出されており、さらにその下層からは旧石器が出土している。今回、個人住宅の改築を計画するにあたり、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。



挿図3　郡家今城遺跡の調査位置図

調査は届出地の南西隅に南北3m、東西2mの試掘壙を設定した。層序は盛土（0.65m）、旧耕土（0.2m）、青灰色砂層（0.25m）、黄褐色土（0.2m）と堆積し、地山は砂質気味の黄灰色土である。いずれの土層からも遺構は検出されず、遺物も黄褐色土層から須恵器、土師器の細片が若干出土しただけである。また、旧石器の存否を確かめるために地山の黄灰色土を調査したが、旧石

器は発見できなかった。（橋本）

Ⅵ 郡家本町遺跡

17. 郡家本町遺跡の調査

高槻市郡家本町1000の27番地にあたり、小字名は東上野と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅を増築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査は小規模な増築工事のため、コンクリート基礎になる部分について、人力でおこなった。層序は暗褐色粘質土層（0.3m）、黄土色土層〔地山〕となり、遺物包含層は認められなかった。また調査地が狭小なこともあって、遺構等もまったく検出することができなかった。（大船）

18. 郡家本町遺跡の調査

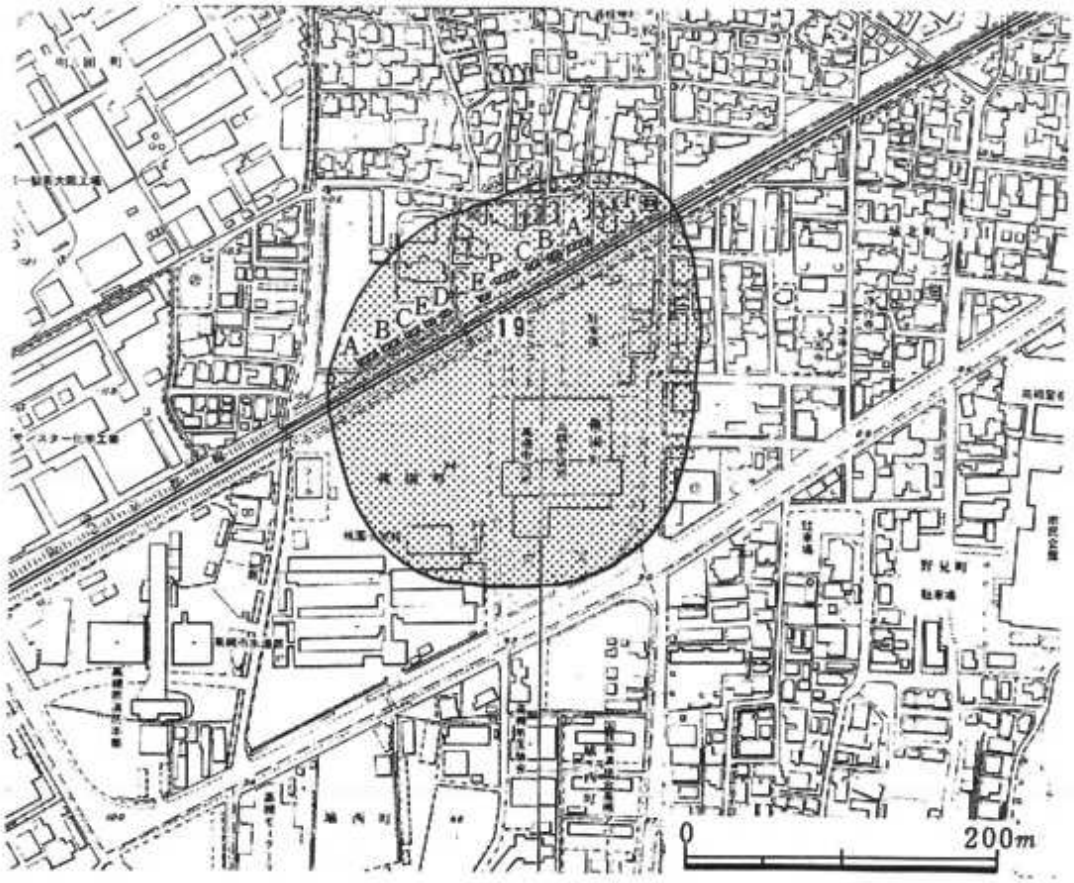
高槻市郡家本町977番地にあたり、小字名は東上野と称する。史跡・嶋上郡衙跡の後背丘陵上に位置し、これまで、周辺部の調査で弥生時代以後の遺物包含層や柱穴などが検出されている。今回、個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は届出地の北西部に東西4m、南北2mの調査壙を設定して実施した。層序上から順に灰褐色土（0.15m）、褐色土（0.4m）と堆積する。いずれも最近の盛土とみられる。褐色土層下は砂礫を含んだ褐色土（0.4m）、黄褐色砂礫（地山）と堆積している。褐色砂礫層の上面から調査壙西半は大きな撹乱をうけている。土地所有者によると第2次大戦中の防空壕とのことである。砂礫を含む褐色土層から土師器小皿が一点出土した他、遺構・遺物はまったく検出されなかった。（橋本）

Ⅶ 上田部遺跡

19. 上田部遺跡の調査

上田部遺跡は芥川左岸東方に位置し、高槻市桃園町に所在する。奈良時代の班田を示す天平七年銘の木簡をはじめ、多数の木製品と掘立柱建物跡・井戸・水田址が発見されている。遺跡の北辺を通る阪急京都線の高架工事に伴ない、昭和53年度に試掘調査を実施したところ、鎌倉時代以後とみられる溝や古墳時代の須恵器を発見した。今回、阪急京都線高架工事が本格化するのに先立って、文化庁・大阪府教育委員会・工事関係者と協議のうえ、発掘調査を実施した。調査対象地区は府道・高槻停車場線と阪急京都線が交差する上田辺踏切から西へ約200m間の阪急京都線北部にあたり、小字名は天ノ坪、川田・城の恒内、惣行と称する。



挿図４　上田部遺跡の調査位置図

調査は工事予定地に幅２～３ｍ、長さ３～20ｍの調査壙を11ケ所設け、断面観察と併行して遺構検出作業を行なった。

遺構（図版第21、77ｂ）

市役所庁舎北側にある浄因寺北踏切から西側の調査壙（Ａ～Ｅ）では、耕土を除去すると0.2～0.40ｍの床土（黄褐色土）が堆積し、以下粘土層が厚く堆積する。最も西に設けたＡ調査壙の層序は、黄褐色土層（床土）の下に茶褐色粘土層（0.3ｍ）、青灰色粘土層（0.2～0.4ｍ）となり、以下、灰緑色粘土、灰色粘土と堆積し、下層ほど砂質気味となる。茶褐色粘土層上面に、幅２～３ｍのレンズ状の溝が認められた。溝内には、黄灰色砂質土、灰色粘土などが堆積する。溝内からの出土遺物は無く、時代は決めがたいが、後述の溝などから近世に属すると考えられる。Ｄ・Ｅ調査壙では、0.2～0.4ｍの耕土と床土を除去すると、黄褐色あるいは褐色の砂礫層が交互に堆積する。南北方の自然流路と考えられる。この自然流路の西側の肩部がＥ調査壙で確認され、これを手がかりにすると自然流路の幅は20ｍ前後と思われる。

浄因寺北踏切から東に東Ａ～東Ｆの調査壙を設けた。東Ａ調査壙でもＤ・Ｅ調査壙と同様の砂礫層が堆積していた。上田辺踏切のすぐ西側に設けた東Ｆ調査壙でも最下層に砂礫層が認められるところから、幅数十ｍの自然流路の堆積層と考えられる。Ｄ・Ｅ調査壙でみられる自然流路と異なる

のは砂礫層上に粘土層が2～3層堆積していて、水田面を形成しているようである。この自然流路は次に述べる東D調査壙の状況から鎌倉時代以前のものとみられる。

昭和53年度の試掘調査で発見された溝は東D調査壙で確認された。東D調査壙では耕土・床土を除去すると黄灰色粘土（0.6m）、青灰色粘土（0.3～0.4m）と堆積する。溝は青灰色砂質粘土を掘りこんだ幅2m、深さ0.8mの規模で、溝内は主に青灰色砂が堆積し、西側の肩部には護岸のための痕跡を認めた。溝はほぼ南北方向に掘さくされ、溝底は南に下向している。

遺物（図版第22）

出土遺物は若干の弥生時代（第V様式期）の土器と須恵器片が出土した。東C・D・E調査壙から11世紀末ないし13世紀にかけての、瓦器椀、瓦質羽釜、備前焼IV期の擂鉢、東播系須恵器甕が出土しているが、いずれも遺構に伴なうものではない。

浄因寺北踏切より東に設けた各調査壙から鎌倉、室町時代の遺物が出土しているが、まとまった出土状況ではなく、規模の大きな集落の存在は考えられない。市庁舎建設時の調査でも瓦器の出土する層位が確認されているが、奈良時代の集落が廃絶したあと、鎌倉時代に再開発され、水田地帯となったとみられる。（橋本）

Ⅷ 天神山遺跡

20. 天神山遺跡の調査

高槻市天神町一丁目1238番地にあたり、小字名は加賀山と称する。当該地は天神山遺跡の東辺部にあたり、以前より多くの弥生式土器が採取されているところである。またすぐ近くには5世紀代の中将塚古墳等も所在している。このたび、乾性寺本堂建替の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委とも協議のうえ発掘調査を実施した。

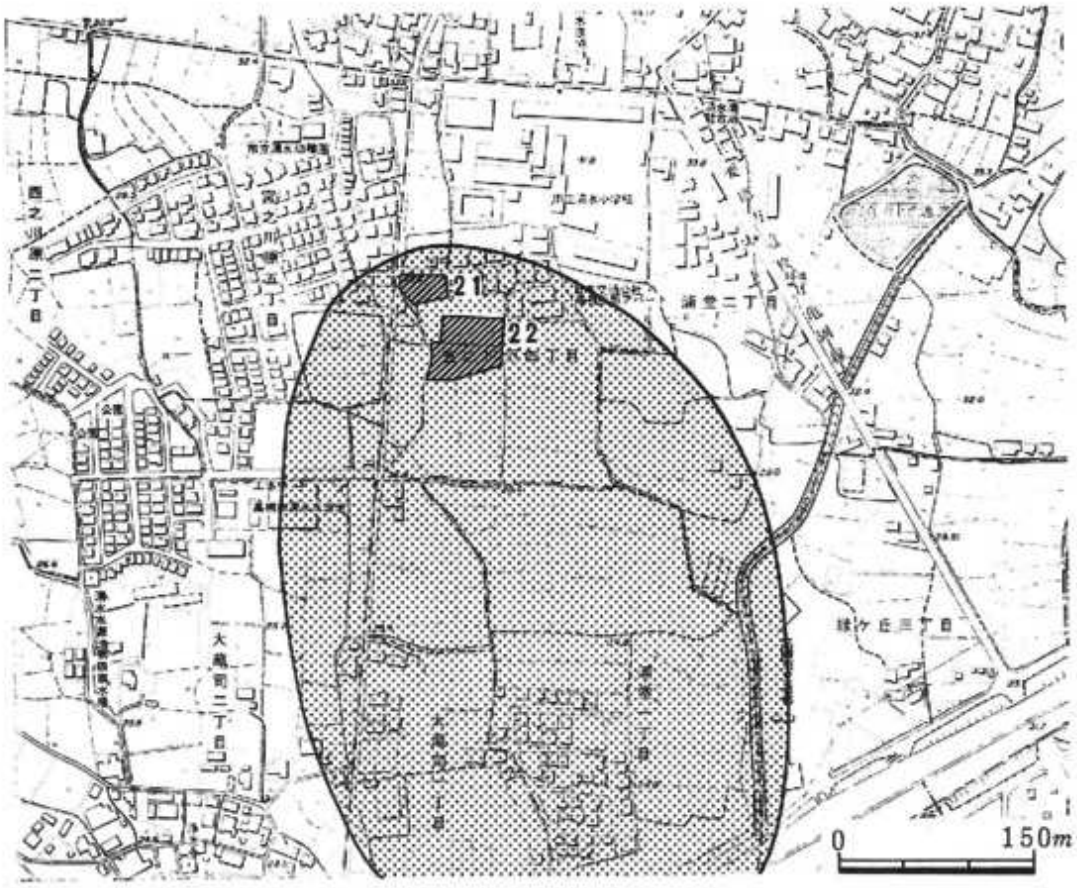
調査は旧本堂除去後、トレンチ（3m×2m）を設けておこなった。層序は黄褐色ないし、灰褐色砂層の均整な互層である。調査の結果、遺構・遺物はまったく検出されなかった。これは旧本堂建立時に大きく地山が削平されたためと考えられる。ちなみに、境内を探索すると、あちこちに弥生式土器片を見い出すことができた。なお、その際1点の寛永通宝を採取した。（森田）

Ⅸ 大蔵司遺跡

21. 大蔵司遺跡の調査

高槻市宮ノ川原4丁目601の1番地にあたり、小字名は門ノ前と称する。現状は水田である。このたび賃貸住宅を建設する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、式内社・神服神社の南方約170mにあたり、大蔵司遺跡の範囲内では北限に位



挿図5　大蔵司遺跡の調査位置図

置する。昭和55年度におこなった南隣接地の確認調査では、弥生時代後期の溝が検出されており、遺跡の拡がりがもう少し北側まで延びていることが予測された。調査は西側の道路面に接した建物部分（東西6m・南北10m）について、重機を使用しておこなった。層序は耕土（0.3m）、床土（0.1～0.2m）、暗灰色土層（0.1m）〔整地層〕であり、地山面は北側が暗灰色砂礫層、南側が暗茶褐色土層となっている。

検出した遺構は、弥生時代後期の土壙2基のみである。規模は径約1.5～2m、深さ0.3mを測り、埋土は下層が暗灰色粘土、中層が黄灰色粘土、上層が暗灰色粘土となっている。土壙の平面は、遺構面に木組の暗渠（東西方向5本、南北方向2本）が掘り込まれ、大部分が撹乱を受けているために、正確な形状は不明である。地山面のレベルは北側29.9m、南側29.8mを測り、ほぼ水平である。

出土遺物は土壙から弥生時代後期の土器片が10数点出土したが、いずれも細片で表面の風化が著しく、完形に復元できるものはなかった。その他の遺物としては、整地層と暗渠の埋土から奈良時代に属する須恵器・土師器片が少数出土した。これらの土器片は、いずれも表面が著しく摩滅を受けており、水田の改良工事をする際に、他の場所から客土に混って運び込まれたと考えられる。

器種には、坏・高坏・広口壺・細頸壺・甕等であるが、完形品に復元できるものはなかっ

た。（大船）

22. 大蔵司遺跡の調査

高槻市浦堂2丁目590の3番地他にあたり、小字名は宮前と称する。このたび住宅開発の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ発掘調査を実施した。

大蔵司遺跡は、史跡・嶋上郡衙跡の北方約1kmのところにあり、弥生時代前期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。今回の調査は昨年度末におこなった確認調査の結果をうけて実施したものである。調査面積は約15,000㎡である。調査はまず重機で表土層を除去し、その後遺構検出作業をおこなった。

遺構（図版第23・24・80）

検出した遺構としては中世の落ち込みと土壙、および弥生時代後期～古墳時代前期にかけての溝などがある。

中世の遺構

中世の遺構としては落ち込み2ケ所、土壙3ケ所が認められた。いずれも調査区の北寄りで検出している。落ち込み1は当初住居址と考えられたものであるが、埋土の黒色土層を除去するにつれて壁面の立ち上がりが認められなくなり、単なる落ち込みと判明した。規模は幅10m・長さ15m・深さ0.1mである。埋土からは瓦器・須恵器・土師器などの破片や火付木が検出されている。落ち込み2は落ち込み1の東側で検出したもので、幅7m・長さ10m・深さ0.1mを測る。埋土の暗灰色土層からは瓦器・須恵器・土師器の細片がわずかに出土している。土壙1は落ち込み1と2の間で検出したもので、径2m・深さ0.2mの不整円形を呈している。土壙内からの出土遺物はないが、埋土状況からみて、落ち込みと同時期の遺構と考えられる。土壙2は落ち込み2の東側で検出されたもので、径1m・深さ0.2mを測り、円形を呈している。土壙内からの出土遺物はない。土壙3は落ち込み2の西寄りのところで検出されたもので、やはり径1m・深さ0.2mを測る円形土壙である。これらの遺構は後の水田造成時の整地により大きく削平をうけており、遺存状況は極めて悪い。

弥生時代～古墳時代の遺構

この時期の遺構は調査区の南寄りで検出されている。溝1はその一部しか検出できなかった。幅1.5m・深さ0.4mを測り、ほぼ東西方向の流路を示している。埋土は褐色ないし、灰褐色の砂礫層である。中から弥生時代後期の土器片が若干出土している。溝2は幅2m～3m・深さ0.7m～0.9mを測り、蛇行しながら南南東へ流れている。埋土は最下層が暗灰色腐蝕土層で、それ以上は青灰色ないし暗灰色の砂層及び砂礫層の互層になっている。溝底は、深浅の差がかなり認められ、最大0.4mの比高差がある。遺物としては、弥生時代後期の土器がある。溝1と溝2は埋土状況から同時にあったと考えられるが、廃滅時期は溝2の方が後である。溝3は溝2の流路をほぼ踏襲しており、幅2m・深さ0.2m～0.7mを測る。溝は大きく上下2層に分れており、下層から弥生時代後期の土器が出土し、上層からは古墳時代前期の土器が出土している。下層の埋土は黒灰色粘質

土層と暗灰色粗砂層であり、上層の埋土は黒灰色粘質土層である。溝4は溝3から派生したもので、ほぼ南北方向に直線的な流れを示しており、用水路として利用されていた可能性がある。幅1.5m・深さ0.2mを測る。埋土は溝3と同様である。溝内より弥生時代後期の土器が出土している。

遺　物　（図版第24・25）

検出した遺物としては、各溝から出土した土器類が目立つ程度で、落ち込み等から出土した須恵器・土師器・瓦器などはいずれも極小破片ばかりで、しかも2次的な混入品と考えられるものである。したがって、前者について若干記すことにとどめる。

出土土器のうち、1～5・9～11は溝2から、6～8・12～14は溝3からそれぞれ検出された。1は二重口縁壺の口縁部片で、外面に大振りの櫛描波状文を、内面に細かな櫛描波状文をほどこしている。内外面ともヘラ磨き仕上げしているが、上縁部外面のみはヘラ磨きがなされていない。色調は灰色を呈し、胎土は砂礫を若干含んでいる。2は長頸壺の口頸部で斜め上方に開いているが端部は欠いている。外面及び内面上半は縦方向のヘラ磨きによって仕上げられ、端部付近はヨコナデしている。色調は暗灰褐色である。3は甕の破片で、体部は球形に近いと思われ、体部外面はやや左下りのタタキ目をほどこし、内面はナデ調整している。口縁部は短くて大きく外反しており、内外面ともヨコナデ仕上げしている。色調は淡褐色。4は小形鉢の底部片と思われるもので、底部は突出し、内外面ともナデ調整によって仕上げている。色調は灰白色。胎土に小石粒を多く含む。5は甕の下半部片であるが、底部は突出せず、丸くすぼまったまま底部に至っている。外面は縦方向に近いタタキ目がみられ、内面はナデ調整している。色調は暗灰色を呈し、胎土は砂粒を含むも良。9は完形に近い小形甕である。やや突出した底部に倒鐘形の体部がつくもので、口縁部は短く外反している。体部は2段階成形で、下半は左下りのタタキ目、上半は水平に近いタタキ目を有している。内面は刷毛調整後、ナデている。色調は淡茶灰色で、煤の付着はない。胎土には多くの小石粒を含む。10は完形の小形鉢である。突出した底部に半球状の体部がつくもので、底部外面は凹んでいる。体部は内外面とも雑にナデ調整をほどこすだけで、口縁部の仕上げも雑である。色調は暗灰黄色で、遺存状態もよくない。11は完形に復元できる小形器台である。浅皿状の台部に直線的に拡がる裾部を有するもので、裾部には4つの小円孔を穿っている。また台部中央にも円孔がある。遺存状態はあまりよくなく、内外面ともに調整は不明である。色調は淡灰褐色で、胎土は砂質気味である。溝2出土の土器の時期はおおむね弥生時代後期の最終末と考えられるが、11の器台については、庄内式併行期とすべきかもしれない。6は甕の口縁部片である。やや内彎気味に外上方へ立ち上る口縁部に、わずかに内面肥厚する端部を有するもので、いわゆる布留式（古相）甕形土器とするものである。調整は内面の刷毛目が観察される程度で、外面については不明。色調は茶灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含むも良である。7は二重口縁壺の口縁部片であるが、遺存状態は悪く、調整は不明。上縁部の外反度はゆるく、観る限りにおいては櫛描文もない。色調は暗黄褐色で、胎土は小石粒を含むも良である。8は高坏の脚部片で柱状部のみ遺存している。柱状部は中実で、裾部との境で屈折するタイプである。風化が激しく、外面の調整は不明。色調は淡茶灰色を呈し、胎土に多くの砂粒を含む。12は二重口縁壺形で、体部下半と上縁部を欠く。体部は球形に近く、頸部はほぼ直立する。口縁部はほぼ水平に外反した後、外上方へ立ち上がるようである。体部と頸部と

の境には凸帯のはがれた痕がみられる。遺存状態はあまりよくなく、各部の調整は不明である。色調は灰褐色を呈し、極めて軟質の土器である。13は小形器台の裾部で、やや外反気味に拡がっている。上位に3つの円孔が穿たれ、台部中心から裾部にかけても縦孔があけられている。裾部下半の器壁は薄くつくられている。裾部外面はヘラ磨きがほどこされ、内面はナデ調整されている。色調は灰褐色を呈し、胎土は砂質であるが、焼成は良い。13は高坏の脚部で、短い柱状部に大きくひらく裾部を有する。柱状部は中実で、裾部の透穴はみられない。内外面ともナデ調整のみで仕上げられている。色調は灰白色で、胎土は砂粒を多く含む。溝3出土の土器は、弥生時代後半のものと布留式期（古相）のものがあり、それらが、相半ばして検出されている。

その他包含層から弥生時代後期の壺・甕・高坏片をはじめとして、古墳時代の土師器・須恵器片などが検出しているが、いずれも破片ばかりで、特筆すべきものはない。また現水田下の暗渠からは江戸時代前期の軒丸瓦・平瓦の各破片が出土している。いまにのこる水田の造成時期を示す一つの資料になりうる。

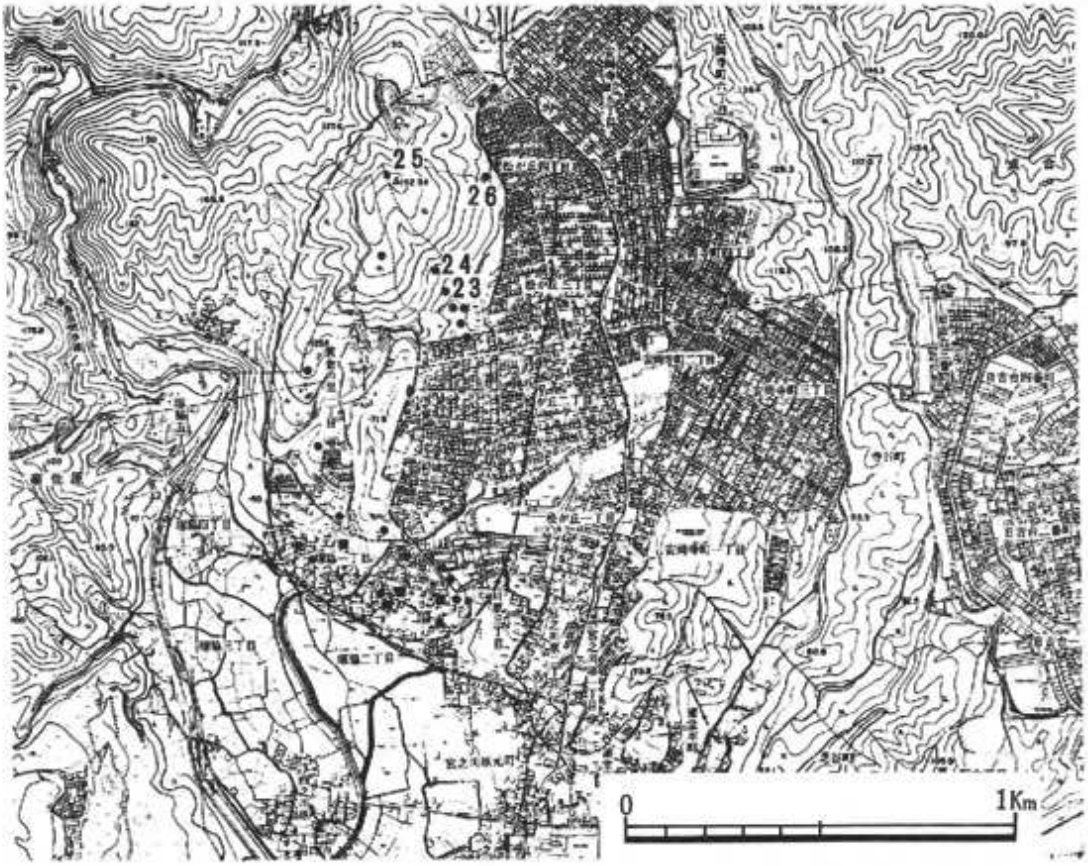
小　結

当該地は大蔵司遺跡の北端部と考えられていたところであるが、調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が比較的多く検出され、周辺（北西部）に集落の埋もれている可能性が高くなった。しかも、本調査区の北200mに所在する式内社神服神社の社地をも遺跡の範囲に含めて考えられるようになった。（森田）

X　塚脇古墳群

服部平野の北側に位置する塚脇古墳群は、塚原古墳群、安満山古墳群と並び、高槻を代表する古墳時代後期の群集墳である。塚脇古墳群が分布する帯仕山は、三好長慶の城として有名な三好山の東側に位置し、標高は192.34mを測る。古墳の分布は、頂上部から東・南裾部にかけて約30基を数え、南斜面上に形成されたグループと、東斜面に形成されたグループに大きく分けられる。特に南斜面の裾部に立地するグループの中には、「連塚」・「御女塚」と呼ばれる著名な古墳があり、服部地区に居住する「服部」との関係が早くから考えられている。

今回、帯仕山の山頂から東斜面一帯にかけて、大規模な宅地造成が計画されたため、予定地に立地する4基の古墳について、事前に発掘調査を実施したものである。



挿図６　塚脇古墳群の調査位置図

23.　塚脇Ｃ－６号墳の調査

高槻市大字原１－３－９番地にあたり、小字名は帯仕山と称する。現状は山林である。今回、宅地造成の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

(A)　古墳の構造（図版第26～30・85・88・89）

塚脇Ｃ－６号墳は、帯仕山から東南方向に延びた斜面の中腹に位置する。本古墳が立地する斜面上には、当初７基の大小の円墳が隣接して構築され、小支群を形成していた。

塚脇Ｃ－６号墳の規模は、墳丘測量結果によると直径11ｍ、高さは南側で約2.2ｍを測り、西・北側に幅１～1.5ｍ、深さ0.15～0.3ｍの浅い溝が掘られている。標高は102.5ｍを測る。墳丘の遺存状態は、東・西側の盛土の流出が著しく、中央部に石の抜きとった凹みが認められる。墳丘の盛土は、大きな礫を含む黄土～黄褐色土層である。

内部主体は、玄室に特徴的な胴張りがある右片袖の横穴式石室である。石室の規模は、玄室幅１～1.5ｍ、玄室長2.75ｍ、羨道幅1ｍ、羨道長3.2ｍを測り、石室の中心軸は西に33度偏っている。石室の遺存状態は、一番良好な左側壁でも４石目までであり、床面からの高さは約1.3ｍを測る。石室の石材は玄門の２石を除いて、全体的に小さな亜角礫が多用されており、壁面の持ち送りはさ

ほど急ではない。石室内の土層の堆積は、上半部に攪乱層である黄土色土層があり、下半部に自然堆積層である青灰色粘土層が厚く堆積し、床面上の遺物を良く保存していた。

床面上の遺物の出土状態は、最終埋葬時の遺物が石敷面と接して、ほぼ現位置から出土した。石室の奥壁右側からは、須恵器の脚付直口壺（９）と蓋（８）がセットで出土し、奥壁左側からは同じく須恵器の坏身（３・５）と甕（10）が重なって出土した。また、石室の玄門付近では坏身（６・７）が西壁近くから、坏身（４）と坏蓋（１～２）が東壁近くに分かれて出土した。その他の遺物としては、鉄鏃（28・29）2点が南側の棺台付近から出土し、北側の棺台付近からも破損した鏃の茎部1点が出土した。

床面上には、拳大の礫を使用した石敷が認められ、奥壁付近では密集した状態で敷かれているが、左側壁中央部から玄門にかけてはまばらな状況である。また、石室の中心軸線より少し西側の位置には、棺台と推定される人頭大の石が、距離約1.6 mおいて2点認められる。

羨道閉塞石は、玄門より0.4 m羨道部に入った位置に、人頭大の礫約20個を2段に積み上げていた。これら石敷および羨道閉塞石は、墓壙として拡られた地山面に直接置かれており、地山面との間には埋土は認められなかった。

石室の墓拡は、本古墳が東南斜面地に立地することから、北側の奥壁部から玄室中央部まで地山を掘っているが、南側はゆるやかに傾斜した地山上に石室を直接築いている。しかも墳丘の南側は区画するために掘り下げられており、一段高くなった位置に羨道入口が作られている。

(B) 遺　物　（図版第31～33）

石室から出土した遺物は、須恵器の坏蓋（１・２）・坏身（３～７）・脚付直口壺（９）・蓋坏（８）・甕（10）と鉄鏃（28～30）である。その他、石室の前庭部および周濠からは、破損した須恵器片が多数出土した。出土した遺物の大部分は小さな破片であって、完形品に復元できたものは少ないが、器種としては、蓋杯・提瓶・広口壺・直口壺・甕・甕などがある。また墳丘盛土中からは、広口壺の口縁（27）が1点出土している。

石室内から出土した蓋杯は、いずれもセットをなさないもので、口縁部に使用による割れが多数認められる。杯蓋はゆるやかにカーブするもの（１）と、口縁近くで少し折れるもの（２）がある。直径14.7～15.0 cm、高さ4.5～5.5 cmを測る。焼成はいずれも堅く焼きしめられており、暗灰色を呈する。ヘラ削りは天井部の$\frac{1}{2}$まで施されている。坏身は、受部の立ち上りがそれほど高くないが、しっかりしており、底部のヘラ削りも約$\frac{1}{2}$まで施されている。焼成は（７）を除いていずれも堅く焼きしめられており、暗灰～青灰色を呈する。胎土は砂粒をかなり含む。年代観としては、6世紀後葉が考えられる。脚付直口壺と蓋は胎土・焼成などからセットをなすもので、蓋は擬宝珠のつまみがつき、内側に低い受部をもつ。直口壺は体部の肩に2条の凹線が走り、胴部下から約$\frac{1}{3}$はヘラ削りで整形されている。脚部は2ケ所に一段透しの孔があり、退化現象が著しい。焼成はいずれも堅く焼きしめられ、暗灰色を呈する。甕（10）は大きく外開きする口縁部と頸部との境に一条の凹線をめぐらし、小さな体部の肩にも1条の凹線をめぐらしている。体部に斜めの一孔があり、体部の下から約$\frac{1}{3}$はヘラ削りで整形されている。焼成は悪く、内外面とも灰白色を呈する。

鉄鏃（28・29）は、柳葉式の鏃である。（28）は完形品で長さ12.6 cm・幅3.1 cm、厚0.7 cm

を測る。茎部はいずれも扁平な長方形を呈する。（大船）

24. 塚脇Ｃ－７号の調査

高槻市大字原１－３－９番地にあたり、小字名は帯仕山と称する。現状は山林である。今回、宅地造成の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。なお本古墳は、緑地公園として保存されることが決ったため、石室内部と墳丘裾部の調査に限られた。

(A) 古墳の構造（図版第34～37・86・90・91）

塚脇Ｃ－７号墳は、Ｃ－６号墳の北西方約50mに位置する円墳で、Ｃ支群の中では最高位に構築築されている。墳丘の規模は、墳丘測量結果によると直径約9.5m、高さは南側で約2.5mを測り、西・北側に幅１m、深さ0.3～0.6mの濠が掘られている。標高は120mを測る。墳丘の遺存状態は、Ｃ－６号と比べ良好であるが、中央部に石の抜き取り跡である凹みが認められ、側壁の一部が露出している。

内部主体は、比較的大きな角礫を使用した無袖の横穴式石室である。石室の規模は幅１m、長さ4.7mを測り、石室の中心軸は西に36度偏っている。石室の遺存状態は、一番良好な奥壁で４石目までであり、床面から高さ約1.4mを測る。石室内には上半部に撹乱層である黄土色含礫土層が堆積し、下半部には自然堆積層である青灰色粘土層が厚く堆積して床面上の遺物を良く保存していた。

石室内の遺物の出土状態は、奥壁部から須恵器の蓋（１～４）・椀（５）がまとまって出土し、中央部西壁寄りから土師器の椀（６）が出土した他、閉塞石下からも須恵器の坏身（７）と金環（39）が出土した。また鉄釘は奥壁部に５点、石室中央部に12点、閉塞石付近に12点がそれぞれまとまって出土した。床面には石敷・棺台と考えられる扁平で大きな石材が、全体に集中することなく認められた。また石室中央部の床面には、粉末化した人骨が小範囲に分布していた。

羨道閉塞石は、人頭大の角礫を10数個使用して、床面より高さ0.65mまで積み上げている。特に本古墳の石室の特徴は、斜面上に築かれたことから石室の大部分は盛土上に直接置かれており、しかも床面を水平に保ったことから、羨道の入口は南墳丘裾より約1.7mの高さに位置することである。

(B) 遺　物（図版第38～42）

石室内から出土した遺物は、須恵器の蓋（１～４）・椀（５）・坏身（７）と土師器の椀（６）と金環（39）・鉄釘（40～69）である。その他、石室の前庭部および周濠からは、石室から掻き出された多数の須恵器片と鉄釘２点を出土した。須恵器の器種としては、蓋坏・無蓋高坏・小型壺・長頸壺・甕などがある。

石室内から出土した須恵器の蓋は、扁平な擬宝珠のつまみがつくもの（１～３）とつかないもの（４）に分けられる。内側にはいずれも高い受部をもち、天井部外面にはわずかにヘラ削り整形が施されている。直径は10.7～11.1cm、高さ2.1～2.9cmを測る。焼成はいずれも堅く焼きしめられており、暗灰色（１）ないし青灰色（２～４）を呈する。胎土は砂粒をかなり含む。須恵器の椀

（５）の焼成は堅く焼きしめられており、内外面は青灰色を呈する。胎土は砂粒をかなり含む。底部付近の外面にはヘラ削りが見られる。直径11.2㎝、高さ6.1㎝を測る。土師器の椀は、平担な底部からゆるやかな弧を描き口縁部に移る。焼成は悪く、内外面とも黄灰色を呈する。胎土は砂粒をかなり多く含んでいる。外面の調整は風化が著しいため詳細ではないが、全体にナデ調整を施している。直径13.7㎝、高さ6.2㎝を測る。須恵器の杯身（７）は、受部の立ち上りの内傾度が強くなり、口縁部からゆるやかな底部に移動する小形のものである。焼成は良であり、灰青色を呈する。直径11.0㎝、高さ3.9㎝を測る。石室から出土した須恵器の年代観は、６世紀末から７世紀初めと考えられる。

金環（39）は、長径3.8㎝、短径2.5㎝のもので、太さは0.7㎝を測る。遺存状態は良であり、一部に銅芯の地金が見られる。

鉄釘（40～64）は頭部の形によって大きく２種類に分けられる。A類（40）は頭部が円形の球状を呈するのに対し、B類（41～64）は一端を折りまげて長方形の頭部を作っている。断面は両者とも方形である。B類の平均的な長さは10～11㎝を測り、最大長は（55）の12.7㎝である。（大船）

25. 塚脇Ｄ－１号墳の調査

高槻市大字原１－３－３番地にあたり、小字名は帯仕山と称する。現状は山林である。今回、宅地造成の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

(A) 古墳の構造（図版43～45・87・91）

塚脇Ｄ－１号墳は、帯仕山の頂上（三角点）より北西方15ｍに位置する方墳で、塚脇古墳群の中では最高所に構築されている。標高は192ｍを測る。Ｄ－１号墳の墳丘の形状および規模は、盛土の流出が著しく、墳丘南西部の一部が畑地として開墾されていることもあって、調査当初は不明であった。墳丘盛土の調査段階において、幅0.3～0.8ｍ、深さ0.1～0.2ｍの浅い溝が地山を掘り込んでいるところから、一辺約５ｍ、高さ約0.4ｍの小さな方墳であることが判明した。墳丘盛土は黄土～暗黄土色土層であり、非常に薄い土層で堆積していた。

内部主体は、無袖の小型横穴式石室である。石室に使用されている石材は全て丸い河原石で、下の芥川から運び上げたものである。石室の規模は幅0.8ｍ、長さ2.7ｍを測り、石室の中心軸は東に14度偏っている。石室の遺存状態は、保存の良い右側で3石目までで、床面から0.65ｍを測る。石室内には上半部に攪乱層である暗黄土色土層が堆積し、下半部に自然堆積層である黄土色土層が薄く堆積し、床面上の遺物を良く保存していた。

石室内の遺物の出土状態は、奥壁の西寄りに土師器の坏（６）が出土し、中央部南西寄りに須恵器の蓋坏（１～５）がまとまって出土した。また床面上には、棺台と考えられる礫が数点認められた他、石室入口部では、拳大の礫10数個が石室の内外を区画するように置かれていた。

石室の墓壙は、東西辺2.2ｍ、南北辺3.4ｍ、深さ0.3～0.4ｍを測るが、石室を構築する段階で、設計変更したらしく、石室を西に寄せて幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍの掘り方を新しく掘り

下げている。墓拡の南側には、石室の中心線上に幅0.8～1.1 m、深さ0.1～0.3 m、長さ5 mの排水溝が掘られている。排水溝の断面はU字状を呈し、埋土は暗黄土色土層である。排水溝中からは、破損した須恵器の坏身（８）・坏蓋（９）が溝底から遊離した状態で出土した。

(B) 遺　物（図版第46・47）

石室内から出土した遺物は、須恵器の坏蓋（１～３）・坏身（４・５）と土師器の坏（６）である。その他、排水溝および周濠中からは少数の破損した須恵器片・土師器片・灰釉陶器片が出土した。いずれも細片であって、完形に復元されたものは少ない。

石室内から出土した須恵器の坏蓋は、いずれも小型のもので直径9.1～10 cmを測る。宝珠形の低いつまみをもち、内側にごく低い受部をまだ残している。いずれも焼成は堅く焼きしめられており、灰褐色（１・２）ないし青灰色を呈する。（３）は特に外面全体に自然釉がかかっている。坏身の（５）は焼成が悪く、土師質をなし、内外面とも灰白色を呈する。（４）の焼成は堅く焼きしめられており、青灰色を呈する。胎土は砂粒をかなり含む。底部外面はヘラによる整形を行っている。土師器の坏（６）は、直径10.2 cm、高さ3.1 cmを測る。体部はゆるやかにカーブし、口縁端部を細くおさめいる。内面は密な暗文が施されている。胎土は精選された粘土で、薄く丁寧に仕上げられている。焼成は良で、内外面は赤褐色を呈する。石室内の出土遺物の年代観としては、７世紀前半と考えられる。その他、周濠から出土した須恵器の杯蓋は、いずれも14～16 cmの大型のもので、内側に受部をもつもの（９・10・13）と受部をもたないもの（14・15）に分けられる。体部は扁平となり、擬宝珠のつまみがつく。（10）は焼成が不良で、内外面は暗灰色を呈する。周濠から出土した杯身は、底面に方形断面の高台がつくもので、奈良時代のもの（11・16～19）と考えられる。その他の遺物として、もう少し年代が下る灰釉陶器の皿（推定径約25 cm）がある。明確な遺構を発見することができなかったが、付近に火葬墓群が存在していた可能性が高い。（大船）

26. 塚脇Ｅ－１号墳の調査

高槻市大字原１－３－29番地にあたり、小字名は帯仕山と称する。現状は山林である。今回、宅地造成の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

(A) 古墳の構造（図版第48～54・86・88・89）

塚脇Ｅ－１号墳は、帯仕山の東斜面に立地する円墳である。標高は124 mを測る。墳丘の規模は径13.5 m、高さ3 mを測り、西側には幅2 m、深さ0.5 mの浅い濠が掘られている。墳丘の遺存状況は良好で、頂上部に石抜き跡である小さな凹みがあり、天井石・奥壁・側壁の一部が露出している。墳丘の盛土は、東側に傾斜した黄褐色礫土層〔地山〕上に、小さな礫が混入した暗黄土～暗褐色土層が互層に厚く堆積している、墳頂部での盛土の高さは約2 mである。

内部主体は、細長い左片袖の横穴式石室である。石室の遺存状況は、天井石が抜き取られた段階で、玄室の両側壁が全体にわたって崩れ落ち、東側壁もその衝撃を受けて少し外側に傾いた状態を呈している。石室の規模は、玄室幅1.1 m、玄室長4.3 m、羨道幅0.9 m、羨道長3.3 mを測り、今回調査した４基の古墳の中では最大である。石室の中心軸は、東に14度偏いている。

石室内の土層の堆積状況は、床面上に自然堆積層である黄褐色土層が厚さ約0.1mm認められ、その上に西側壁の石が折り重なる状態で崩れ落ちていた。床面には、拳大の亜角礫を利用した石敷が羨道閉塞石までほぼ全面にわたって敷かれていたが、棺台と考えられる大きな礫は認められなかった。

石室内の遺物は、崩れる以前に撹乱を受けたらしく、非常に少ない出土量であった。石室内の遺物の出土状態は、奥壁部で須恵器の蓋坏（1～3）・高坏（4）と銀環（16）・刀子片（18）が出土し、中央部から銀環の対になるもう1点が出土した。その他、羨道閉塞石の間からは、破損した刀の鐔（17）・鉄釘（19）・鉄楔（20）の3点が出土した。

羨道閉塞石は、玄門より約1.5m 羨道内に羨道部幅とほぼ同様の大きな石1個と人頭大の石5～6個が置かれていた。これら石敷および羨道閉塞石は、直接墓壙の地山面上に置かれており、地山面との間には埋土は認められない。

石室の墓壙は、古墳が東斜面上に立地することから、西側壁側では約0.4mの掘り込みが認められるが、東側壁側では地山面との比高差がなくなり、石室の石を直接地山面上に置いている。床面と側壁の掘り方の比高差は約0.2mである。

古墳の南西部の周濠からは、破片となった須恵器が多数出土した。器種としては、坏蓋（5・6）・大甕（7・8）・広口壷（9）・脚付直口壷・高坏などがある。

(B) 遺　物（図版第55～56）

石室から出土した遺物は、須恵器の坏蓋（1）・坏身（2・3）・無蓋高坏（4）と金環（16）と刀の鐔（17）・刀子（18）・鉄釘（19）・鉄楔（20）である。その他、石室の前庭部および周濠からは、破損した須恵器片が多数出土した。出土した大部分が大甕片であって、2個体に復元することができた。その他の器種としては、坏蓋・広口壷・脚付直口壷・無蓋高杯などがある。

石室内から出土した須恵器の坏蓋（1）は、ゆるやかに天井部から口縁部に移行するものである。焼成は堅く焼きしめられ、黄灰色を呈する。天井部の約$\frac{2}{3}$はヘラ削りによる整形がおこなわれており、ヘラ描きによる窯印が認められる。坏身（2・3）は、受部の立ち上りが高くないものの、しっかりしており、底部のヘラ削りによる整形も約$\frac{2}{3}$近くまでおこなわれている。焼成は（2）が良で、（3）は堅く焼きしめられており、青灰色（2）および暗灰色（3）を呈する。（3）の内面には赤色顔料が一部残っている。無蓋高杯（4）は、少し外開きする口縁部と底部との境に2条の凸帯をめぐらし、その間を櫛目で埋めている。脚部は3ケ所に透し穴がある。焼成は堅く焼きしめられており、暗灰色を呈する。石室内から出土した遺物の年代観は、6世紀後葉が考えられる。

銀環（16）は、長径2.6cm、短径2.4cmのもので、太さは0.5cmを測る。遺存状態は良く、一部に銅芯の地金が見られる。

鐔（17）は鉄製で、長径7.2cm、短径6.3cm、厚さ0.5cmを測る。中央部には右寄りに径4cmの透し孔の跡がある。刀子（18）は、先端部を欠損した茎部に近い部分であり、刀部に木鞘の一部が錆びついている。鉄釘（19）および鉄楔（20）も同じく破損したもので、全体の形状については不明である。鉄釘は現存長6.3cmを測り、断面は方形である。鉄楔は現存長5.2cm・幅1cm・厚さ1cmを測る。

次に、周濠から出土した大型の甕（７・８）と広口壷（９）は、完形に復元することができたので略記する。甕（７）は、広く外反する短い口頸部の端部を外におりまげて、断面四角形に仕上げている。体部の最大径は上部の約$\frac{1}{3}$に位置し、外面には平行叩目とその上にカキ目を施し、内面には同心円文がついている。底部はやや尖りぎみの丸底を呈する。焼成は良であり、色調は暗灰色である。胎土は砂粒を含む。口径21.3㎝、高さ44.5㎝、最大40.5㎝を測る。甕（８）は（７）と同じく、広く外反する短い口頸部の端部を外におりまげて、断面四角形に仕上げ横ナデしている。体部の最大径は上部の約$\frac{1}{4}$に位置し、外面には平行叩目の後ナデ調整を施し、内面には円心円文がついている。底部は尖りぎみの丸底を呈する。焼成は堅く焼きしめられており、色調は暗灰色で肩部に黄灰色の自然釉がついている。胎土は細砂を含む。口径25.4㎝、高さ46.2㎝、最大径46.5㎝を測る。広口壷（９）は、短かくわずかに外反する口頸部をもち、口縁端部は内外から横ナデによって、水平に仕上げられている。体部は扁平で肩が張り、底部は丸くヘラ削り整形によって仕上げている。内面はミスビキのあとが著しい。焼成は堅く焼きしめられており、色調は暗灰色を呈する。胎土は細砂を含む。口径10.8㎝、高さ6.7㎝、最大径12.4㎝を測る。（大船）

XI 安満遺跡

弥生時代の環濠集落址として著名な安満遺跡は、国鉄高槻駅の東方約1㎞に位置する。遺跡は桧尾川が形成した扇状地の末端部に立地し、標高は8～12ｍを測る。遺跡の範囲は西の国鉄跨線橋から東の桧尾川まで東西1.2㎞、南北は国鉄東海道本線から阪急京都線まで0.3㎞を測り、高槻東部の遺跡の中では最大規模を誇っている。

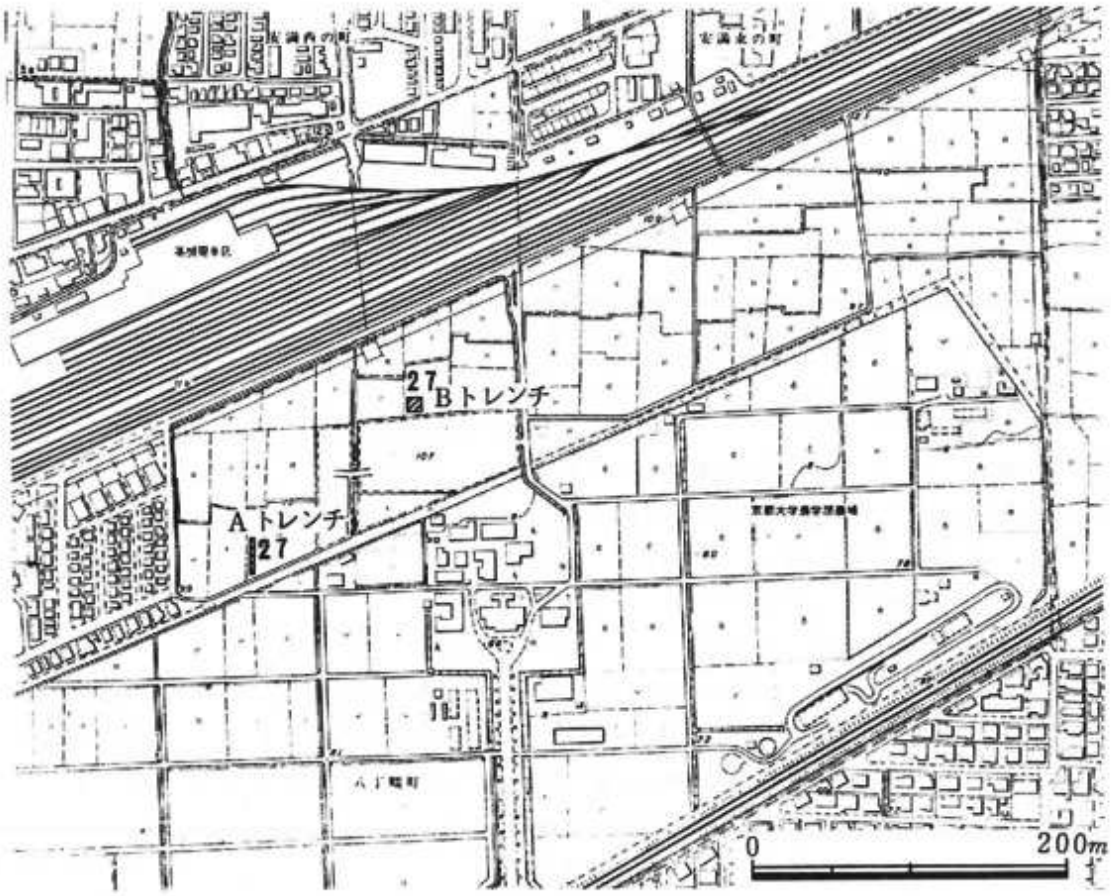
今回の発掘調査は、安満遺跡を史跡指定するためにおこなった遺構確認調査である。調査地および調査方法については、地元との協議によって、京大農場と国鉄に挟まれた水田地帯を大きく5ブロックに分け、各ブロックごとに10ｍ角のトレンチを設け、2年計画で実施することとなった。今年度はまず西側に位置するA・Bブロックに設定した2ケ所のトレンチを調査した。

27. 安満遺跡遺構確認調査

Aトレンチ（図版第58）

高槻市八丁畷町321－1番地にあたり、小字名は才田と称する。Aトレンチは、今回の調査範囲予定地内では、最も西側に位置し、京大農場事務所から北西方約180ｍのところにある。調査地の水田が南北に非常に細長い形を呈するため、一辺10ｍ四方のトレンチを設けることができなかった。そこで、トレンチは南側の農道に寄せて、東西辺4ｍ、南北辺25ｍの細長いものを設けた。調査はまず機械掘削によって、耕土を除去したのち、人力で各層ごとに掘り下げをおこなった。主な層序は、耕土（0.2ｍ）、暗黄褐色砂礫層（0.2ｍ）、暗灰色パラス層（0.2ｍ）、青灰色パラス層（0.4ｍ）、青緑色砂質粘土層〔地山〕であり、耕土下に床土は認められなかった。

検出した遺構面は、4層に分かれる。耕土で検出した上層遺構は、落ち込み2ケ所、溝2条・柱穴等である。落ち込みは、トレンチの北寄りに位置する。規模は径約4ｍ、深さ0.2ｍを測り、断



挿図7　　安満遺跡の調査位置図

面は皿状を呈する。平面形は不定形な円形を呈すると考えられるが、西側の大部分は調査区域外にあり、正確な形状については不明である。埋土は暗褐色土層であり、畿内第Ⅰ様式の土器片が若干出土した。落ち込み2は、トレンチの南側に位置する。規模は径4m、深さ0.1mを測る。西端は調査区域外にあり、平面形は不定形なものである。埋土は暗褐色土層であり、畿内第N様式の土器片が若干出土した。溝1は、落ち込み1の東側に位置した細長い土壙状のものである。規模は幅08m、長さ2.6m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色土層であり、時期不明の土器片が数点出土した。溝2は、トレンチ中央部南寄りに位置する。平面形は東西方向に流れ、東側で南側に折れ曲っている。規模は幅1.4m、深さ0.3mを測る。埋土は暗褐色礫土層で、畿内第Ⅱ様式の土器片が数点出土した。柱穴はトレンチ南側に位置し、規模は径0.2～0.4m、深さ0.1～0.4mを測る。埋土は暗褐色土層で、中期の土器片が数点出土した。

青灰色バラス層が地山である中層遺構は、方形周溝墓1基と土器溜1ケ所である。方形周溝墓は、トレンチの南側に位置し、西・北溝と墳丘の一部を検出したが、大部分は調査区域外にあり、墳丘の規模等は不明である。周溝の規模は、幅1.6～2m、深さ0.2～0.3mを測り、埋土は暗灰褐色土層である。周溝内からの出土遺物は、北西コーナから北溝にかけて、完形の大型甕1個体と破

砕した中型の壺・甕2個体の計3個体分がある他、別個体の破片も若干認められる。出土した供献土器は、いずれも一般的な底部穿孔は見られず、溝底から横転した状態で出土している。時期は畿内第Ⅲ様式でも新しい段階に位置づけられる。土器溜は、トレンチ中央部北寄りに位置する。トレンチ北側は、西側に少し傾斜した地形を呈しており、礫の大きな暗灰色バラス層が堆積している。土器溜は暗灰色バラス層の上部に包含されており、径2m範囲に約50点の土器片が密集することなく検出された。

トレンチ南側で検出した下層遺構は、溝1条と土器溜1ケ所である。溝は方形周溝墓と重複しており、トレンチ中央部で南に折れ曲っている。溝の規模は、幅1～1.2m、深さ0.3～0.4m測る。埋土は土層が暗灰褐色土層、下層が暗灰色粘土層である。遺物は下層中から、畿内第Ⅱ様式の土器片が若干出土した。土器溜も同じく方形周溝墓と重複した位置にある。土器溜の堀り方は、平面形では溝状を呈しているが、西側は畿内第Ⅱ様式の溝によって切られており、東側は調査区域外にあるため、詳細については不明である。規模は、幅1m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰褐色土層であり、出土遺物は大型の鉢・小型の壺2個体分と石庖丁の未製品2点がある。時期は畿内第Ⅰ様式でも新しい段階に位置づけられる。

最下層の地山面で検出した遺構は、トレンチ中央部に位置する大溝である。トレンチの南半分は、排土の関係から掘り下げることができなかったため、大溝の東岸は検出されていない。大溝は青緑色砂質粘土層を南北方向に約50cm掘り込んで、青灰色バラス層が堆積したものである。西岸では、長さ0.3～0.5mの流木や自然植物遺体が薄い堆積層をなしていたが、中央付近では認められなかった。また時期不明の土器片1点が、自然植物遺体の堆積層中から出土している。

Bトレンチ（図版第59・60）

高槻市八丁畷町367－1番地にあたり、小字名は灰原と称する。Bトレンチは、Aトレンチの北東方約100mに位置し、京大農場事務所から北西方約150mにあたる。Bブロックの中で調査位置に選ばれた水田は、Aトレンチの水田と比べて広く、一辺10m角のトレンチを水田内で自由に設けることができた。調査はまず重機によって、耕土・床土を排土し、遺物包含層である黒色土層から人力で掘り下げをおこなった。主な層序は、耕土（0.2m）、床土（0.1～0.2m）、黒色土層〔遺物包含量〕（0.1～0.2m）、暗灰色砂礫層～暗茶褐色土層〔地山〕である。

トレンチの南側で立看板の基礎による細長い撹乱を認めた以外、調査区全域から各種の遺構を検出した。検出した遺構は、弥生時代前期の溝1条・土器溜1ケ所、中期の竪穴住民址1棟・土壙墓1基・多数の柱穴、後期の方形周溝墓1基などである。特に今回の調査地は、安満遺跡の範囲の中でも中心部に近いこともあって、各時期の遺構が重複して同一地山面で検出された。

前期の溝は、トレンチの北東部に位置する。平面形は逆L字状を呈するが、東側の大部分は調査区域外にあたるため、詳細については不明である。規模は幅2.2m、深さ0.2mを測る。埋土は黒色土層であり、前期の遺物の大半は、この溝中から出土した。前期の土器溜は、トレンチのほぼ中央部に位置し、平面形は不定形な隋円形を呈する。規模は長径1.4m、短径0.8m、深さ0.2mを測り、断面は皿状を呈する。埋土は黒色土層である。土壙内から出土した土器は、いずれも接合しない小さな破片が大部分であり、完形に復元できたものは皆無である。土器溜の用途としては、土

器片の出土状態から推して、土器片を集めて埋め戻したゴミ穴と考えられる。時期は畿内第Ⅰ様式の中でも新段階のものである。

中期の竪穴式住居址は、トレンチの北西隅に位置する。検出した遺構の大部分は調査区域外にあり、詳細については不明であるが、平面形は方形を呈すると考えられる。深さは約0.2mを測り、周溝は幅0.2m、深さ0.15mを測る。埋土は黒色土層であり、中期後半の土器が少数出土した。土壙墓はトレンチの中央西寄りに位置する。規模は幅0.8m、長さ2m、深さ0.1mを測る。平面形は長方形を呈し、主軸は東西方向にある。底面は水平を呈するため、木棺墓であった可能性が高い。埋土は黒色土層であり、時期不明の土器片が若干出土した。柱穴はトレンチの全域から、300個以上が重複するように検出された。規模はいずれも径0.3～0.5m、深さ0.2～0.4mを測る。これら多数の柱穴は、時期的には前期から中期のものが混在しているのであるが、柱穴の埋土に色別が認められず、時期的に抽出して掘ることが困難であった。また、建物の配置については、柱穴の形状や柱穴の深さなどによって復元を試みたが、調査範囲が狭小なこともあって、成果を上げることができなかった。その他の遺構としては、土壙墓に南接して焼土壙がある。焼土壙は、壁面全体にわたって厚さ2cmの焼土化が見られ、埋土中にも多量の焼土が含まれていた。規模は径0.8m、深さ0.1mを測る。出土遺物は認められなかったが、竪穴住居址内の炉跡であった可能性が高い。

後期の方形周溝墓は、トレンチの南側に位置する。規模は東西6.5mを測り、南側は大部分が調査区域外にあるため、南北長については不明である。また、検出した範囲では、埋葬施設は削平されたためか認められなかった。周溝の幅は約1m、深さ0.45mを測り、床土直下から掘り下げがおこなわれている。埋土は黒色土層の一層のみである。供献土器は、畿内第Ⅴ様式の小型甕1個体が、北溝の北西部の溝底約0.1mから出土した。その他、周溝の埋土内からは、前期から後期に属する土器片が少数出土したが、大部分は流入土に混入した細片であって、完形に復元できたものはなかった。

遺　物（図版第61～74）

遺物としては、A・B両トレンチから土器・石器をはじめとして、流木などが検出されている。

1. 土器

土器は両トレンチ合わせて、コンテナ約70箱分を検出した。以下トレンチ毎に概略を記す。

Aトレンチ

当該トレンチでは、土器溜・落ち込み・東西溝・方形周溝墓・黒色土層（遺物包含層）などから土器が検出されている。土器溜からは1・2（図版第61）の土器が出土している。1はやや薄い円盤状の底部に縦長球形の体部と水平近くにまで外反する口縁部のつく壺である。頸胴部が直線的に成形されていることにより、前期の土器として認められるがごとくの代物である。外表面は風化が激しいが、黒斑部にヘラ磨き痕が観察できる。文様はいっさい施されていない。内面はナデ調整によって仕上げられている。胎土は軟質で、クサリ礫と砂粒を多量に含んでいる。色調は褐色ないし淡褐色を呈している。2は大形の鉢で、円盤状の底部に半球状の体部がつき、口縁部は短く外反している。体部上位に一条の沈線をいれ、その沈線上の4方に形骸化した瘤状把手を配している。外面は全面に粗い刷毛調整を施した後、部分的にヘラミガキをおこなっている。内面は風化激しく調

整痕は不明瞭である。色調は淡褐色ないし灰褐色を呈す。胎土は1と同様、クサリ礫を多く含むが砂粒はやや少ない。1・2とも弥生時代前期末と考えられる。

落ち込みからは1～7（図版第63－a）の土器が出土している。1～5は壷の破片で、1・2は紐とじ穴がみられる。6は小形甕の口縁部片で、7は体部上半の破片で、4条のヘラ描沈線文がほどこされている。色調はおおむね淡褐色で、炭化物の付着が目立つ。時期的にすべて前期後半に包括される。

東西溝からは8～10の土器が検出された。いずれも壷の破片である。8は口縁部片で断面は矩形を呈する。内面に3条の櫛描直線文がみられる。9・10は胴部片で、やはり3条の櫛描直線文と波状文がほどこされている。8～10は同一個体の可能性が高い。色調は灰褐色を呈し、胎土は小石粒を含む。中期前半（畿内第Ⅱ様式）に位置づけられる。

方形周溝墓の溝内からは供献土器の3～5（図版第61）と混入土器の1～11（図版第63－b）がある。供献土器3は長頸の壷でやや胴のはった球形の体部からなだらかに立ちあがる頸部につながるもので、口縁部は水平方向にまで外反している。口縁端部は上下に突出し面をもつ。遺存状態はあまりよくない。外面は刷毛調整後体部のみを軽くヘラ磨きし、内面は刷毛調整後、ナデている。そして、口縁内面には2段の櫛描扇形文をめぐらし、頸部から体部にかけては13本の歯抜けの櫛描直線文を6段にわたってほどこしている。胎土は砂粒を多く含むが、最大腹径近くの器壁は極めて薄くつくられている。色調は淡褐色を呈す。供献土器4は甕で、あまり胴の張らない縦長のもので、口縁部は短く外反し端部は上方にわずかに突出している。体部外面は刷毛調整後、下半をヘラ磨きしている。内面下半は軽くヘラで削った痕がみられ、上半は刷毛で丁寧に調整している。なお、体部上位の限られた範囲に刺突列点文がみられ、正面を意識して付したものか、あるいはこの甕に何らかの意味合いをもたせたものであろう。なお中位に煤が薄く付着している。胎土はやや砂質も良。色調は茶灰色ないし灰褐色を呈している。供献土器5も甕で、ほぼ完形で検出した。胴の張りがつよく体部上半は球形を呈し、下半は逆錘状に底部へ移行している。口縁部は屈曲して短く外反し、端部は上方へ突出し面をもつ。内外面とも刷毛調整をほどこすのみで仕上げている。また遺存状態をみる限り煤の付着はない。胎土・色調とも供献土器3に酷示している。これらの供献土器は畿内第Ⅲ様式の所産と考えられる。周溝内の流入土から検出された土器は、壷・鉢・高坏・甕などがあるが、いずれも破片である。2は鉢の口縁部片で、上縁を外側へ折り曲げて肥厚させている。11は台付水差ないし壷の台部片である。混入土器は畿内第Ⅲ様式と第Ⅳ様式に限られ、当該周溝墓を理解するうえで1つの資料となる。

その他Aトレンチの包含層から弥生時代各時期の土器が検出されている。（図版第64－a）。1～3は前期のもので1・2が壷、3が甕の破片である。2の壷は削り出し凸帯に沈線を組み合わせたもので、安満遺跡の当該地区の既調査の中では形式的に古相を示す。また3は逆L字状口縁をもつ甕であり、安満遺跡では極めて類例の少ないものである。4～7は中期のもので、壷と甕の1部である。包含層の中からはこの時期のものが数量的に最も多く出土している。8～11は後期のもので、10が壷、8・9・11が甕である。なかでも9は受口状口縁を呈するものであるが、受口部はタタキ板でもって成形された珍らしいものである。当該トレンチにおける後期の土器は極めて少な

く、ここに掲げた数点でもって、すべてである。12は庄内式（新相）甕形土器の口縁部片である。他に床土直下から須恵器・土師器の破片が若干検出されているが、水田造成時の客土内のものと思われ、特筆すべきものはない。

Bトレンチ

当該トレンチでは、土器溜・溝2・ピット・方形周溝墓・黒色土層（遺物包含層）から土器が検出されている。土器溜からは1～4（図版第62）をはじめとして、多くの土器片が出土している。1は壺の上半部で、体部からなだらかに頸部へ移行し、口縁部は外上方に大きく外反している。口縁部は端面に1条の沈線をほどこすとともに、上下を指でつまんでおり、波状口縁気味の起伏がみられる。とくに後者の施文手法は北摂における第Ⅱ様式の壺の口縁端加飾法に強く関連していくものと思われる。また頸部中位・体部上位には多条沈線文を施している。外面は刷毛調整後、口縁部付近をナデ仕上げしている。ヘラ磨きについては判然としないが、頸部上半の刷毛目から、頸部施文帯以下にのみ施したものと思われる。内面は刷毛調整後、口縁部のみナデ仕上げしている。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡灰褐色を呈している。2は甕で、やや直線的な倒鐘形の体部に外方へ短く折り出した口縁部のつくものである。底部はさほど大きくない。施文はなく、内外面とも刷毛調整後、全面をナデつけている。外面中位にわずかに煤が付着している。胎土は砂粒を含むも、表面は平滑に仕上げられている。色調は茶褐色を呈している。3も甕で、倒鐘形の体部から緩かに外反する口縁部がつく。甕自身は大きく歪つになっているが、口縁部の形態は第Ⅱ様式の甕のそれに近くなっている。施文はない。体部外面は刷毛調整、内面は刷毛調整後ナデつけている。口縁部は内外面ともヨコナデしている。外面下位に剥離痕が目立つ。胎土はクサリ礫を含むやや軟質のもので、色調は暗茶灰色を呈す。4も甕でやはり倒鐘形の体部に緩く外反する口縁部がつくものであろう。底部は平底ではなく、輪高台状になっている。風化が激しく内外面の調整は不明。胎土は小石粒を多く含み、色調は褐色を呈する。また掲載した破片の中には3条のヘラ描波状文を有する壺（図版第64－a－1）や甕用蓋（同－5）などもある。この土器群は、上記のように第Ⅱ様式の土器に近い形態・文様を有するところから、前期でも終末期の一群と考えられよう。

溝2からは完形に近い台付鉢5（図版第62）をはじめとして、壺・甕・鉢などの破片が出土している（図版第65）。台付鉢5は体部中位で屈曲して立ちあがる無文の浅鉢に逆台形の低い台がつくものである。口縁部はヨコナデによって、やや外反気味に成形されており、端部は薄く終っている。内外面ともナデ調整のみでヘラ磨きはなされていないようである。胎土はやや砂質ながらも良。色調は暗灰色を呈している。器形的にはあまり例を見ないものである。壺類（図版第65－a）は多条沈線文をほどこすものが大部分で、なかには4のように沈線上に刻目のある貼付凸帯を付すものがある。胎土はいずれも砂粒を多く含み、灰白色ないし灰褐色を呈している。甕類（同－b）は多条沈線文・口縁刻目文のものが多く目につくが、1のように少条のものも若干ある。また台付鉢以外にも若干の鉢が検出されている。6は1条の沈線と口縁部に細かな刻目文がみられるもので、7・8には小さい扁平な瘤状突起が付されている。とくに後者は器表面にのこされた細かな刷毛目が目立つ。胎土は甕・鉢ともに大粒の砂粒を多く含む通有のものである。溝2出土土器の時期はおおむね前期後半である。

多くのピットからも若干の土器が検出されているが、いずれも細片に近く復元が不可能であり、資料化しにくい。6（図版第62）は大形壺の底部片で伴出土器から前期のものと考えられる。外面はヘラ磨き、内面はナデ調整している。胎土は小石粒を多く含み、色調は褐色を呈している。破片の状態から、すてられたときは大きな底部片であったことがうかがえ、人為的にピット内へ投棄されたものであろう。ピットの所属時期を考える際参考になる。

方形周溝墓からは供献土器と考えられる甕（図版第62－b）が出土している。体部は球形に近く、最大腹径は中位にある。器表面のタタキ目は下半が左下り、上半が水平方向であることから、2段階に分けて成形されたことがわかる。内面はナデ調整している。口縁部はわずかに立ちあがったのち上縁部を大きく外彎させており、口径が後径を凌いでいる。また底部は体部成形後、外面に若干の粘土を補って、手捏ねで成形している。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰褐色を呈す。時期は畿内第Ⅴ様式終末と考えられる。

つぎに黒色土層（遺物包含層）から出土した土器（いずれも破片）について簡単に触れておく。畿内第Ⅰ様式の土器（図版第66－a・b）は壺・蓋・甕などがみられる。壺のなかでは多条沈線のみ施文するものが圧倒的に多いが、頸胴部界に削り出し凸帯をほどこす2のようなものや、口縁部上下端に貼り付け凸帯を付す3のようなものも若干ある。また、壺と考えられる底部片から、叩痕を5ケ所程検出している。ちなみに大きさは7.8×2.9㎝、7.2×4.0㎝、6.5×3.3㎝、4.0×2.3㎝（半欠）である。蓋では壺用の10が1点出土している。甕では無文のもの、沈線文をほどこしたもの、刻目文をつけたものなど若干のバラエティーはみとめられるが特筆すべきものはない。これらの土器は土器群や溝2のものと同様、前期後半～末に比定されよう。畿内第Ⅱ様式の土器(図版第67－a・b）としては壺・甕・甑などがみられる。壺は三島の通例として、1～4のように口縁下端に刻目をほどこすものが多く検出されている。甕は口縁部に刻目のあるものとないものがある程度で、それ以上の変異はない。ただ今回の調査では、近江・山城系の甕は検出されなかった。また5・7は大形甕の口縁部片である。8・9は底部外面に木葉痕を有するもので、これまた三島地方に通有のものである。10は甕形土器の底部に円孔を穿ったもので、甑と解されている土器である。畿内第Ⅲ様式の土器（図版第68・69・70）としては壺・鉢・高坏・水差・甕などがあり、量的には最も多く出土している。この時期の壺は多種多様で形態・文様構成など、どれ1つをとってみても自己主張が強い。いま個々について記す余裕はないが、図版に口縁部と胴頸部の文様の若干を掲載した。鉢・高坏についても同様であり、その一部について掲載している。反面、甕はその機能からくるのか変化は少ない。それが機内第Ⅲ様式と第Ⅳ様式の峻別を難かしいものにしている。本調査のように甕が破片であればなおさらであろう。畿内第Ⅳ様式の土器（図版第69－b）としては、壺・鉢・水差・甕などが検出されている。全体的に灰褐色系統で砂質のものが多い。そのなかで、2はやや特異で、砂粒はほとんど含まず、色調も灰黄色を呈し、文様もヘラ描きの擬凹線である。他地域からの搬入品であろう。後期ないし古墳時代初頭の土器（図版第70－b）としては壺（1～3）・高坏（4～6）・甕（7～9）などが検出されている。Aトレンチ同様、この時期の土器は極めて少ない。またBトレンチからは後期の方形周溝墓が検出されているにもかかわらず、微々たるもので、ここに掲げた数点と後で述べる河内（生駒山西麓）産の数点で網羅されてしまう。

安満遺跡の集落の消長を考えるとき参考になろう。

黒色土層出土の河内産の土器（図版第71－a）には各時期のものが数点づつみとめられる。1・2は前期の壺片で、いずれも多条の貼り付け凸帯を付している。3～5は中期の土器で、3が壺、4が甕、5が蓋の破片である。6～11は後期の土器で、それぞれ6が甕、7が高坏、8～11が壺の破片である。

この他整地層からも前・中期の土器（図版第71－b、72－a）が若干検出されている。1～3は畿内第Ⅰ様式の壺片で、1は形態的にやや古く感じられる。4～9は畿内第Ⅱ様式の壺（4～6）、甕（7～9）片である。図版第72の1～6は畿内第Ⅲ様式の壺（1～4）、鉢（5）、高坏（6）の各破片である。7～10は畿内第Ⅳ様式の壺（1・2）、水差（9）、器台（10）の各破片である。整地層出土の土器はいずれも炭化物の付着が激しく、かつまた風化のすすんでいるものが多い。

以上、A・B両トレンチの出土土器を概観したが、総じて中期の土器、それも畿内第Ⅲ・Ⅳ様式のものが多く、つづいて、畿内第Ⅱ・Ⅰ様式の土器が目立った。反面畿内第Ⅴ様式の土器の少なさも注意を惹く。遺構とのかかわり合いをみれば、削平をあまり受けていない下層遺構から出土した畿内第Ⅰ様式の土器が多く復元できた。また顕著な遺構がみられなかった畿内第Ⅱ様式の土器についてはいずれも破片でしか示しえなかった。畿内第Ⅲ様式の土器も復元できたのは供献土器のみである。トレンチ別の出土量は調査面積がほぼ同じにもかかわらず1：3の比率になり、Bトレンチの方が前期・中期とも圧倒的に多い。これは集落の居住地域と各トレンチとの距離差であろう。

2. 石　器

今回出土した石器は、打製石器と磨製石器に大きく分けられる。打製石器では、石鏃・石錐・剥離した小剥片も多数出土している。打製石器の石材は、全てサヌカイトである。磨製石器では、石庖丁・石剣・蛤刃石斧・扁平片刃石斧・叩き石などが出土している。

石鏃〔図版第72－b〕Bトレンチの遺物包含層および柱穴等の埋土から7点出土した。石鏃には基部が直線および凹む三角石鏃（1～4）と、基部が突出する有茎石鏃（5～7）に分けられる。今回出土した石鏃の中で、時期が判明したものは、前期末の土器溜から出土した5・6である。3は幅1.4㎝、長さ5.6㎝を測り、三角石鏃としては長大なもので大型の類に属する。最も重いものは4で、6.1ｇを測る。

石錐〔図版第72－b〕　Aトレンチから1点・Bトレンチから3点計4点出土した。石錐は明確に頭部と錐部が区別されないもの（8）と、頭部と錐部が区別されるもの（9～11）に分けられる。8は尖端部の右側縁に、著しい磨耗が認められる。9は錐部に雑な2次調整が施され、頭部を大きく残すことから、手持ち用として製作された可能性が高い。

剥片石器〔図版第73－a〕Bトレンチの遺物包含層および柱穴の埋土から全て出土した。この石器は、原石から認意に剥離してできた薄い剥片を素材とし、鋭利な刃縁の一部に簡単な2次調整を施したものである。2次調整は刃部のみであるため、全体につくのは粗雑であり、背部に原礫面を残すものが多い。原礫面を残さないものは、1・2・7の3点だけである。刃部の2次調整は、両面側から施したもの（1・2・6・7・8）と、片面側から施したもの（3・4・9・11・12）に分れ、その他は使用による刃こぼれが認められる。

石庖丁〔図版第73－b〕弥生時代を代表する石器であるが、今回、完形品は出土していない。石材は桧尾川の転石としてある暗灰～黒色の粘板岩が使用されている。1は直線刃半月形を呈するもので、刃部は片刃である。紐孔の中央部には小さな錐跡が2ケ所認められる。2は前期の溝から出土したもので、長方形を呈し、刃部は両刃である。紐孔は1に比べ、中央部に寄った位置にあけられている。6・7は、Aトレンチの前期の土器溜から2点まとまって出土したもので、石庖丁の未製品と考えられる。周縁は、丁寧な打撃調整が施こされ、研磨を残すのみとなっている。

石剣〔図版第73－b〕8はAトレンチの落ち込み2から出土した。現存長6.6㎝、同幅3.2㎝を測る。左側縁下端にクビレ部が認められ、刃部の断面が凸レンズ状を呈することから、鉄剣形石剣であったことがわかる。石材は黒色の粘板岩である。

扁平片刃石斧〔図版第73－b〕 Bトレンチから3点出土した。9・10は刃部の幅2.5㎝であり小型品に属する。9の石材はサヌカイトであるが、打撃による剥離面が認められない程、全面に丁寧な研磨が施されている。刃部の裏面には、使用による破損が著しく、刃縁を大きく変形している。10の石材は黒色粘板岩である。石器の外面全体は、比較的丁寧な研磨が施されているが、刃縁はあまり鋭利に磨いていない。しかし、刃部の稜には、使用による磨耗が認められる。11は刃部の幅が5㎝あり、扁平片刃石斧では大型品に属する。11の石材は硬質の砂岩である。扁平な剥片を素材として、頭部・側縁部は丁寧な敲打によって垂直に仕上げられている。その後の研磨は、表面の刃部と凹凸した面の一部に施しているが、全体的には粗い打欠き面を残したままである。

蛤刃石斧〔図版第74－a〕 全てBトレンチの遺物包含層および柱穴の埋土から出土した。完形品は認められない。石材は全て閃緑玲岩である。1・2は全面が敲打痕に覆われているが、研磨がおこなわれておらず、製作中の失敗品である。3・4は石斧の頭部である。両者とも石斧の柄に装着する際の装置として、刻目が認められる。3は両面と側面に4ケ所、4は両面に2ケ所の刻目が、研磨後の敲打によって付けられている。5は刃部に近い胴部で、刃磨ぎの稜線が認められる。6は複雑に破損した刃部で、刃縁には小さな刃こぼれが残されている。7は小さな石斧の胴部である。小さな敲打痕の後に、上面と左側面に研磨が認められ、完形品であったことがわかる。2～4には、破損後の面に敲打痕が残り、叩き石として2次使用されている。その他石斧の製作に関するものとして、粗ら割り段階で破損した失敗品も、遺跡内から多数出土する。8・10～12の石材は、蛤刃石斧と同じ閃緑玲岩であり、いずれも大きな面を1面残すことから、粗く叩割った段階に失敗したものであろう。9の石材は、扁平な硬質砂岩の亜円礫である。側縁に敲打痕を残すことから扁平片刃石斧の失敗品と考えられる。（大船・森田）

28. 安満遺跡の調査

高槻市八丁畷町3の3番地にあたり、小字名は梨子ケ本と称する。現状は宅地で安満遺跡の西限とみられる地区である。今回、共同住宅（看護婦単身者寮）の建設を計画するにあたり、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

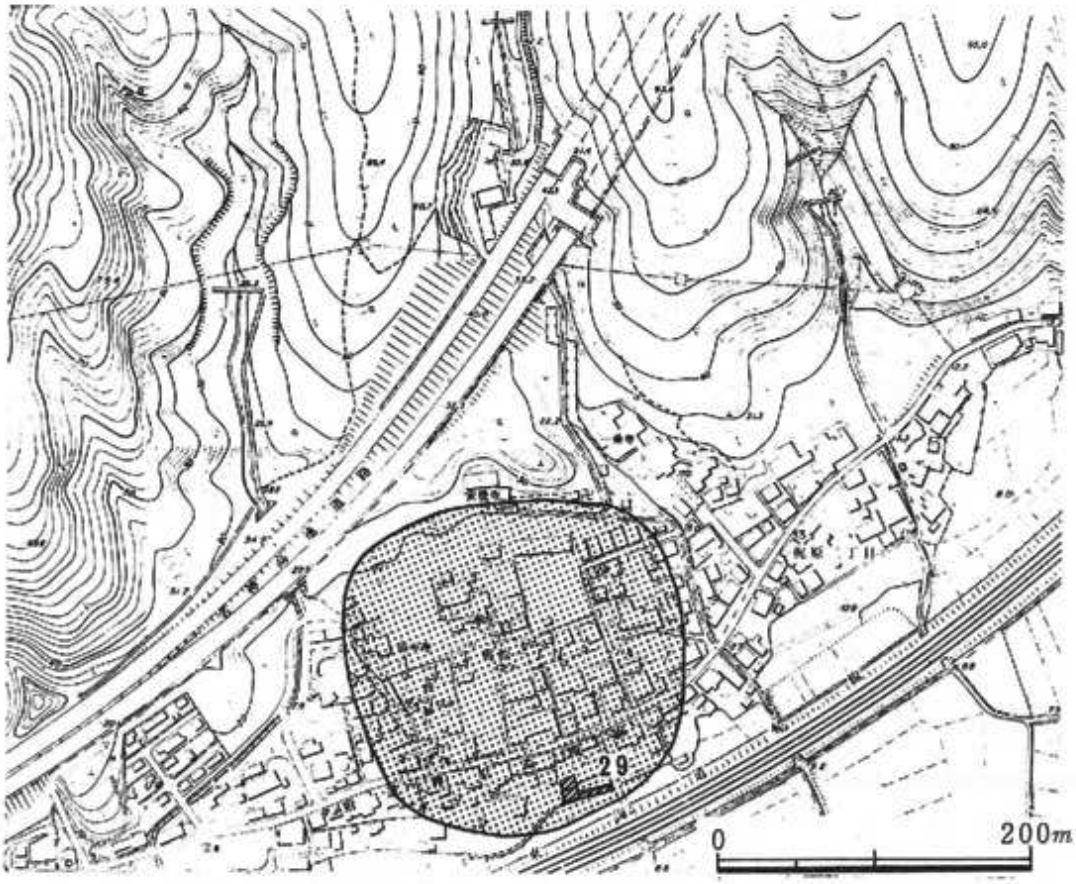
調査は届出地の中央部に幅約3ｍ・長さ約10ｍの試掘壙を二箇所設けて実施した。いずれも盛土（0.8ｍ）を除去すると、旧耕土（0.2ｍ）、青灰色砂質土（0.3ｍ）、黄灰色粘土（0.2～0.4

m）と堆積し、以下青灰色粘土と砂層の互層がつづいている。遺構・遺物はいずれの層からも検出されなかった。（橋本）

XII 梶 原 寺 跡

29. 梶原寺跡の調査

高槻市梶原一丁目382－2にあたり、小字名は大門と称する。梶原寺跡の南限と思われるところで、地名からみても伽藍配置等に関する手がかりが得られるのではないかと思われていた。今回、個人住宅の改築を計画するにあたり、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。



挿図8　梶原遺跡の調査位置図

調査は、届出地に東西3m・南北2mの調査壕を設定して行った。約1mの盛土下に青灰色砂質粘土（0.7m）が堆積し、下層は青灰色砂礫層となる。砂層上面で唐津焼の碗を1点検出している他は梶原寺に関する資料はまったく得ることはできなかった。（橋本）

ま　と　め

今年度の調査は、昭和56年5月13日から実施し、昭和57年3月31日に完了した。調査件数は23件である。その内訳は個人15件、宗教法人1件、医療法人1件、その他5件と安満遺跡史跡指定予定に伴う確認調査1件である。特に、今年度は安満遺跡の確認調査が加わり、地元所有者とともに同調査を実施できたことは文化財保護活動を進める上で貴重な経験であった。以下、今年度の調査で得られた成果をもとに少しまとめてみることにする。

史跡・嶋上郡衙跡附寺跡周辺では、芥川廃寺跡のすぐ北側から同寺跡を通る水路の改修工事にともなう調査がある。調査の範囲は、史跡指定地ラインから北側府道郡家－茨木線に至る間で、幅約3mとわずかであるが、芥川廃寺跡の北に位置するところから、寺跡に関する遺構の検出を期待した。しかしながら、結果は奈良時代に属する遺構・遺物が皆無といってよいほどで、寺跡の北側に位置する調査区とは思えない状態を示していた。これより以前、寺跡内の調査区で検出していた石敷や瓦敷遺構から考えて、当然、同様の遺構・遺物が予測されたが、それにかかわる遺構・遺物は得られなかった。いかに、調査区が狭小なためとはいえ、一片の奈良時代、それも寺跡に関する遺物や遺構がみられないことは、郡衙並びに芥川廃寺を考えるとき、逆説的な意味で新たな知見を提供したと考える。なお、昭和55年度に府道郡家－茨木線の北側で行った調査結果では、7世紀後半に属する遺構・遺物が検出されているが、やはり、これに続く資料はなく、今後の周辺地域の調査を待つところである。

つぎに富田遺跡に隣接する教行寺跡の調査もまた、注目すべきことである。調査区が富田遺跡として周知されておらず、現在も教行寺として引き続がれているところにあたり、今回、新しく堂宇を建立するために、寺域の一部を売却したため調査を実施することとなった。教行寺跡は浄土真宗の寺院で、室町時代に僧蓮如が活動の拠点として建てた道場である。その後戦火にあったりしたが、その都度、再建されて現在に至っている。文献上ではその寺域はかなりの広さを有しているが、現在は本堂を中心としてわずかの広さを保っているにすぎない。調査では、文献に記載されているがごとく、焼土の層を検出している。遺物量はさほど多くないが、鎌倉時代から室町・江戸時代に至るそれぞれの遺物がみられ、今後の整理に期するところが大きい。一方、遺構については、円形状の柱穴が多数発見されていて、富田遺跡の以前の調査と合せ考える必要があろうと思われ、周辺地域の調査に期するところが大きい。

塚脇古墳群の調査では、四基の横穴式石室を有する円墳と方墳を調査している。方墳は帯仕山の東頂上に位置し、円墳は東及び南斜面裾に位置していた。塚脇古墳群は現在の塚脇一丁目を中心に式内社・神服神社北西の帯仕山南斜面裾に群集していて、方墳を主体として形成された墓域であることが明らかになっている。しかし、今回の古墳は、円墳が主で、以前の調査でもこの附近では円墳のみが確認されている。時期についてはほぼ同じと考えられるが、古墳の形状並びに立地から考えて、塚脇古墳群として一体をなすものと思われるが、一方で浦堂地区での集落の調査が進んでいないため、一体として考えられるものかどうか疑問な点が残る。なお、山頂に位置する方墳は塚原

古墳群のM・N群と同様の時期に相似する。石材は芥川の川原石を使用することもこの古墳の1つの特徴と考えてよい。また、同墳の墳頂からは火葬骨を納めた蔵骨器が出土している。この浦堂地区での蔵骨器の出土は、現在大蔵司遺跡の西方、墓谷古墳群内で発見されたもののみで、新資料である。式内社・神服神社から大蔵司遺跡にかけては、奈良時代から平安時代に至る官衙的な遺構が存在することは以前の調査で明らかになっているが、その実体は不明で、今後の調査に期したい。

つぎに安満遺跡の調査は、通常行なわれる届出によるものではなく、史跡指定予定にともなうものであった。安満遺跡については以前から、その重要性は明らかにされている。最近においても、南を走る阪急京都線のすぐ北側では、自然水路を利用した井堰が発見されている。堰止めた水が落ちるところに、弥生時代前期に属する壷が、一部分を欠失した状態の完形品として出土している。その中には、うるしを入れた壷、丹塗りをほどこした彩文土器が含まれていて、水に関連する祭祀の場として貴重な資料を提供している。これらの結果を含めて、安満遺跡は、集落が営まれるすべての遺構が阪急京都線と国鉄東海道本線に囲まれた地域に存在していることが近年明らかとなってきている。

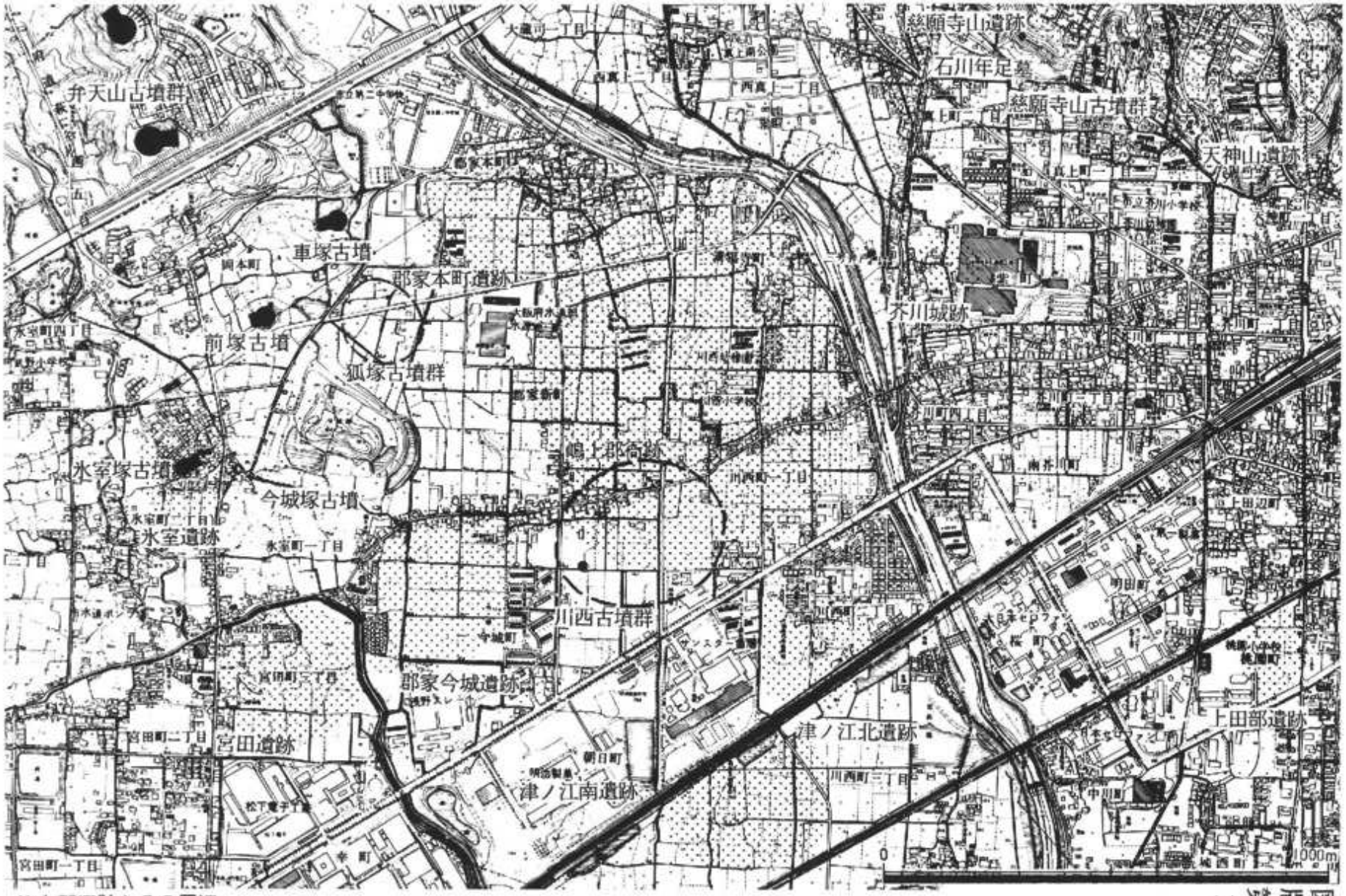
このような中で行なわれた今回の調査は、これらを裏書きするかのごとく、方形周溝墓や竪穴住居址、柱穴など多数の遺構・遺物を検出した。特に今回検出した遺構の中で注目すべき点は、Bブロックの柱穴群と竪穴住居址である。この調査区の南は以前に注目された環濠の北に位置し、出土する遺物から弥生時代前期から中期に至る集落遺構であることが明らかとなった。安満遺跡のこれまでの調査では、住居の明らかにできる資料が乏しく、その内容を明らかにするに至っておらず、今回検出できた竪穴住居址並びに掘立住建物跡は、同遺跡の全体像を組み立てるに重要な資料といえよう。今後の調査で、新たなる事実の検証に期するところが大である。

本市の歴史をみるとき、芥川をはさんで西の郡家川西遺跡と東の安満遺跡が常にその動向が語られ、注目される遺跡である。それ故に、東の安満遺跡の取扱いが注目されている。今年度及び昭和57年度の2ケ年にわたって実施される調査が今後の安満遺跡を考える上で貴重な資料を提供するとともに、永久保存への出発点となることを期して、次の調査に注目したい。（富成）

参考資料

「嶋上郡衙跡発掘調査概要」Ⅰ～Ⅴ　大阪府教育委員会　昭和46～50年
「嶋上郡衙跡他発掘調査概要」1～5　高槻市教育委員会　昭和52～56年
「高槻市史」　第1巻　昭和52年2月
「高槻市史」　第6巻　昭和48年6月
「高槻市文化財年報」　昭和47～55年

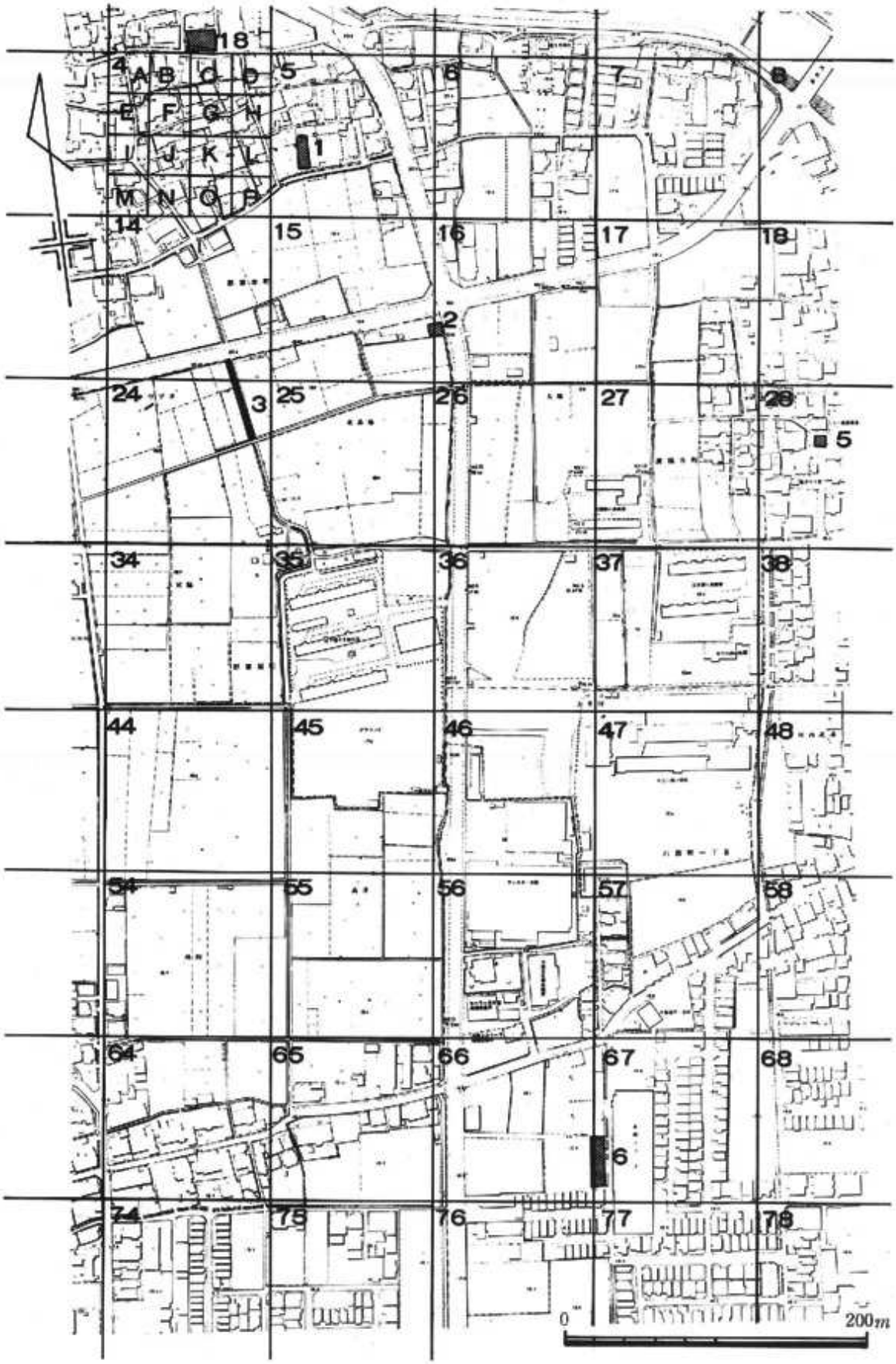
図　版



鳩上郡衙跡とその周辺

図版第一

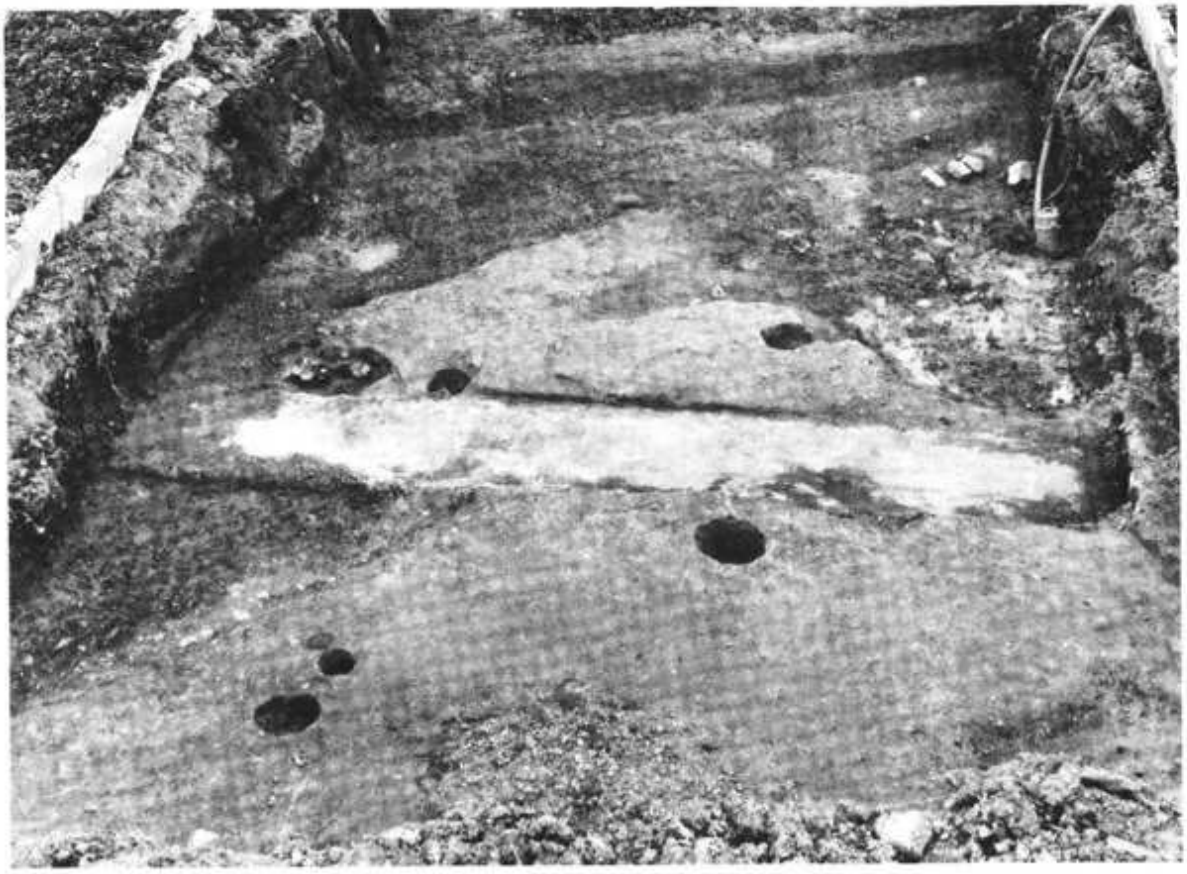
図版第2



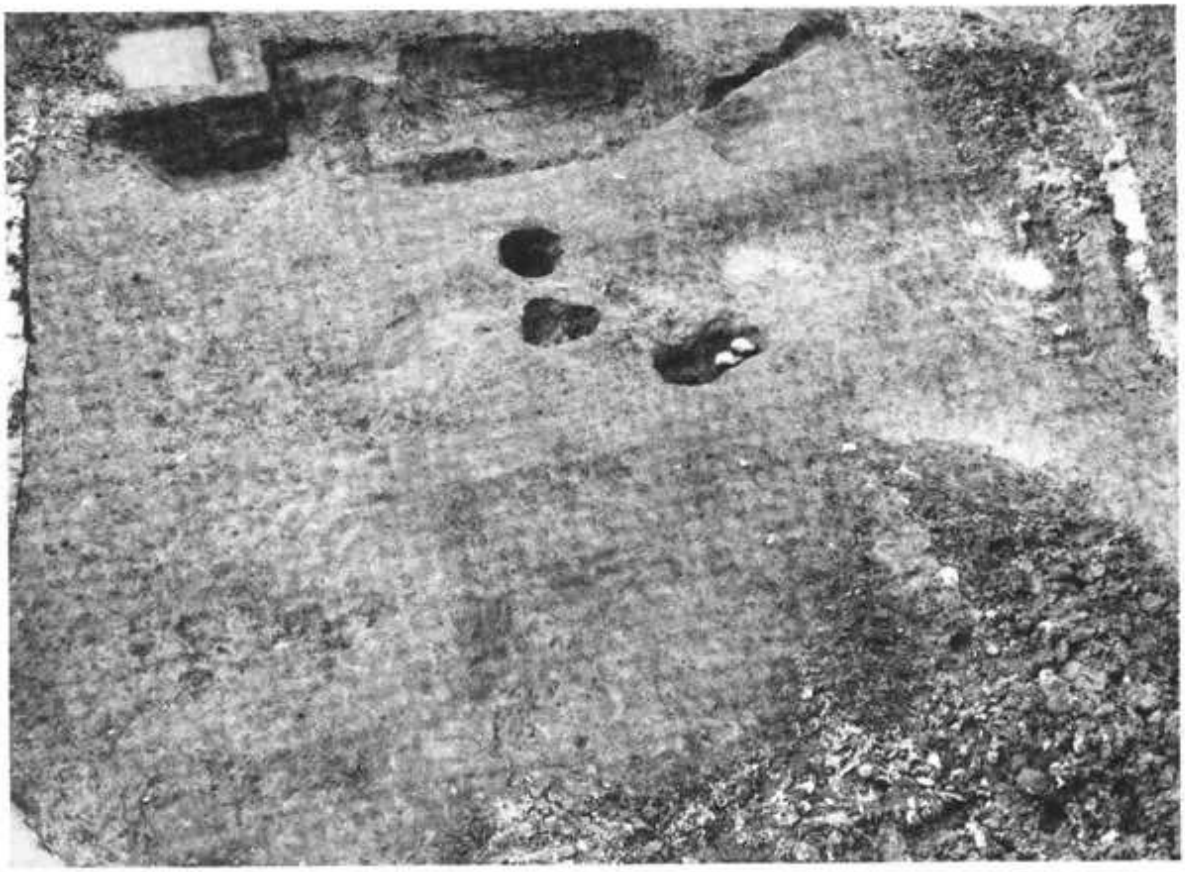
嶋上郡衙跡の調査位置図

嶋上郡衙跡

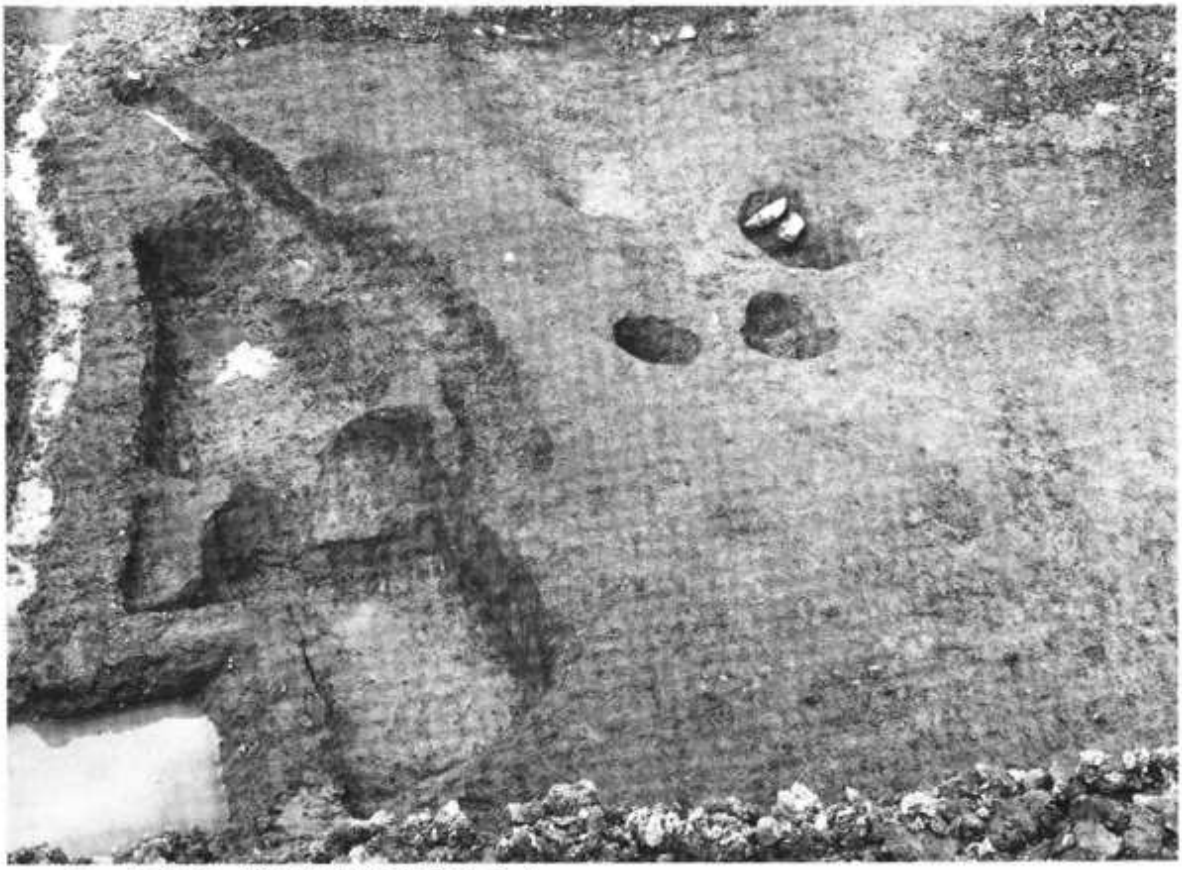
図版第4



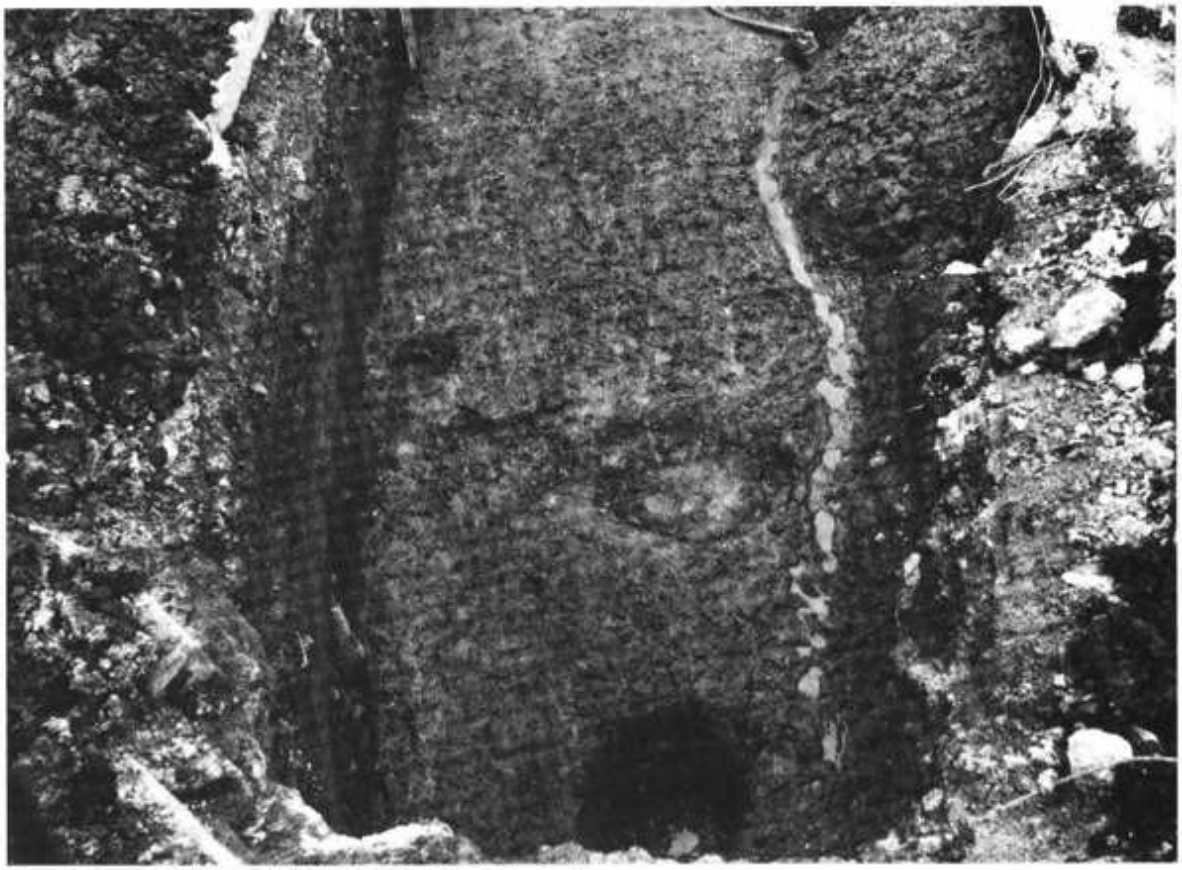
a. 5－I地区　調査区北半（北側から）



b. 5－I地区　調査区南半（北側から）



a. 5－I地区　住居址2（東側から）

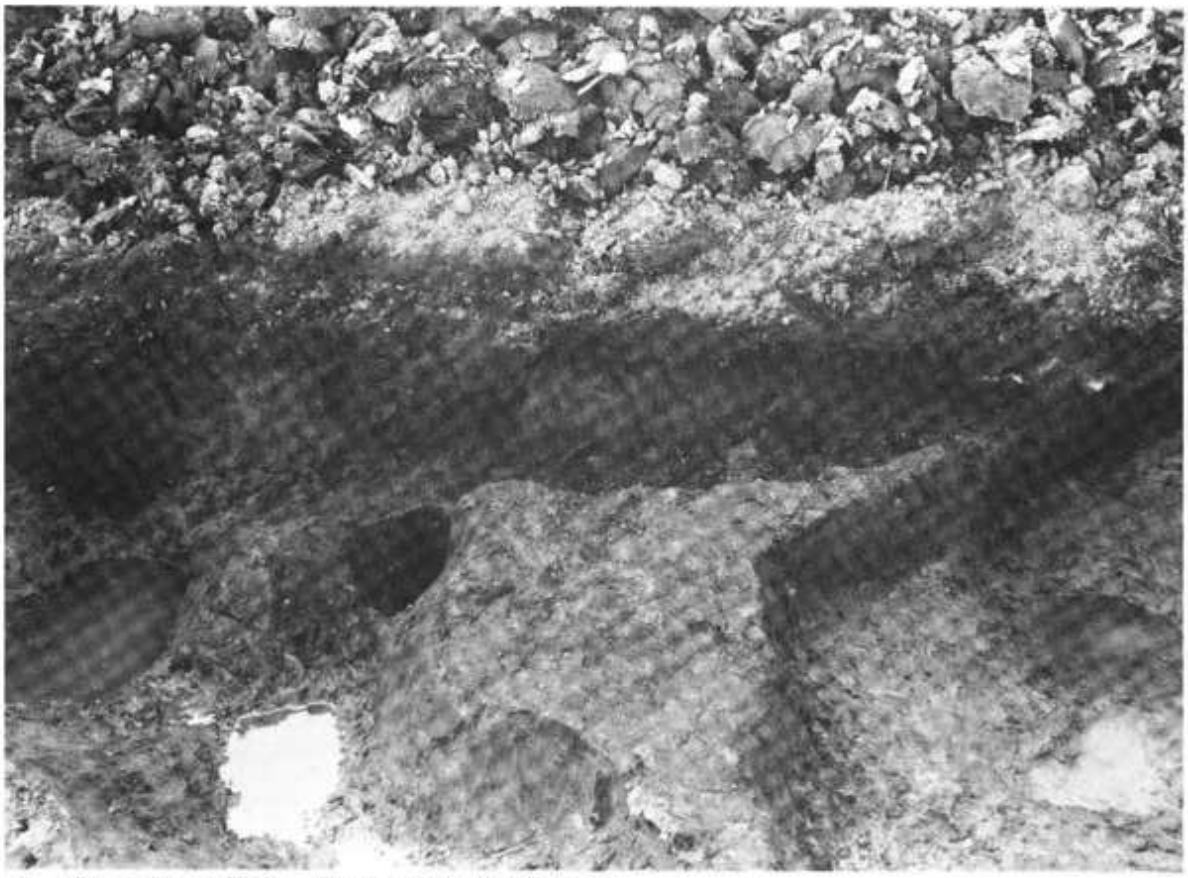


b. 16－I地区　調査区全景（北側から）

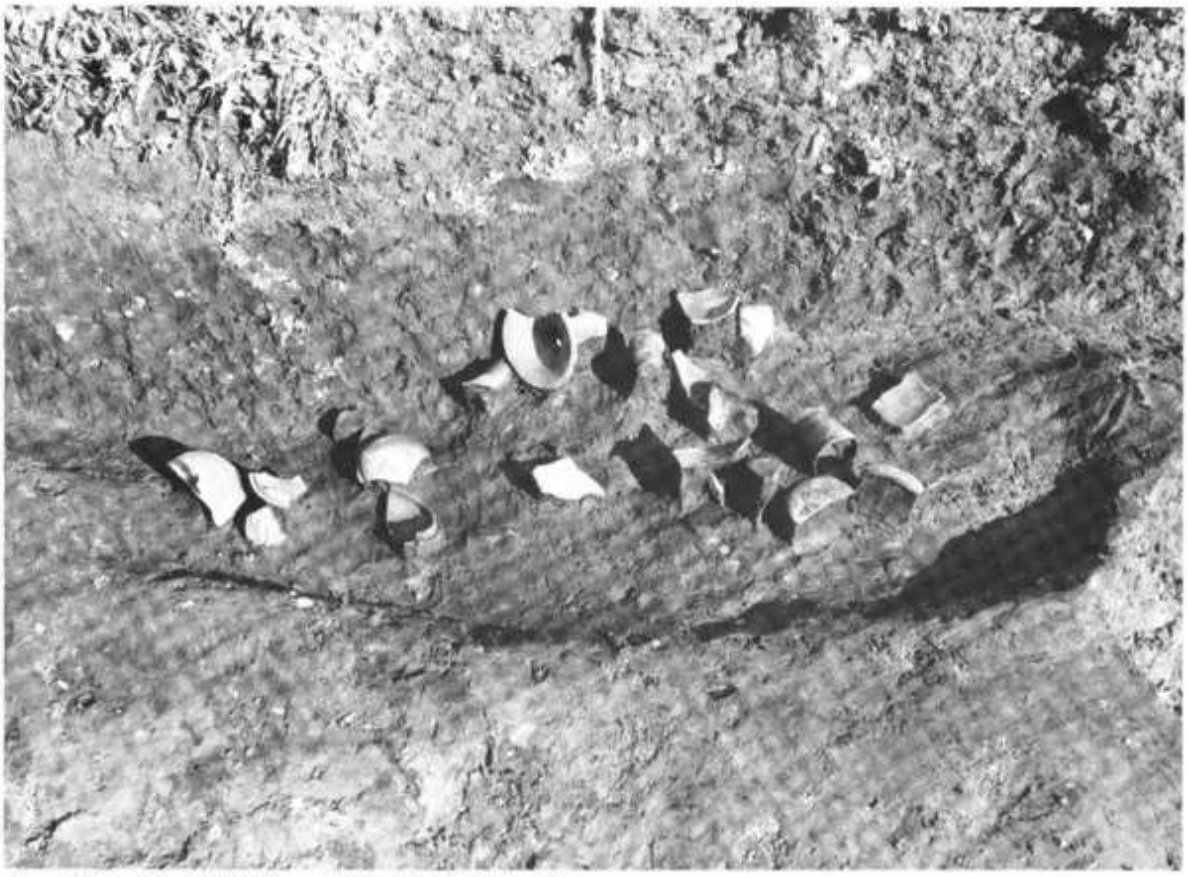
図版第6

a. 24－D・H地区　調査区全景（北側から）

b. 24－D・H地区　調査区全景（南側から）

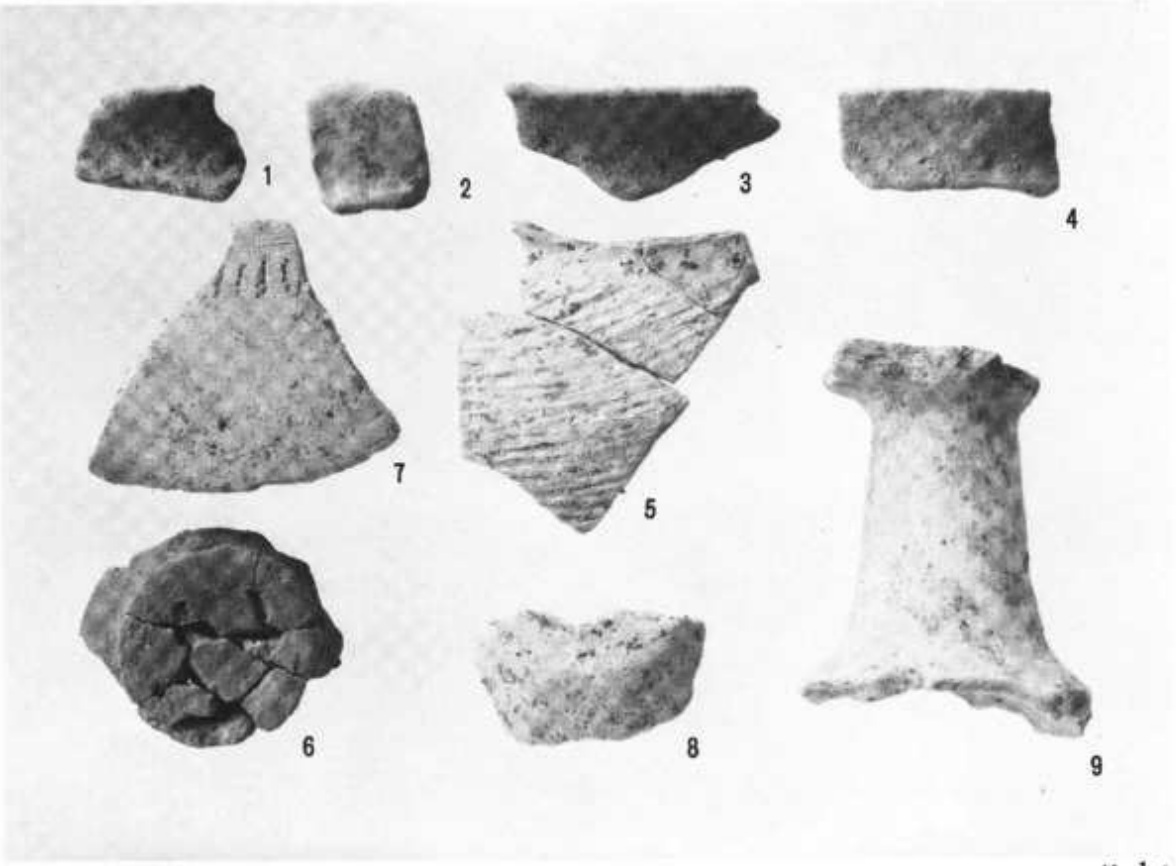


a. 24－D・H地区　溝1・2（東側から）

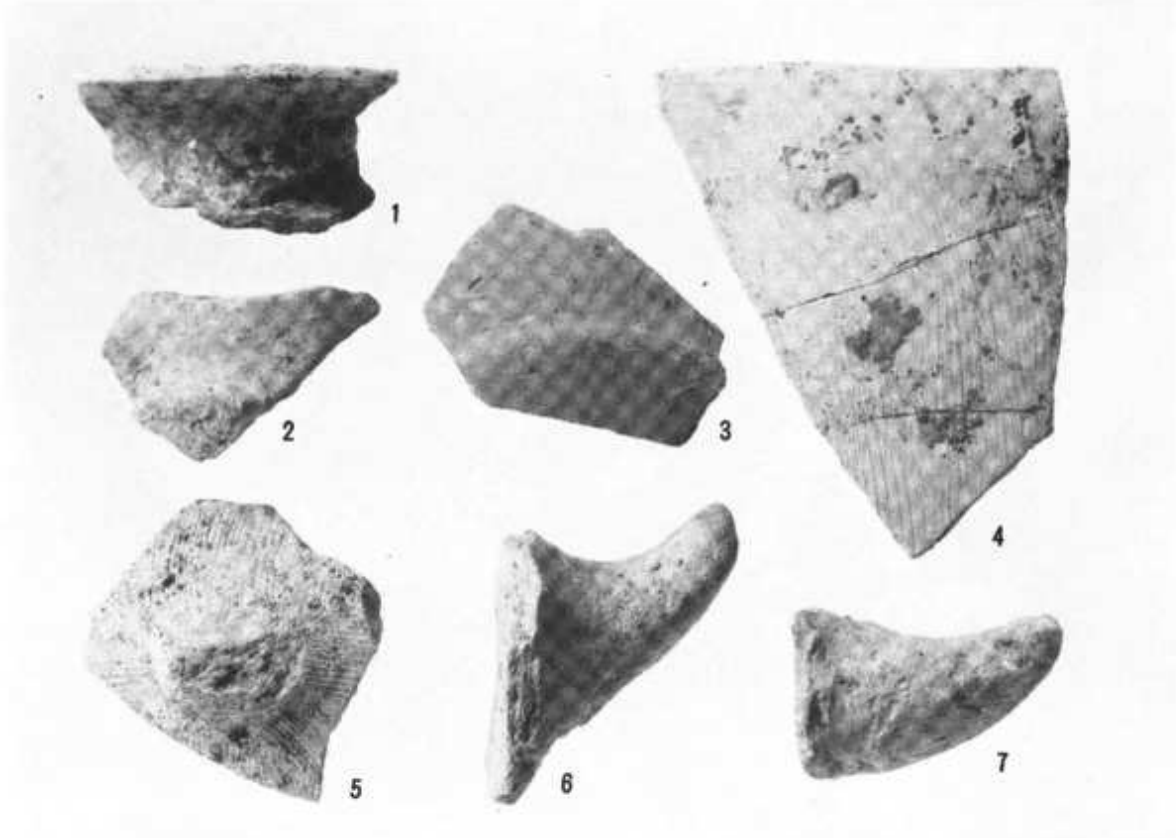


b. 24－D・H地区　土壙3（西側から）

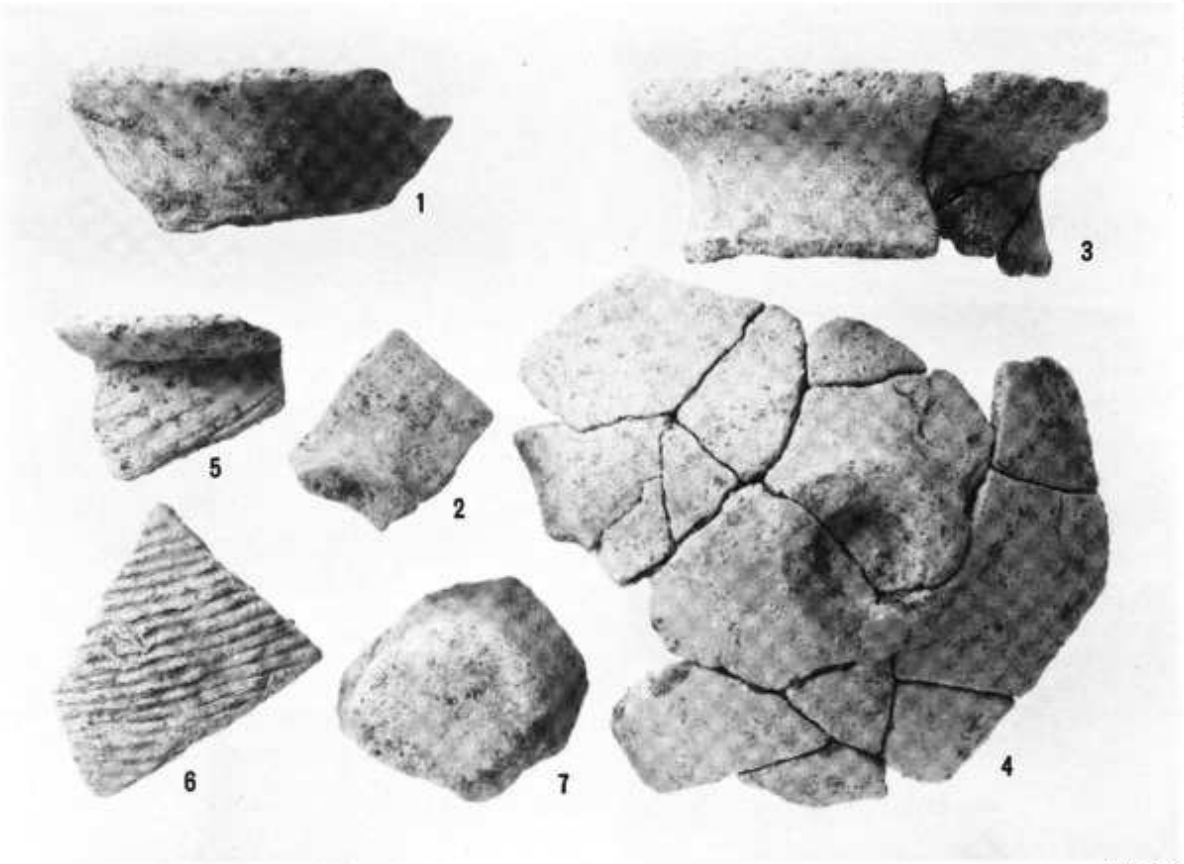
図版第8



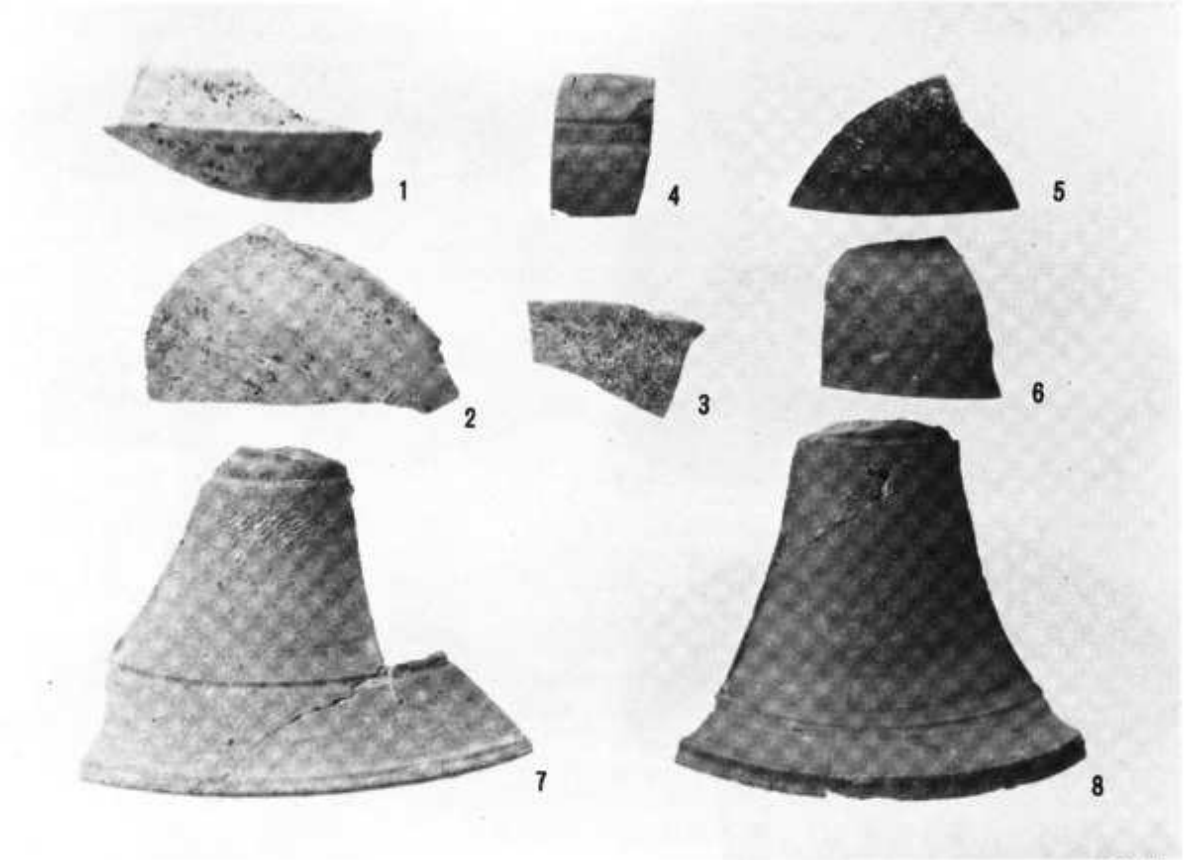
a. 5－I 地区　住居址 1 出土の土器　　約 1/2



b. 5－I 地区　溝 1 出土の土器　　約 1/2



a. 5－I地区　溝2出土の土器　　約 1/2



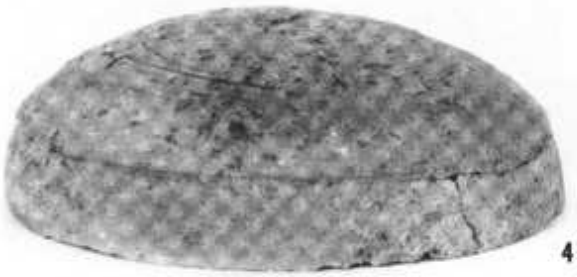
b. 5－I地区　溝2出土の須恵器　　約 1/2

図版第10

1

2

3


4

5

6

7

8

9

5 －I地区　土壙１出土（1），溝２出土（2～8）の遺物
28－B地区　包含層出土（9）の遺物
(1)C－16.2，(2)C－12.3，(3)C－8.8，(4)C－15.4，(5)C－15.7，(6)C－15.5，(7)C－13.7，(8)C－10.0
(9)C－11.3

1

2

3

4

5

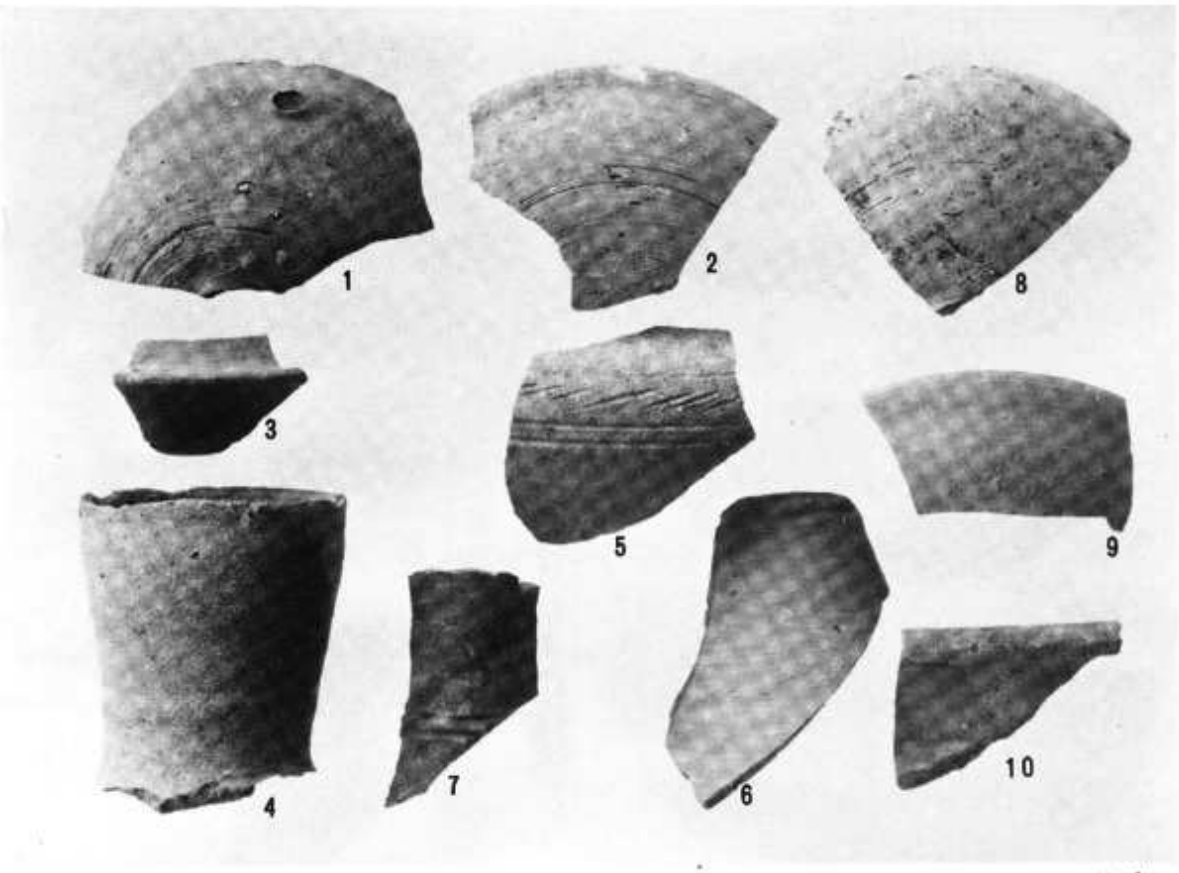
6

7

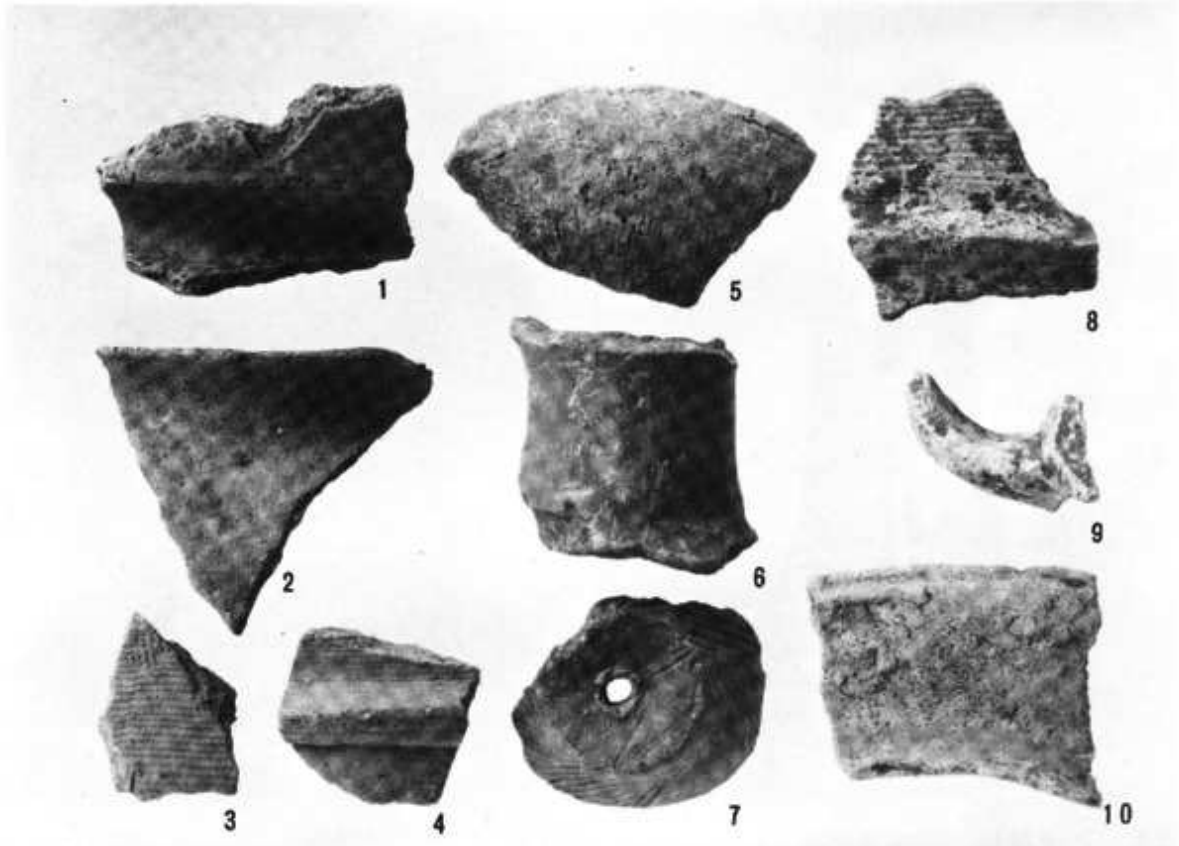
8

24－D·H地区　土壙3出土（1～4），包含層出土（5～8）の遺物
(1)C－10.9，(2)C－10.7，(3)C－11.7，(4)C－13.1，(5)C－20.7，(6)C－22.0，(7)C－12.7，
(8)C－14.8

図版第12



a. 24—D・H地区　土壙3出土（1～7），包含層出土（8～10）の須恵器　　約 1/2

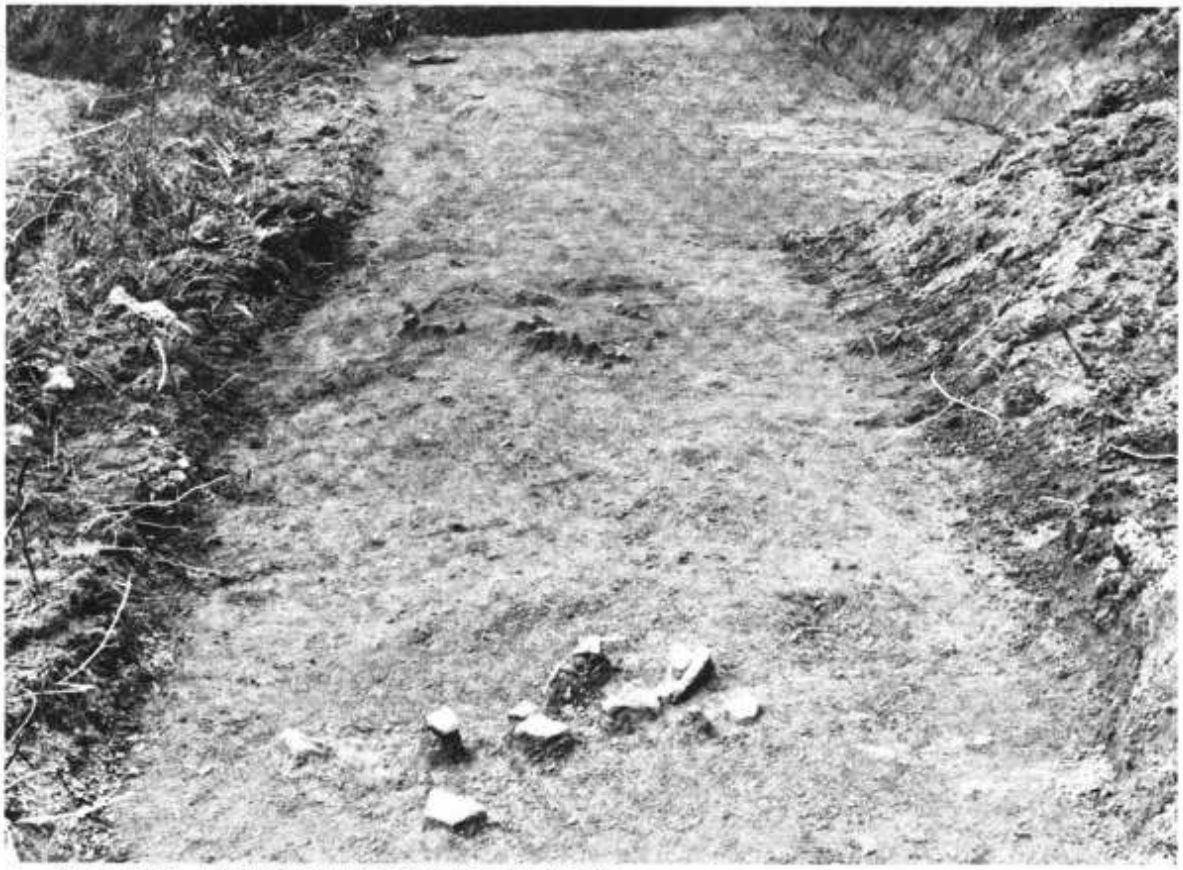


b. 24—D・H地区　土壙3出土（1～4），包含層出土（5～10）の土器　　約 1/2

a. 番山古墳　調査区全景（南側から）

b. 番山古墳　調査区全景（東側から）

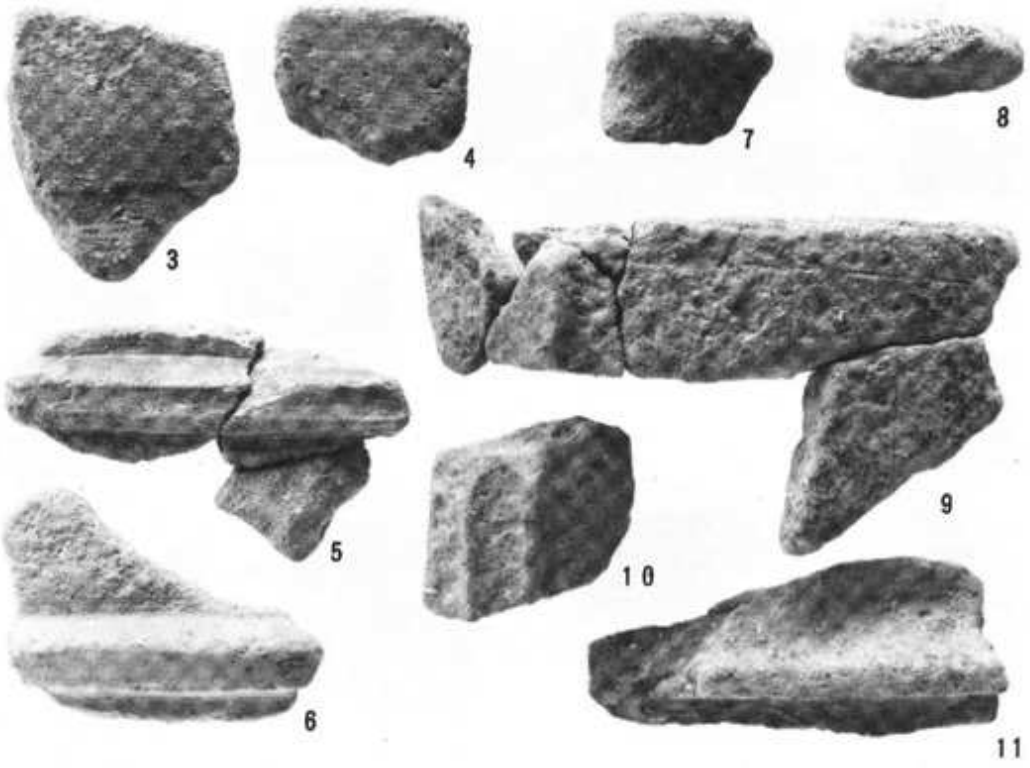
図版第14



a. 番山古墳　埴輪列出土状態（東南側から）

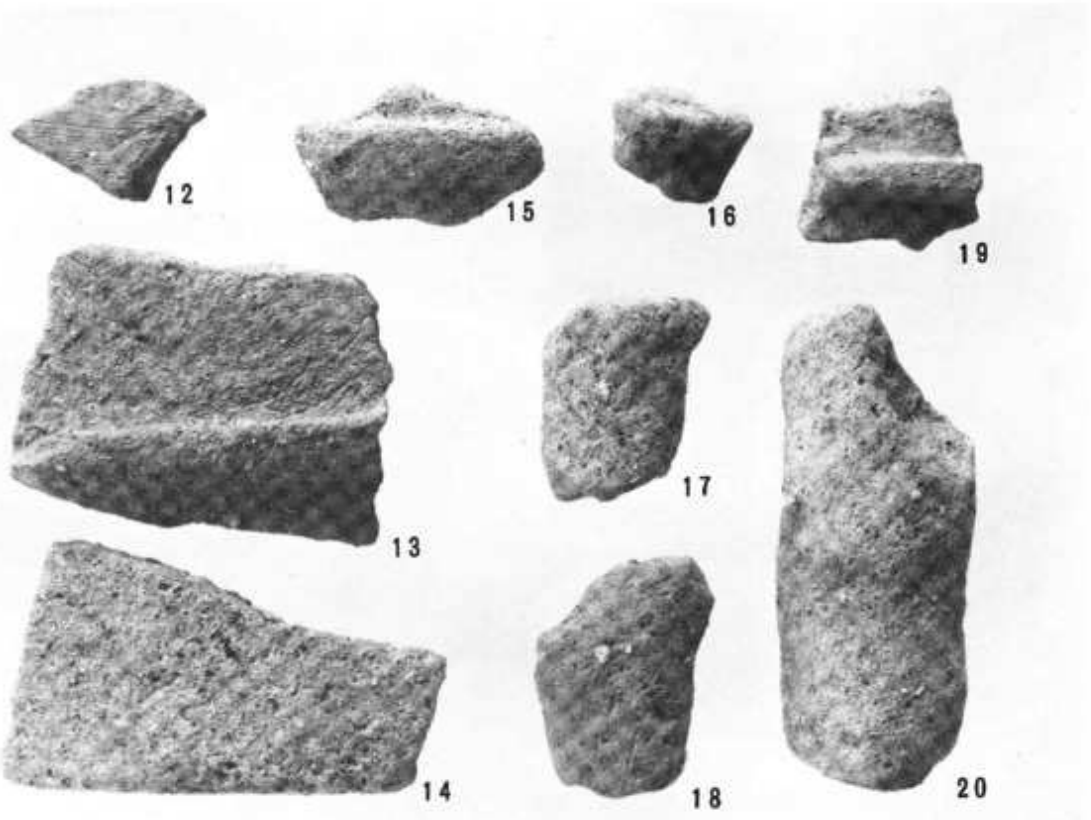
b. 番山古墳　埴輪出土状態（北側から）　1.埴輪No. 1　2. 埴輪No. 3

a. 番山古墳　円筒埴輪（1・2）
(1)C—37.0、(2)C—38.0

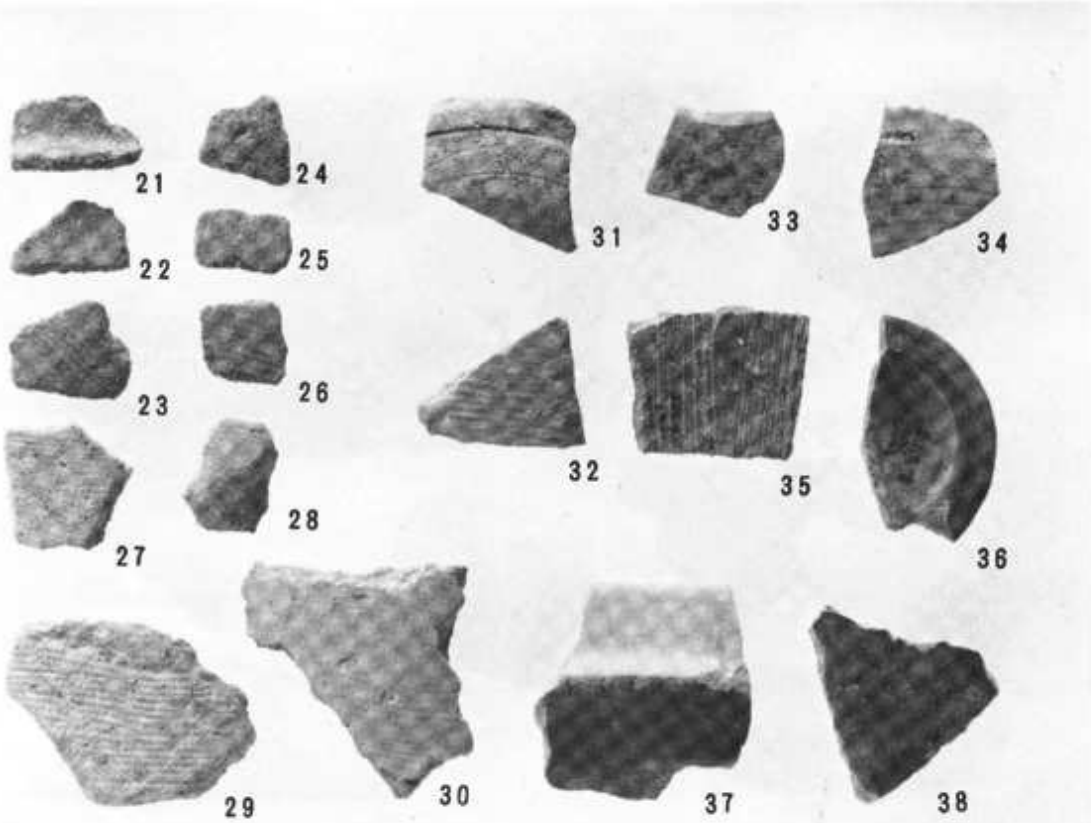


b. 番山古墳　埴輪形3（3～6），埴輪形4（7～11）　約½

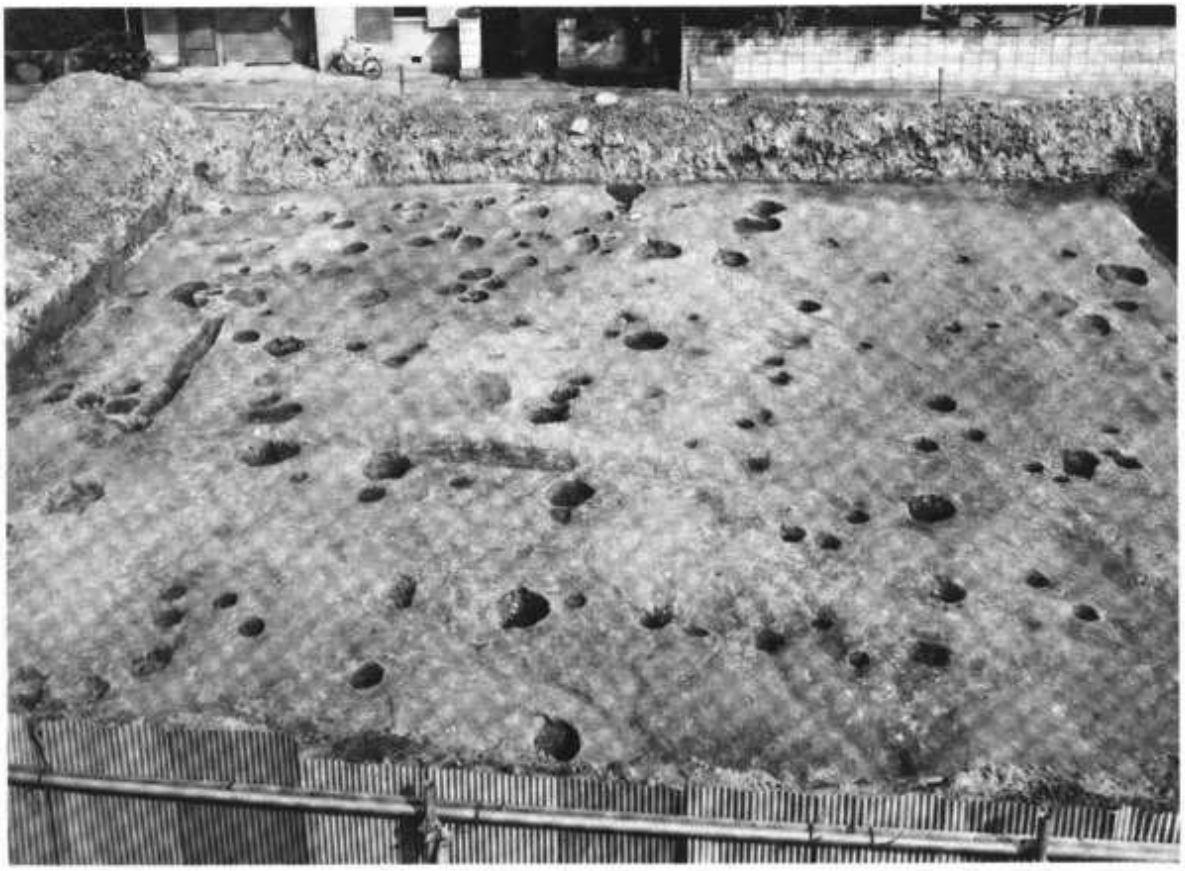
図版第16



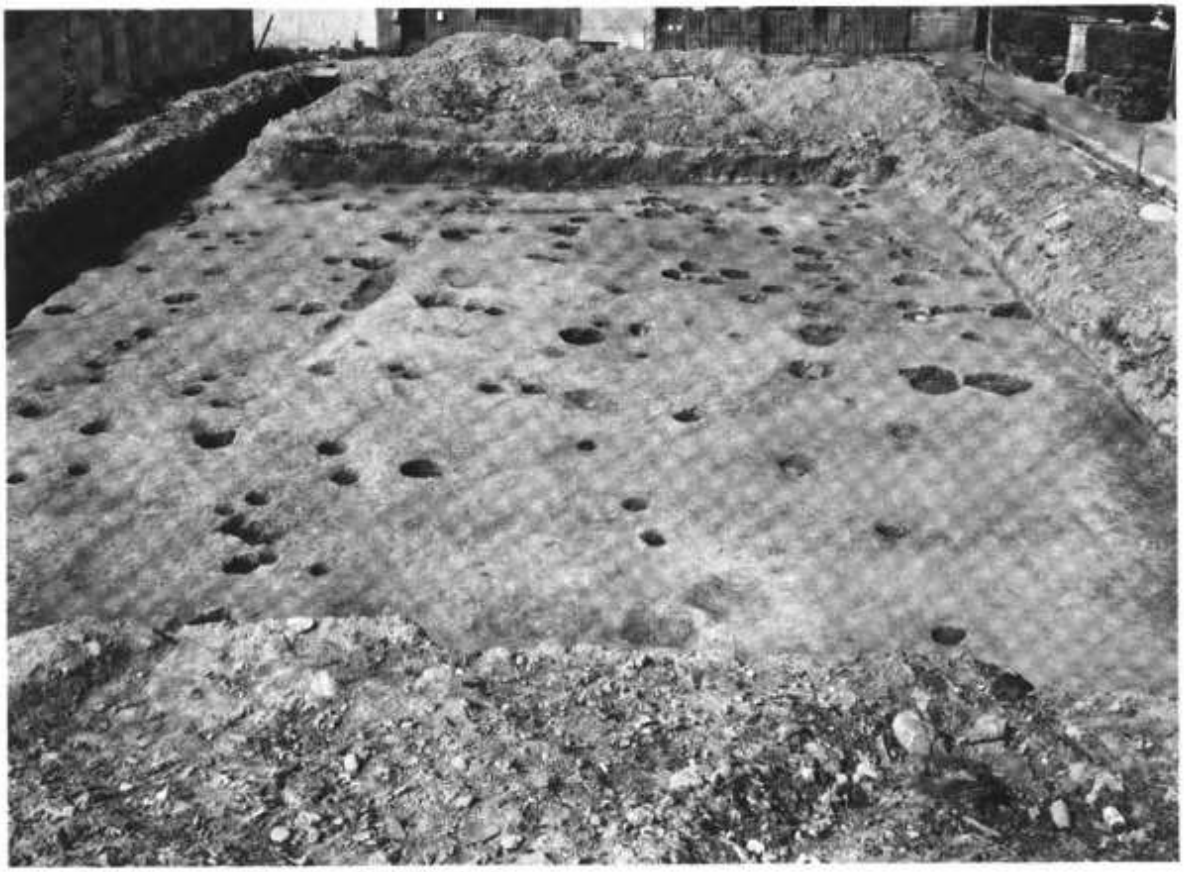
a. 番山古墳　埴輪A 3・4の下（12·13·17～19），A 4の下（14～16·20）　約 1/2



b. 番山古墳　埴輪A 3（21～26），A3·4の下（32～34·37），
濠内埋土（27～31·35·36·38）出土の遺物　約 1/2

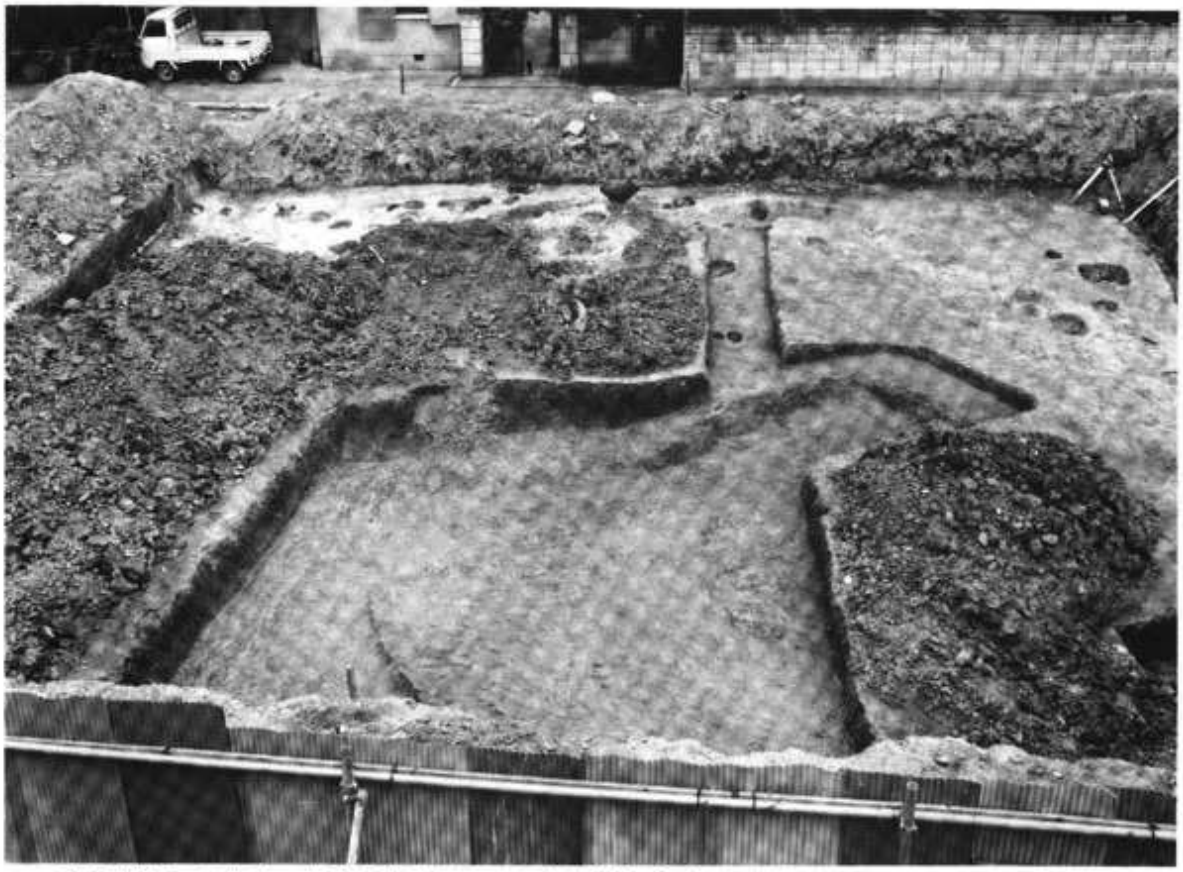


a. 富田遺跡　上層全景（南側から）

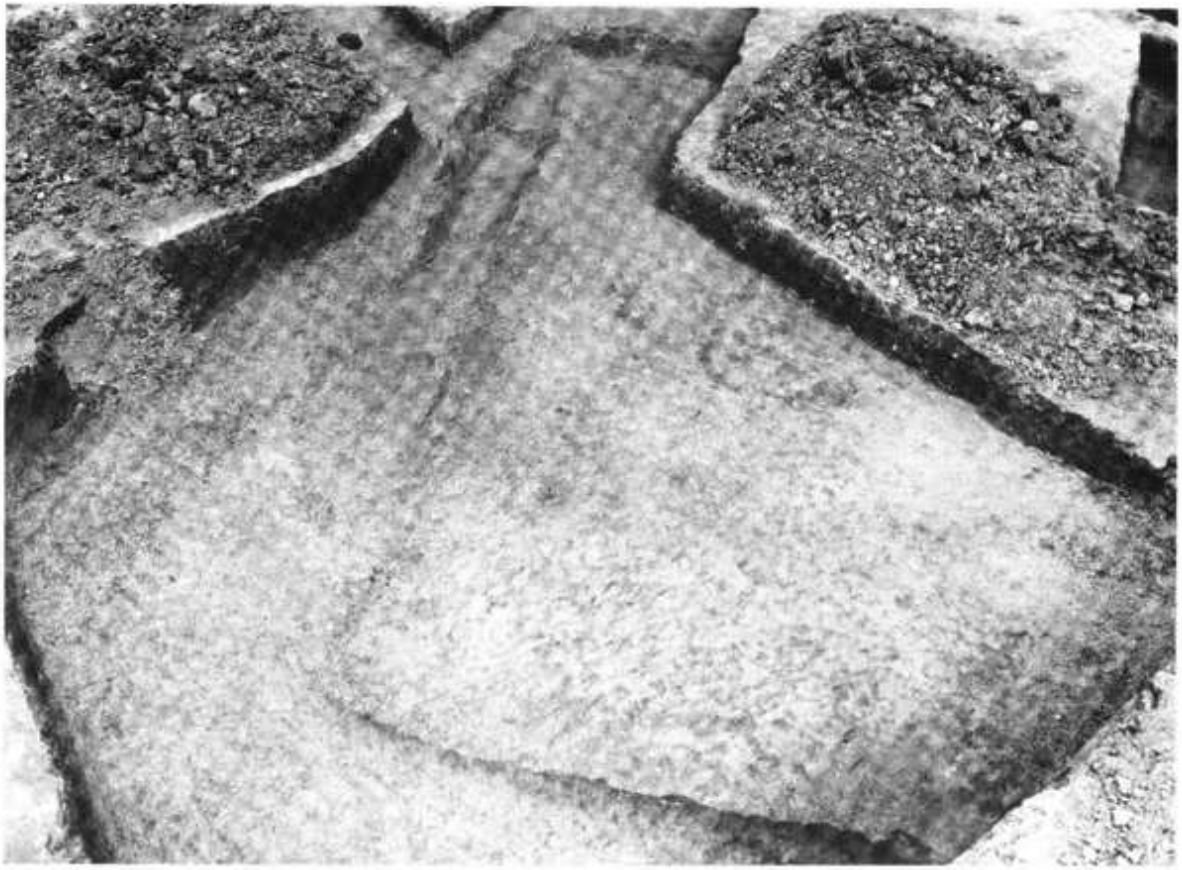


b. 富田遺跡　上層全景（東側から）

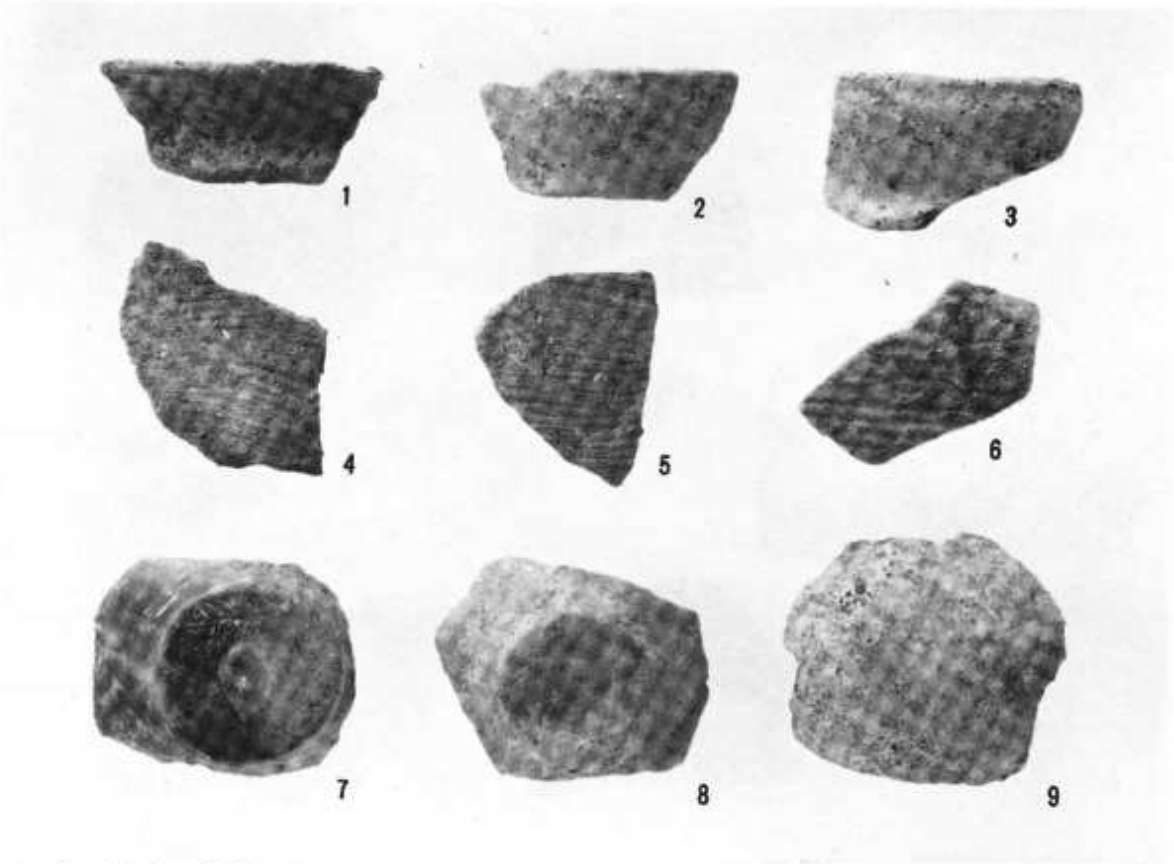
図版第18



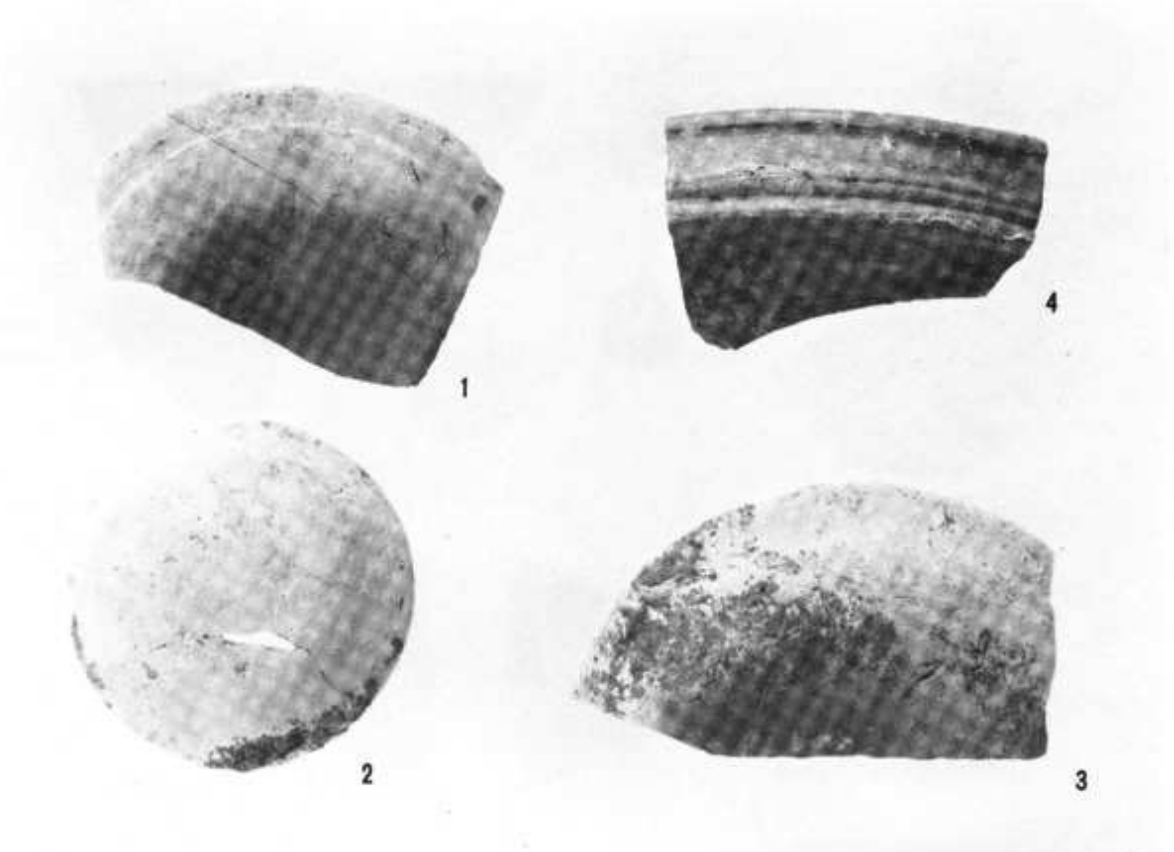
a. 富田遺跡　下層　方形周溝墓１・２（南側から）



b. 富田遺跡　下層　方形周溝墓１（南西から）

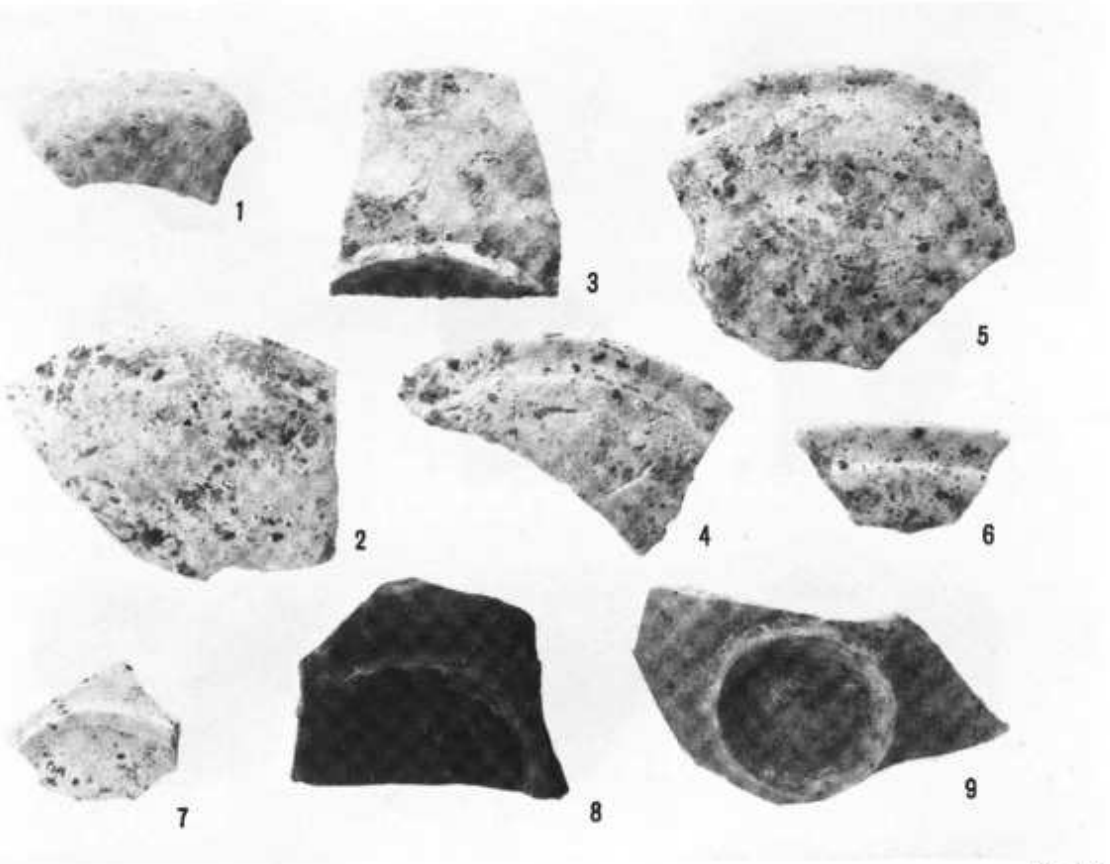


a. 富田遺跡　方形周溝墓1出土の遺物（1～9）　約 1/2

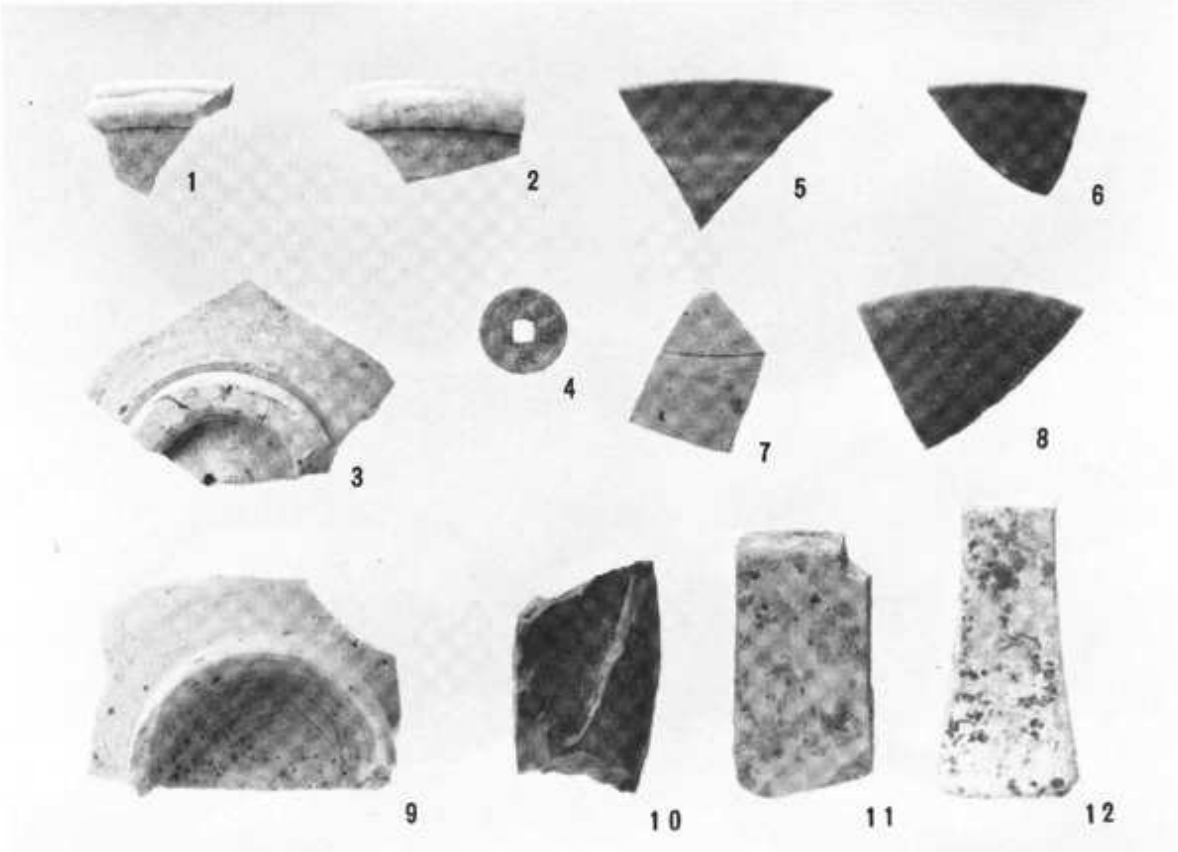


b. 富田遺跡　土壙1出土の遺跡（1～4）　約 1/2

図版第20

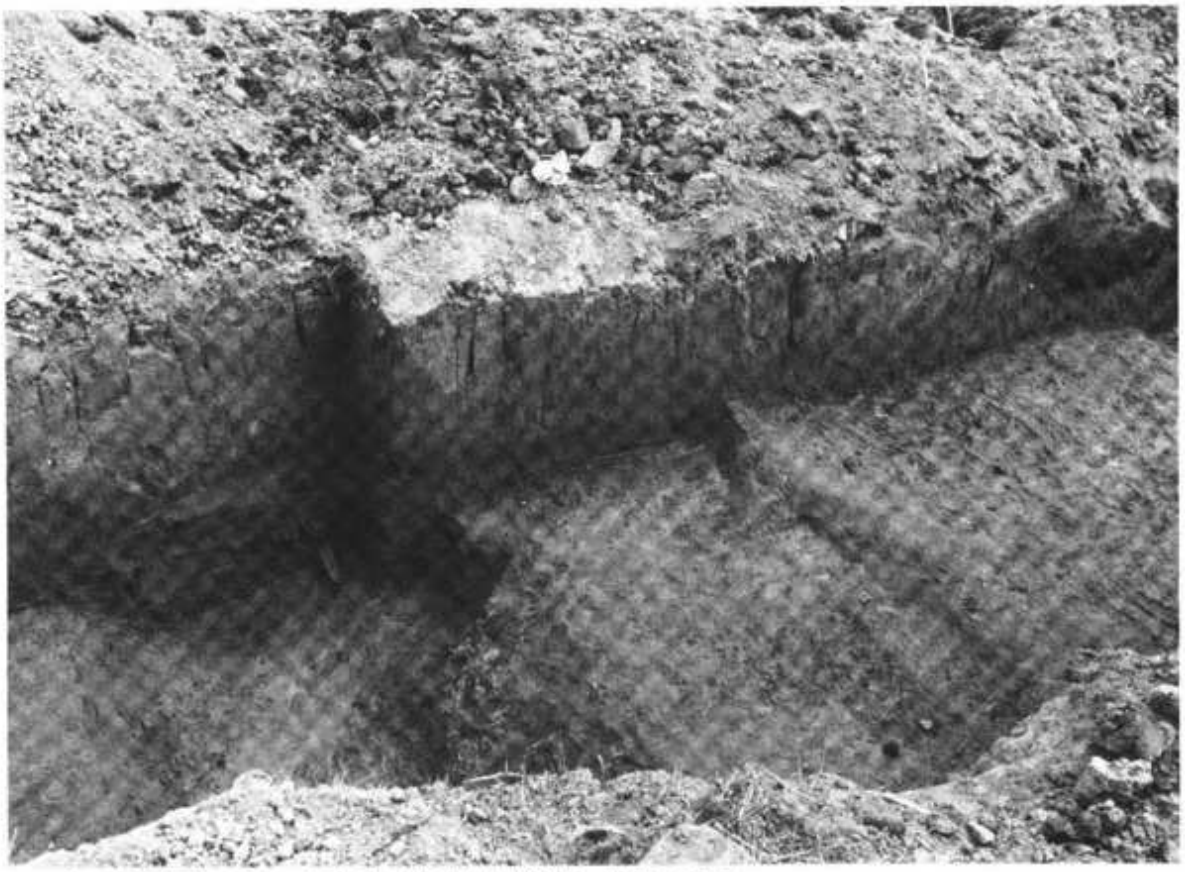


a. 富田遺跡　包含層出土の遺物　　約 1/2



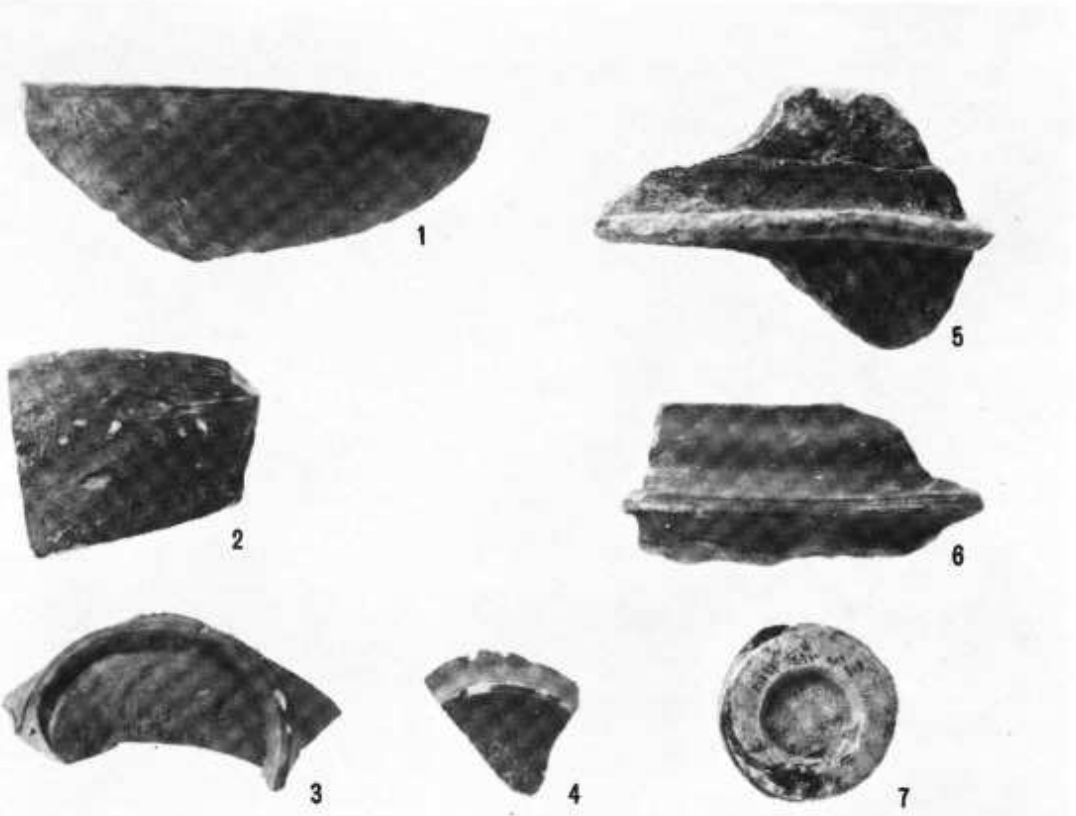
b. 富田遺跡　包含層出土の遺物　　約 1/2

a. 上田部遺跡　東D調査壙全景（西側から）

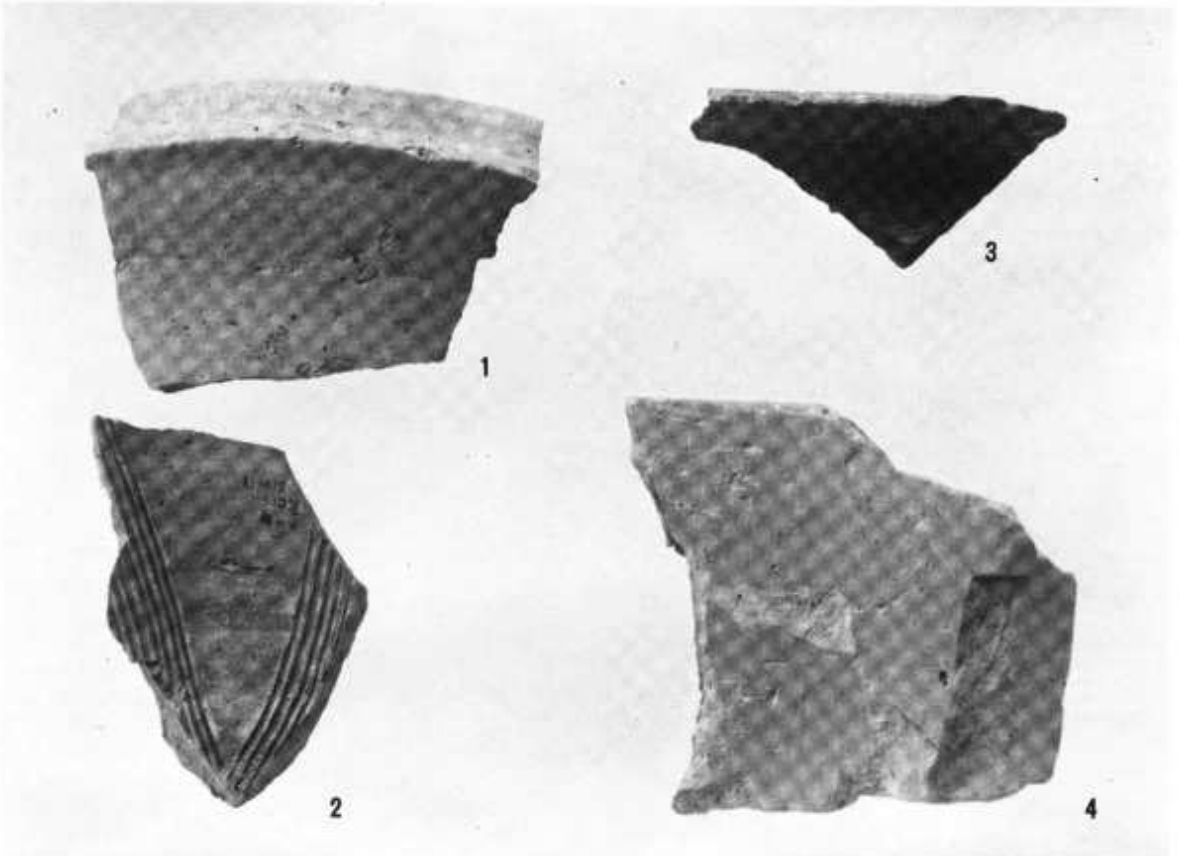


b. 上田部遺跡　東D調査壙　溝 検出状況（北側から）

図版第22



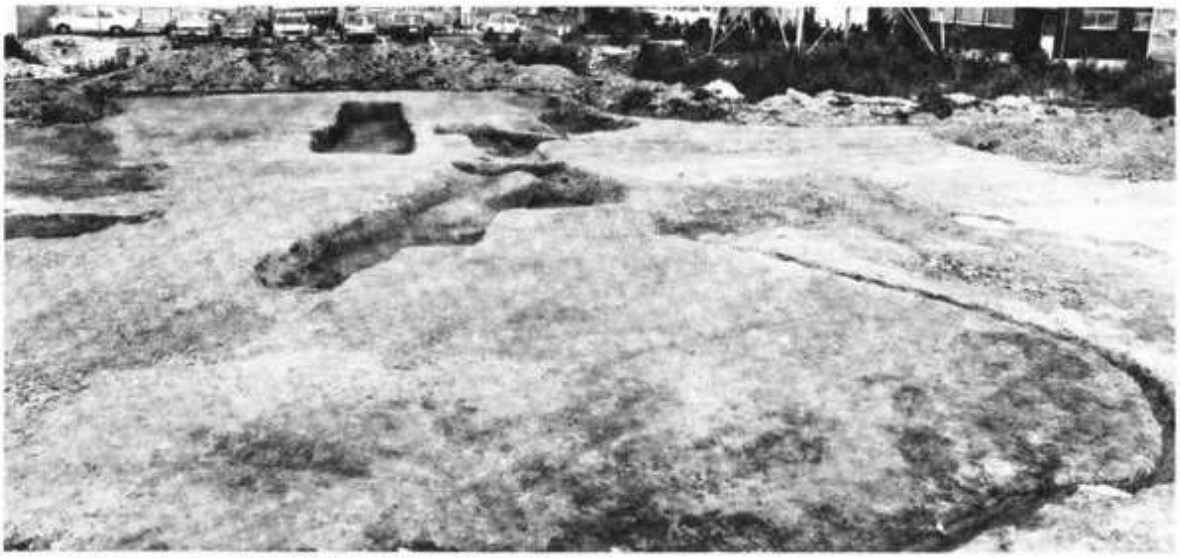
a. 上田部遺跡　東C（1），東D（2～4・7），東B(5)，東E(6)調査壙出土の遺物　約1/2



b. 上田部遺跡　東C（1・2・4），東E（3）調査壙出土の遺物　約1/2

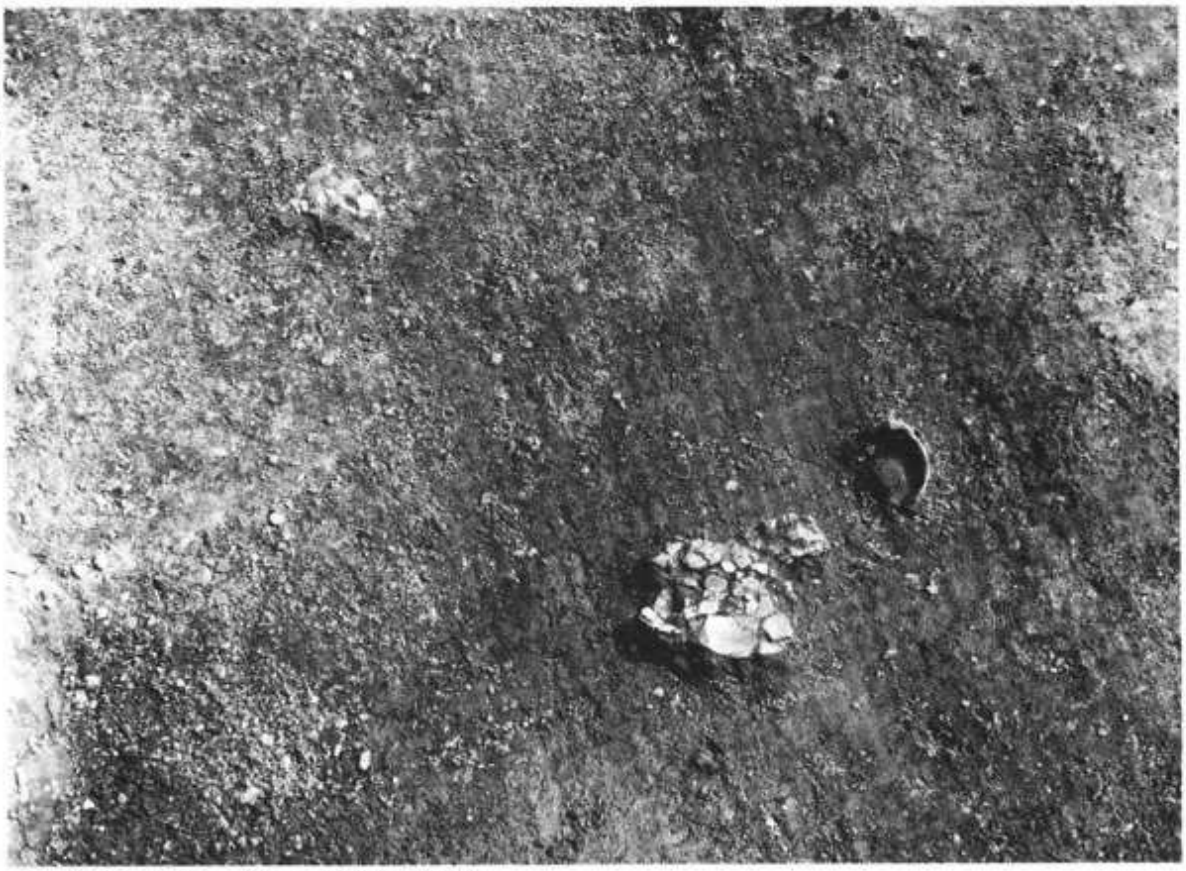
a. 大蔵司遺跡　上層遺構全景（北側から）

b. 大蔵司遺跡　上層遺構全景（南側から）

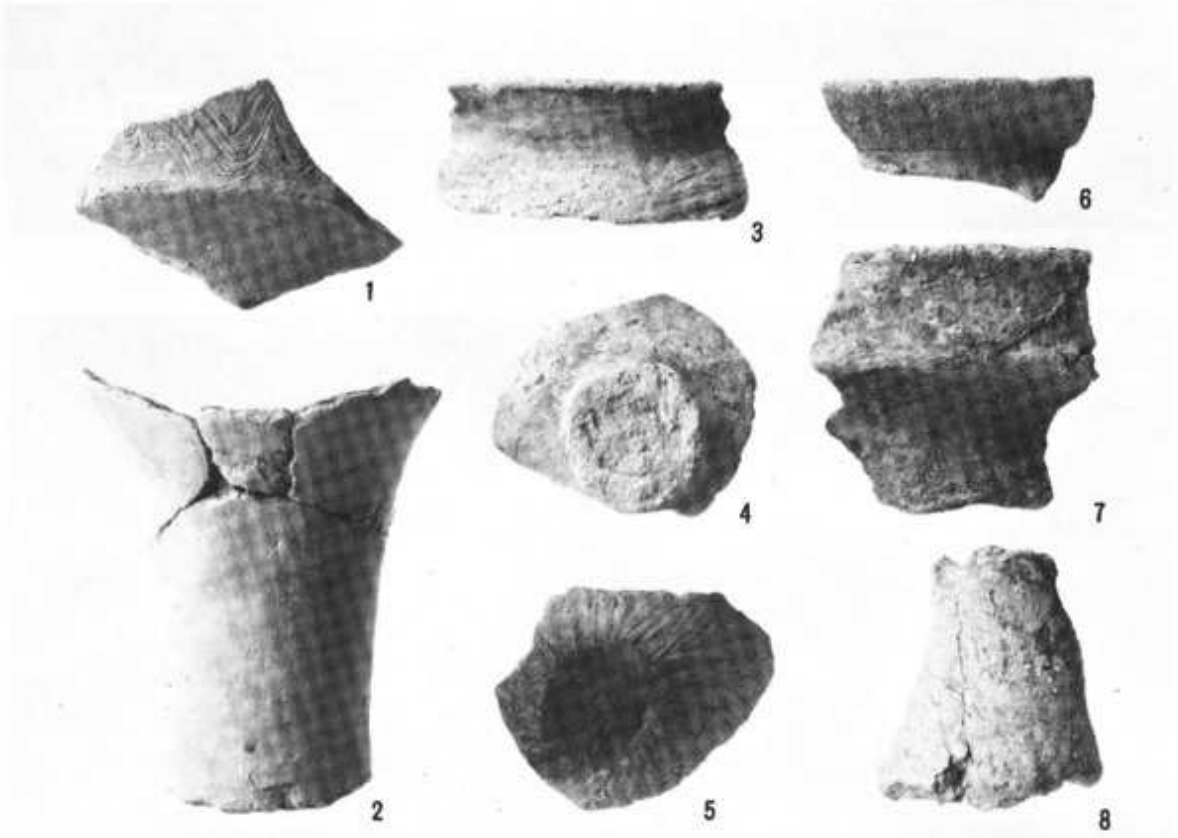


c. 大蔵司遺跡　下層溝検出状況（東側から）

図版第24



a. 大蔵司遺跡　溝3　土器出土状態



b. 大蔵司遺跡　溝2（1～5），溝3（6～8）出土の土器　　約1/2

9

12

10

13

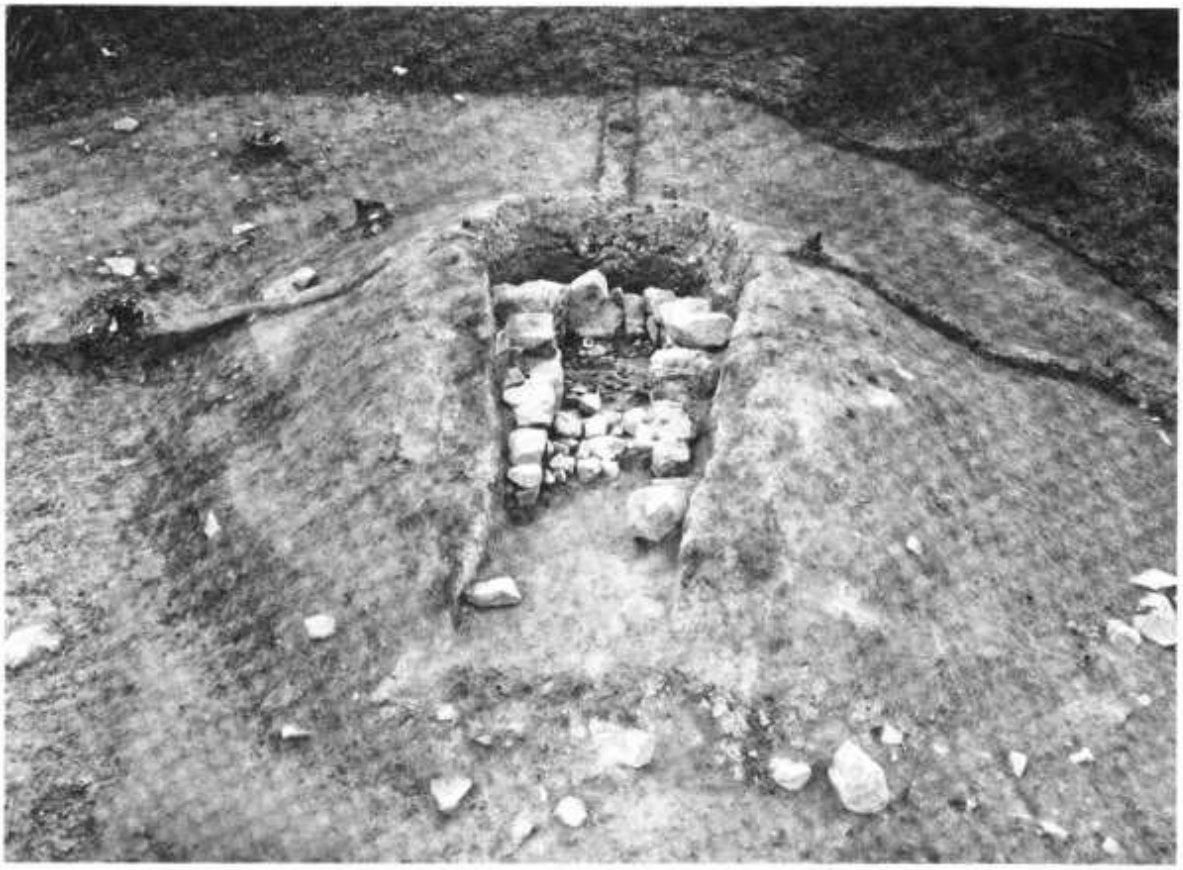
11

14

大蔵司遺跡　溝2（9～11），溝3（12～14）出土の遺物
(9)h－10.7，(10)C－10.1，(11)C－8.8，(12)h－11.4，(13)h－7.2，(14)h－8.1

図版第26

a. 塚脇C－6号墳　調査前の状況（南側から）



b. 塚脇C－6号墳　全景（前面から）

塚脇C－6号墳　石室全景（前面から）

塚脇C－6号墳　石室内の遺物出土状態（背面から）